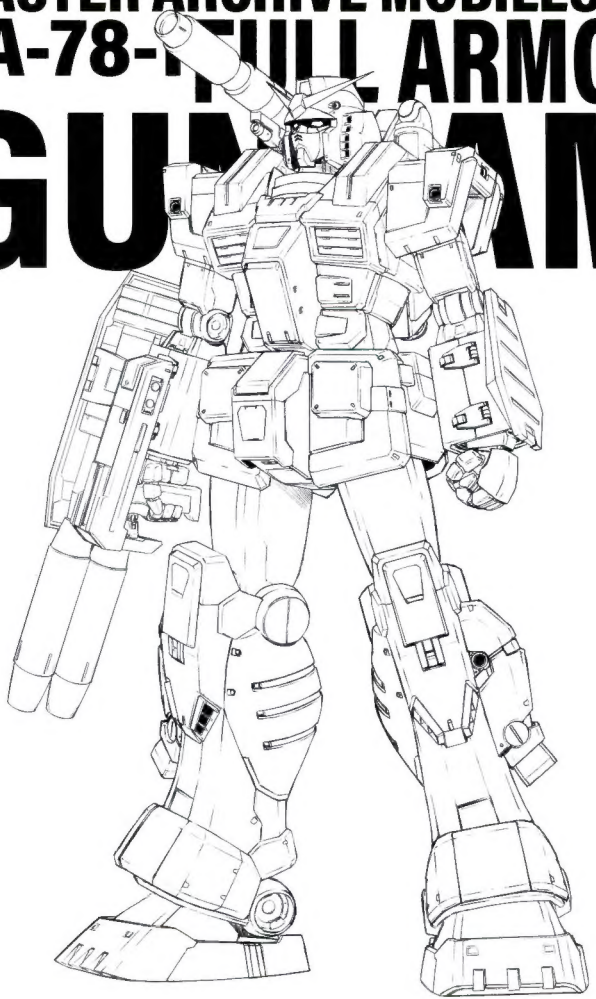
マスターアーカイブ モビルスーツ FA-78-1 フルアーマー・ガンダム

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM



マスターアーカイブ モビルスーツ FA-78-1 フルアーマー・ガンダム

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM

幻(まぼろし)のモビルスーツ「フルアーマー・ガンダム」は実在したのか?

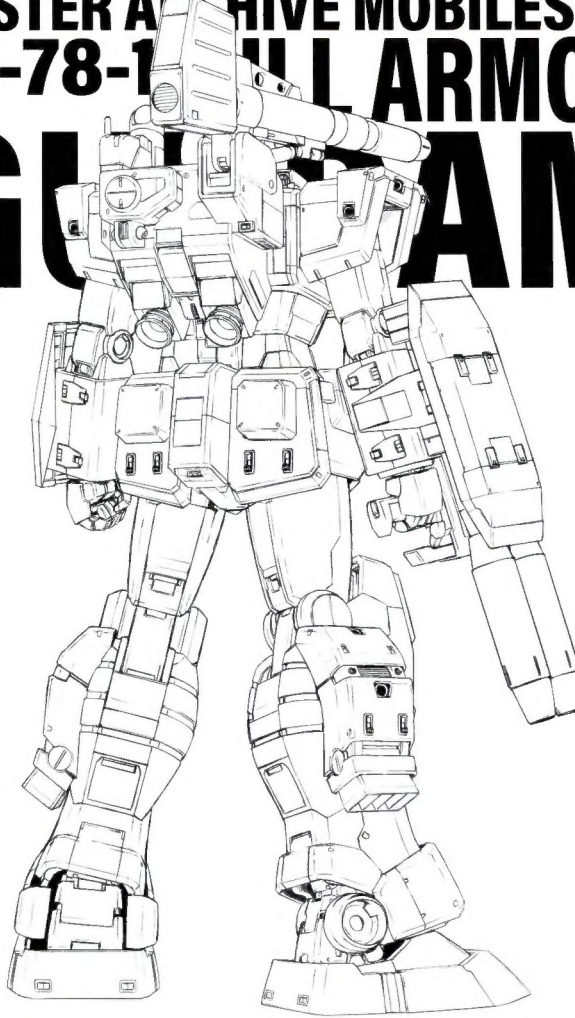
ガンダム強化プラン FSWS計画の全貌

MSを実在する機動兵器として解説する専門書籍「マスターアーカイブ モビルスーツ」シリーズ最新刊!!

「フルアーマー・ガンダム」をはじめとするFSWS計画機を
描き下ろしビジュアルと膨大なテキストで紐解くMS研究書

マスターアーカイブ モビルスーツ FA-78-1 フルアーマー・ガンダム

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM



©創通・サンライズ

ISBN978-4-8156-0528-5
C0076 ¥2700E
9784815605285
定価 本体2,700円 +税
1920076027000

©創通・サンライズ

伝説の名機 RX-78 ガンダムのモビルスーツ・バリエーション

FA-78-1 フルアーマー・ガンダム

開発史と構造、機能、秘められた戦歴のすべてがここに！

FA-78-1〈フルアーマー・ガンダム〉／FA-78[G]〈フルアーマー・ガンダム陸戦タイプ〉／FA-78-1B〈フルアーマー・ガンダム（タイプB）〉
FA-78-2〈ヘビー・ガンダム〉／FA-78-3〈フルアーマー・ガンダム7号機〉／HFA-78-3〈重装フルアーマー・ガンダム〉／FA-78NT-1〈フルアーマー・アレックス〉
RX-78NT-1FA〈ガンダムNT-1〉"アレックス"（チョバムアーマー装備）／RX-78SP〈ガンナー・ガンダム〉／PF-78-1〈パーフェクト・ガンダム〉

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM

マスターアーカイブ モビルスーツ FA-78-1 フルアーマー・ガンダム

SB Creative

ISBN978-4-8156-0528-5
C0076 ¥2700E

9784815605285

定価 本体2,700円 +税

1920076027000

©創通・サンライズ

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT FA-78-1 **FULL ARMOR GUNDAM**

マスターアーカイブ モビルスーツ **FA-78-1** フルアーマー・ガンダム

SB Creative

マスターアーカイブ モビルスーツ FA-78-1 フルアーマー・ガンダム

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM

CONTENTS

006 FSWS 計画

012 【FA-78-1〈フルアーマー・ガンダム〉】

026 フルアーマー・ガンダムの構造とシステム

054 【FA-78[G]〈フルアーマー・ガンダム 陸戦タイプ〉】

062 【FA-78-1B〈フルアーマー・ガンダム（タイプB）〉】

068 【FA-78-2〈ヘビー・ガンダム〉】

084 【FA-78-3〈フルアーマー・ガンダム7号機〉】

100 【HFA-78-3〈重装フルアーマー・ガンダム〉】

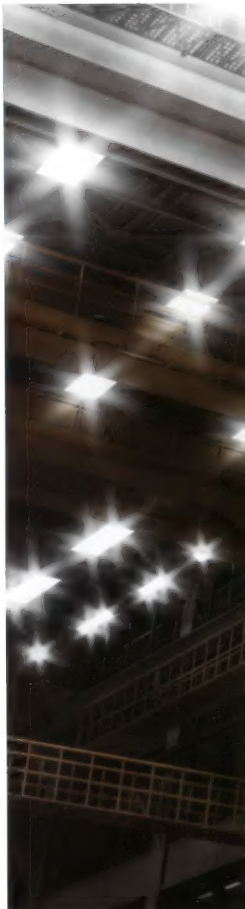
110 【FA-78NT-1〈フルアーマー・アレックス〉】

116 【RX-78NT-1FA〈ガンダム NT-1〉】

120 【RX-78SP〈ガンナー・ガンダム〉】

122 【PF-78-1〈パーフェクト・ガンダム〉】

■Text
大張千尋（"PROJECT F.S.W.S." & all variations）
大張 元・西岡浩二郎（"Structure and System of Full Armor Gundam"）
横村 空（some captions）



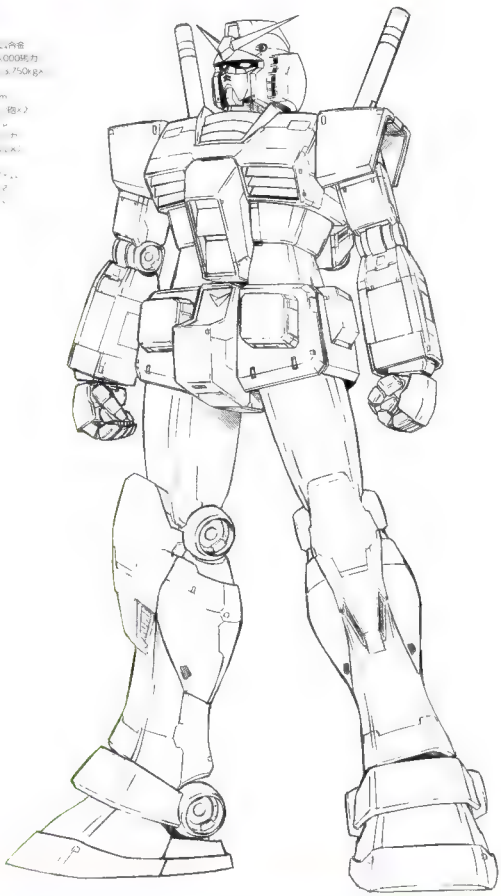
FSWS計画

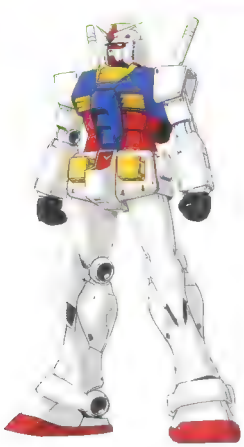
PROJECT F.S.W.S.

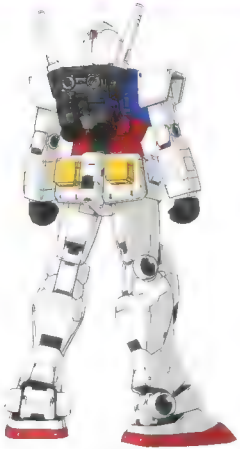
「FSWS」計画――それは、宇宙戦争中から戦後にかけて進められたRX-78ガンダムの強化パーツ計画「RX-78-2 ガンダム」に代表されるいくつかの機体を指していうのだ。「FSWS」はFederal Suit Weapon SystemやFull-armor System and Weapon Systemの略称、とされているのだが、最高ランクであるAAA級の機密指定を受けていたこともあって、現在までに明らかとなっている情報はあまりに少ない。機密レベルが下がり、ようやく軍部より公開された資料についても、その一部がシュレッダーで細切れにされ、切り出し画像であったことが後に指摘されるなど、実在性が疑わしい機体を考えられるほどの状況だ。本書は、こうした限られた資料を精査しつつ、FSWS計画機の全貌に迫るものである。

RX-78-2 GUNDAM

【ガンダム】
形式番号 [illegible]
頭部高 [illegible]
本体重量 4.5t
全備重量 6.0t
装甲材質 [illegible]合金
ジェネレーター出力 1,480kW 65,000馬力
推力 4,000kg [illegible] 3,750kg
総推力 55,500kg
センサー有効距離 5,700m
武装 [illegible]mm [illegible]力 [illegible]×2
[illegible]ライフル
[illegible]
[illegible]サーベル×[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]ダ[illegible]







【開発の概略】

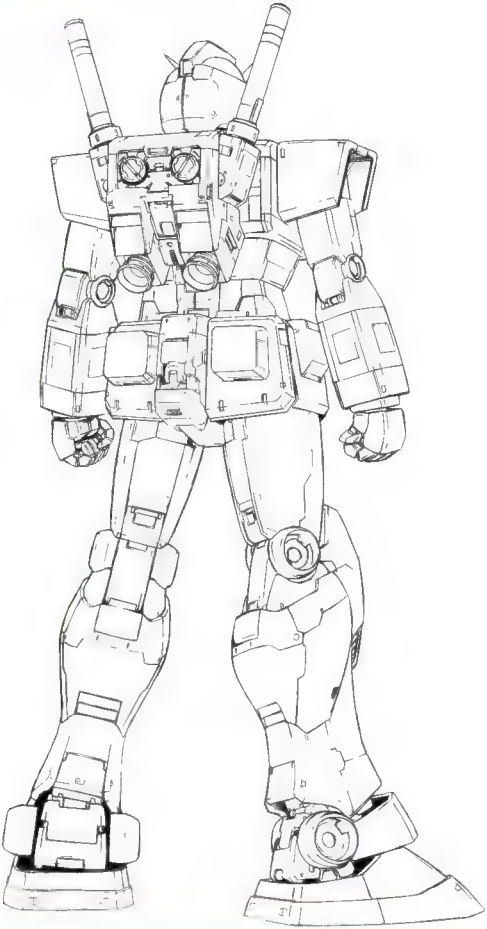
RX-78ガンダムを生み出したことで知られるV作戦は、モビルスーツ（以下MS）の実用化を目指すだけでなく、母艦を含む運用システム全般の構築を目的とした極めて大規模なプロジェクトであった。したがって、真の意味で目的が達成されるまでには、まだかなりの期間を要するはずであったが、それは「初めから織り込み済み」であり、その副産物ともいえる[illegible]RX-[illegible]機[illegible]はV作戦とは別個に[illegible]進められていた。[illegible]RX-78の強化発展を[illegible]いくつかの開発計画にあっても、最初期のバージョンであるRX-78-1の設計段階から検討が開始され、その後、様々な試作機を生み出していった。

例えば[illegible]フルアーマー・オペレーション[illegible]と呼ばれる開発計画についても、その例に含まれるだろう。NAA級の機体評価の対象となっていたRX-78系の強化計画ともなれば、[illegible]の機体[illegible]ことも必ず[illegible]ある。したがって、このプロジェクトの成立時期や経緯についてはまだ情報が少ないのだが、関係資料を総合するとおおよそ次のような流れになるものと思われる。

先述のとおり、RX-78の強化発展を図る方法論の検討については、RX-78-1の基礎設計段階から始まっており、複数の開発機関で同時並行的に進められていた。この内、[illegible]要塞ルナIIに併設されていた兵器工場に所属するグループが、3つのコンセプトを連邦軍[illegible]開発局に提案したことが、後のFSWS計画へと繋がっていく。仮にA～C案と名付けて、それぞれの特徴を見ていこう。

まずA案は、装甲と武装を一体化させた増加装甲パーツをAパーツとして本体に装備するというもので、防御力と火力の底上げを狙った試案であった。対するB案は、開発中のFF-X7Bstコア・ブースター[illegible]のロケット・ユニットを装着しようというものであったらしい。これにより緊急発進時の加速力を担保しつつ、試案では[illegible]ノズル[illegible]腕部[illegible]サーベルを一体化させることで格闘戦能力の向上を図る計画であったという。そして、残るC案は、Bパーツ[illegible]本体[illegible]コア・ブースター[illegible]として[illegible]斬新なもので、試案として固定式ビーム砲を2門搭載。爆発的加速力と火力の両立を目指しているという点において、今日のモビルアーマー（MA）に通じるコンセプトを有する試案であったとされている。

RX-78-2 GUNDAM



結果的にこれら3案の内、部内コンペティションを勝ち抜いたのは、「ガンダム・アーマードタイプ」という仮称で呼ばれていたA案であり、この試案から後にFA-78-1「フルアーマー・ガンダム」が開発されることになる。なお、開発計画の承認に伴い予算を計上する際には、増加装甲パーツにFederal Suit Weapon System(地球連邦軍武装システム=MS汎用武装システム)というひとく曖昧な名称を与えた上で、RGM-79〈ジム」系の生産ライン稼働に合わせて立ち上がった局地戦用機や特殊任務機の開発計画に混ぜ込む形で目立たぬように処理したという逸話が残っている。このプロジェクトが、後に「FSWS計画」という開発コードを与えられたのも、その頭文字を取ってのことだという。ただし、「FSWS」が真に意味するところは、Full armour System and Weapon System(増加装甲システム及び兵装システム)であったとも言われており、事実、戦後に流出した一部の資料にも、そのような記述が見て取れる。おそらく、前者が予算処理上の名目上の呼称で、後者こそが開発陣らの意図した本当の語源であったのだろう。

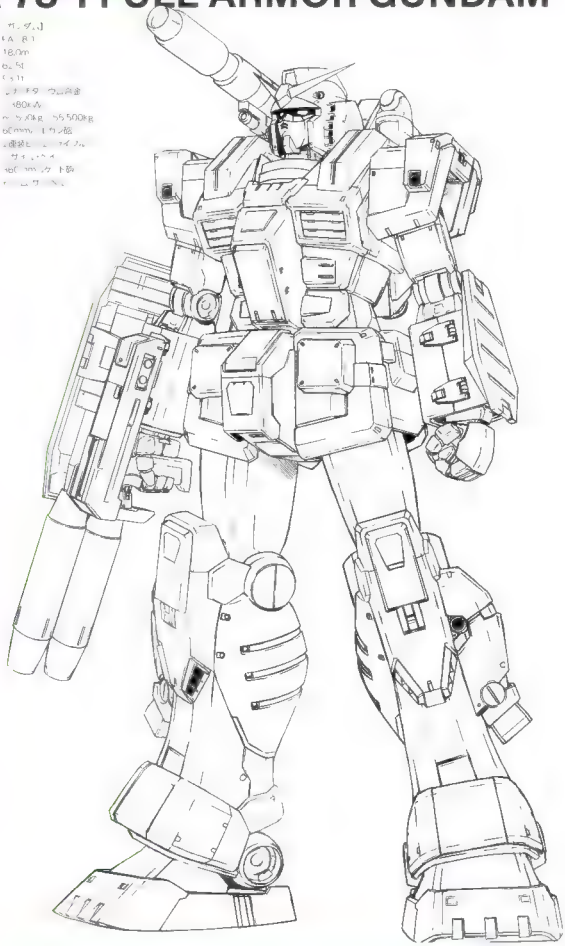
なお、一般的にFSWS計画は、大戦末期に軍部が密かに進めていた少数精鋭部隊構想と関連付けて語られることが多い。強襲揚陸艦〈ホワイトベース〉が成り行きによって独立部隊として運用され、特にRX-78-2〈ガンダム」が伝説的とも形容される戦果を挙げたことで、高練度パイロットを選抜した精鋭部隊の有用性を説く声が高まり、結果的に高スペックMSの需要が認められて開発計画が承認されたのだという論説である。しかしながら、近年の研究によると先述のとおり増加装甲パーツの検討自体は、サイト7での偶発的な実戦投入よりも前に始まっていたことが濃厚であり、戦局の変化に伴って精鋭部隊構想が立ち上がり、そこに「考えうる最高の機体」として開発計画が俎上に上がっていた後のFSWS計画機が割り当てられたというのが、より正確な表現のようである。特にホワイトベース隊が記録した戦果の大半が、アムロ・レイ少尉乗機のRX-78-2単機によって成し遂げられているという事実が、G.P.A.R.T.S.(G Practical Advanced Research for Tactical System(ガンダムを中核とする戦術システムのための実用的先端研究)やCFV(Core Fighter Variation(コアファイター・バリエーション)といったプロジェクトが目指す補助兵器の有用性に疑問符を付ける形になっていたことも、RX-78単体の戦闘能力向上を企図したプランの背中を押した。こうした偶然が重なることで、日増しにFSWS計画の期待感は高まりを見せていったのである。

少数精鋭部隊構想

[illegible]

FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM

【フルアーマー・ガンダム】
型式番号　FA-78-1
頭部高　18.0m
本体重量　62.5t
全備重量　[illegible]
装甲材質　[illegible]
出力　[illegible]
推力　[illegible]kg　55,500kg
武装　60mm バルカン砲
　　[illegible]
　　サーベル
　　[illegible]mm ビーム砲
　　[illegible]



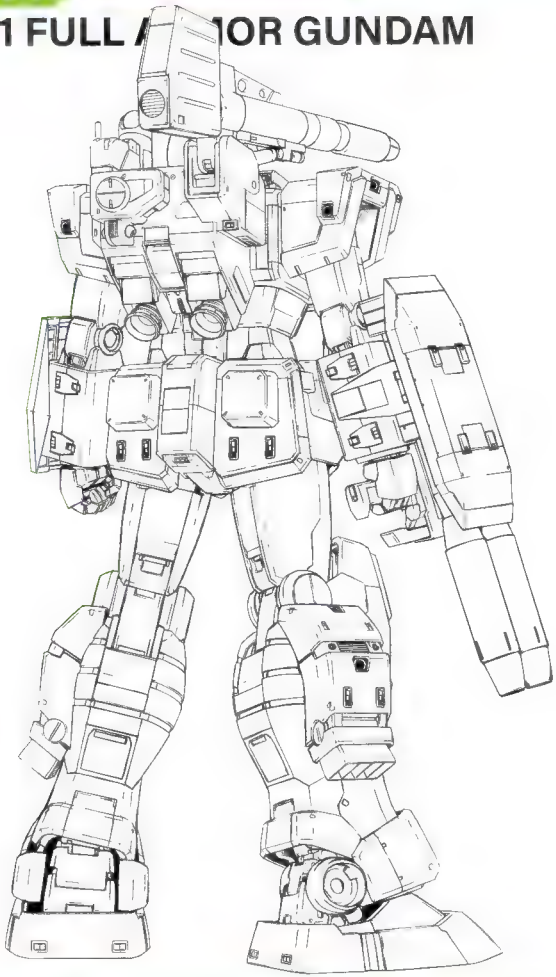
【FA-78-1〈フルアーマー・ガンダム〉】

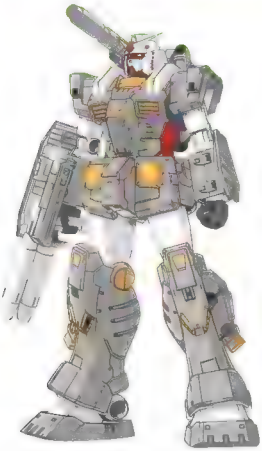
FSWS計画の根幹にあたり、[illegible]はMSに戦艦クラスの[illegible]ことで、[illegible]過大[illegible]ることを目指した。[illegible]素体となるRX-78に対して大幅な改修を[illegible]なく、増加装甲パーツによってこれを実現すべく、[illegible]開発を急いだ。[illegible]この難題を[illegible]開発チームは[illegible]した方式を[illegible]ト[illegible]RX-78-2[illegible]なかでも[illegible]フィードバックを取り入れた形で基礎設計案を進めていった。

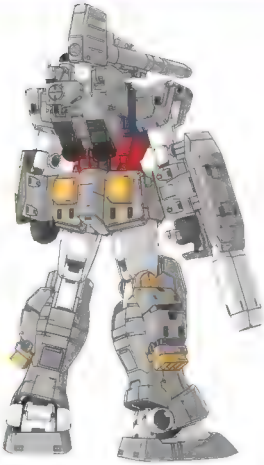
まず[illegible]の増加装甲を胸部、肩部、腰部、[illegible]脚部[illegible]胸部、腕部[illegible]も増加させ[illegible]RGC-80[illegible]同様[illegible]増加装甲パーツを装備することを[illegible]重量増[illegible]確保する[illegible]を[illegible]脚部側面には補助推進器を装備することとした。このあたりのアイデアは、[illegible]で設けたロケット・ブースター[illegible]の発想を転用したものであろう。また、新たに設置された胸部と脚部の増加装甲パーツに対しては、ミサイル・ベイを組み入れた[illegible]を設けることによって、排熱の問題が[illegible]しないよう[illegible]を[illegible]するなど単純な装甲[illegible]機構も取り付けられている。本機の増加装甲[illegible]しばしば装甲と[illegible]をパッケージングしたものと[illegible]われる所以である。

ただ、これらミサイルは本機の武装全体の中では、あくまで補助的な位置づけに過ぎない。主武装とされたのは、右前腕部に固定式で装着される2連装ビーム・ライフルのほうであった。艦砲級の出力を持つ携行式ビーム・ライフルという意味では、すでにRX-78-2の標準装備として採用された[illegible]社製XBR-M-79-07G(ビーム・ラ

FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM







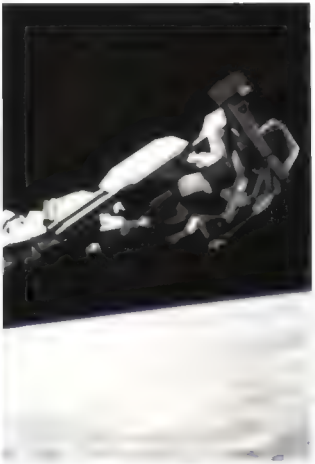
イフルが右肩、そしてなんと、この武装は威力に優れる反動連続レーザー砲を10数発撃てるというのみならず、また撃ち尽くすと自動的に装填され、次のエネルギーがAPS弾丸ミサイル発射管を受けると発射されるという重層的な仕掛けになっている。そこで、エネルギーがAPS弾丸ミサイルを内蔵したハードポイントを通ってレーザー砲数発分を増しつつ、予備装填を可能とする構造を採用することで、ネックとなっていた弾数問題を解決しようとしたのがこの武装であった。とはいえ問題がなかったわけではなかったことは、技術的にオーバーヒートしやすかったことである。しかも、この装備は搭載のビームライフルを大きく上回るものであり、後の第1ロットから、片手で軽々と扱い、戦闘中でのリロードも可能であったのに比べると、いかにも過剰な、明らかな装備であり、色合いが濃い。また、他にも、有線ワイヤーを装着したこともあったが、実用にはかなりのものとなってしまったようだ。そこで、機体バランスを維持するため、背面装甲はスウェーデンとしご商品式を採用し、ムーバブルアーマーとなっている。

なお、この、ショルダーアーマーは、ターンメントを取り付けることで、予備パーツを本体に保持するホルダーとしても機能していたのである。

ちなみに、このような装備を経てなお2連装ビームライフルが持つ不安要素のすべてを取り払われたわけではなかった。そのため、開発チームでは背部ランドセルを覆う増加装甲パーツ、可動式のロケット砲を1門追加することで、総合的な火力の限界をなくすという手段にでることとなる。このロケット砲は装弾数こそ5発ではあるものの、口径は360mmと大きく、中距離戦一発で命中を与えうる威力を有していたという。また、ロケット砲の対抗には、実績積みイフルの長距離狙撃学習機能システムを採用した精神アハイ・ユニットを搭載、火器管制システムと連動させることで、命中精度の向上、努めている。以上のように、FA-78-1の武装は強化型のRX-78-2の標準的装備を大幅に上回る火力を誇り、大戦中に開発された地球連邦軍装MSとしては最高クラスの充実ぶりを示すものとなったのである。


CAUTION
38
FULL LOADER
38
CAUTION
BACK HEAT BLAST
DO NOT STAY IN ASTERN ARE
ADDITIONAL PROPELLANT
FEEDER ACCESS
BE WARE OF RESIDUAL
DANGER
DO NOT OPERATE THRUSTE
WITHOUT ARMOR COVER AR
FLAPPING GUARD PLATE
AT EXHAUST BLO
CAUTION
KEEP CLEAR
DANGER
DANGER
CAUTION
KEEP CLEAR
CAUTION
DANGER
DANGER
HIGH VOLTAGE INSTRUMENTS
AND HIGH-ENERGY SUPPLIERS
ARE STOWED INSIDE
CAUTION


WARNING
CAUTION
DANGER
HAZARDOUS VOLTAGE
CAUTION : KEEP CLEAR
CAUTION
KEEP CLEAR
FULL CHARGED
38
DANGER
LASER AND UV
EMITTERS ARE INCLUDED
DANGER
38
DANGER
DANGER



【運用実績】

FSWS計画は最終段階に達していたとはいえ、一年戦争中、イ号作戦として、実施されたはずなのだ。しかしAAA級機密扱いとなったRX計画機パーツ、ガンダム実証機開発機、[illegible]が大戦末期になると結局、ルナツー、ア[illegible]ス、利用されたのみ。これらのパーツ、[illegible]は、[illegible]的にしかこれらを[illegible]れ、現地もあるやら、なんとかかき地球連邦政府に[illegible]現地、[illegible]集、FA-78-1の[illegible]が掲載されようとも、[illegible]、[illegible]のデータが載っていたものもあったが、[illegible]後に[illegible]なんどもUC0080に[illegible]、[illegible]FA-78-1まで機の建造が[illegible]れなかったのという考えが重視されていた。

なお、戦後、元兵士をかき集め、一年戦争、ロトル戦争の戦争[illegible]、[illegible]れるよう[illegible]なると、実動、FA-78-1[illegible]戦参加者[illegible]の[illegible]が散見されるようになる。[illegible]は[illegible]の裏付けは出されていない。

[illegible]は結局、[illegible]もいずれは[illegible]、生る情報も見つけ[illegible]ることはUC0094年に[illegible]れた『一年戦争[illegible]証録 ONE YEAR WAR THE COMPLETE HISTORY』[illegible]。[illegible]の例にもれず、[illegible]書は民間[illegible]編纂された書籍なのにも[illegible]、地球連邦軍中枢[illegible]ケ・ハ[illegible]ケ予備役[illegible]を進めたと[illegible]数多くの軍関係者が執筆、参加[illegible]ことも[illegible]されている。そんな書籍にFA-78-1が戦争中、[illegible]戦はなかったことを提[illegible]すると[illegible]が通説[illegible]きるのだ。それゆえ、[illegible]、[illegible]は[illegible]戦争[illegible]場、[illegible]元[illegible]、連邦[illegible]されていたとする考えが根[illegible]、[illegible]者を[illegible]ある伏[illegible]と[illegible]それでは以下、代表的な連邦[illegible]紹介を続けよう。

UC0079年12月24日[illegible]日の要塞アルビオン[illegible]対する反攻作戦が実行されたが、この戦い、ア[illegible]、地球連邦軍側の[illegible]れとし、[illegible]機のFA-78-1が投入されていたとの情報がある。パイロットはサイド7出身の[illegible]戦闘機乗り、タカ[illegible]・ハタイド大尉。RX-78-1[illegible]様の素体、[illegible]カラーで塗装

された[illegible]装[illegible]を装着した状態で[illegible]戦へ参加した[illegible]。[illegible]の情報は、戦後に[illegible]された未[illegible]戦[illegible]に掲載[illegible]取り上げられた[illegible]で知名度を得た[illegible]には著者の創作、または[illegible]FA-78[illegible]情報を[illegible]したもの[illegible]指摘もあること も付記しておく。

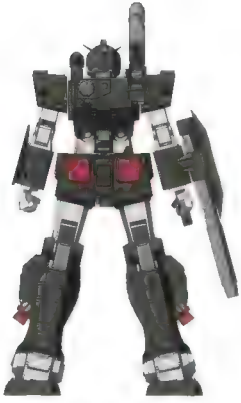
[illegible]戦参加[illegible]、攻略戦前後の[illegible]撃機[illegible]に対する核攻撃を敢行[illegible]艦隊[illegible]MS[illegible]機番[illegible]FA-78[illegible]ハイパー[illegible]FA-78-1[illegible]しき機体が目撃され[illegible]これは[illegible]撃機[illegible]機と交戦[illegible]記録[illegible]これは地球連邦軍のノエースの[illegible]ハイ[illegible]中尉がFA-78-1を駆ってMS[illegible]機、艦船2隻という大戦果を挙げたとされている[illegible]中尉が[illegible]経緯でこれほどの撃墜スコアを記録したのかは[illegible]サイド6[illegible]ハイパー[illegible]FA-78-1が、彼の乗機であった可能性もまた否定しきれない。

なお、[illegible]0083[illegible]サイド[illegible]を試みた[illegible]FA-78-1を含むMS部隊が迎撃[illegible]もあった[illegible]この時期の地球連邦軍は[illegible]

[illegible]FA-78-1の記録を[illegible]ようなものなのである

FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM

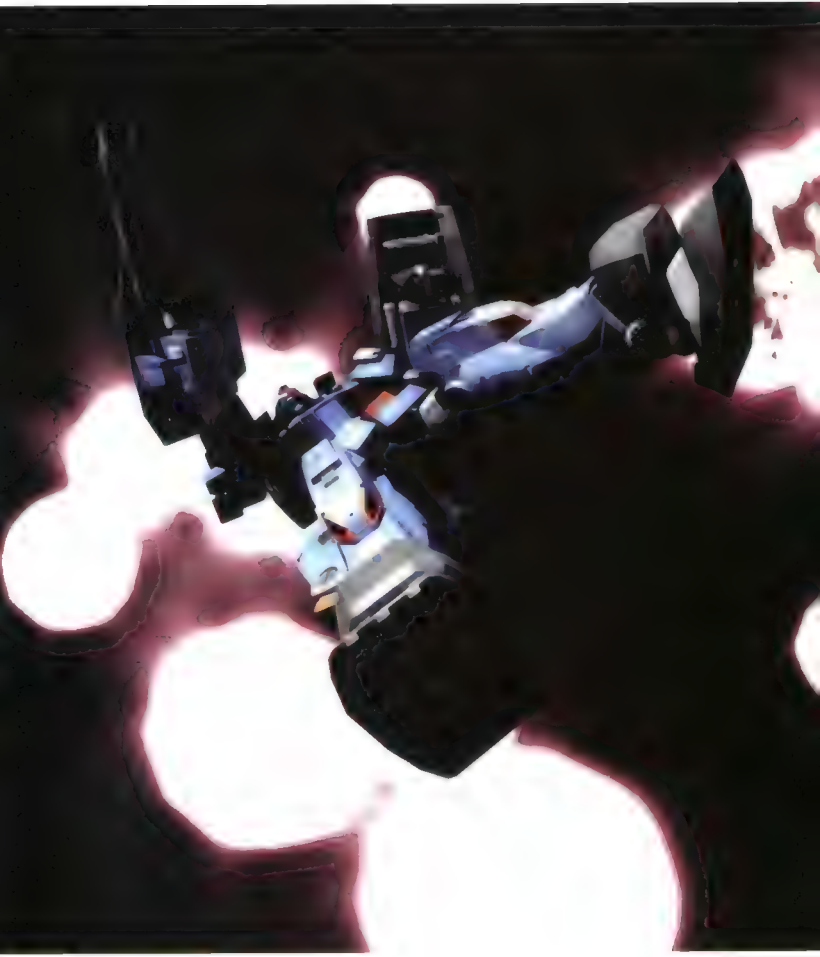
U.C. 0079/9/10/24 in Battle of Solomon

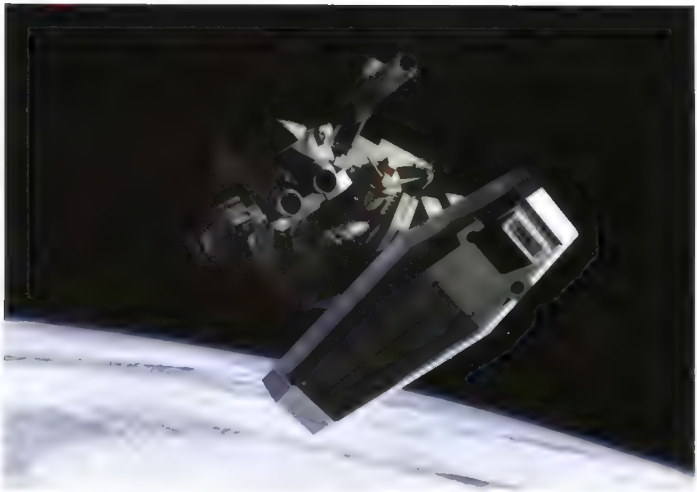


【FA 78 1の素体について】

[illegible]

[illegible]





■間に合わなかったRX-78-2への装備

RX-78[illegible]強化案としてスタートしたFSWS[illegible]戦[illegible]投入された[illegible]際にFSWS装備を装[illegible]した[illegible]と呼ばれる機体だった。

[illegible]機こそがホワイトベース隊のRX-78-2[illegible]装備されなかった理由[illegible]地[illegible]降[illegible]した後[illegible]様々な追加装備をテスト[illegible]していたこと[illegible]開発[illegible]異なる外観となりFSWS装備をそのまま装着することができなく[illegible]た。またFSWS装備の開発自体も[illegible]そもそも間に合っていなかったとも言われる。[illegible]作戦[illegible]攻略戦[illegible]作戦[illegible]攻略戦[illegible]作戦[illegible]ホワイトベース[illegible]ことも影響している。

[illegible]サイト[illegible][illegible]ホワイトベース[illegible]後[illegible]艦隊[illegible]艦隊[illegible]命令を受け、FSWS装備はテストや調整[illegible]未装着のまま[illegible]戦を経験[illegible]この戦いの[illegible]作戦[illegible]間に合わなかった。その後[illegible]作戦[illegible][illegible]機[illegible][illegible]運用[illegible]。

[illegible]作戦[illegible]艦隊が壊滅[illegible]打撃を受けた[illegible]艦載機とな[illegible]しかし[illegible]戦後[illegible]における[illegible]パーツを装着して運用されていた。

STRUCTURE AND SYSTEM OF FULL ARMOR GUNDAM

構造と特徴

FSWSの開発計画には、V作戦用の機体群（ガンダム、ガンキャノン、ガンタンク）と同様に、月面都市で開発されたルナ・チタニウム合金が使用されていると考えられていた。V作戦、それに関係する機体開発に優先的に供給されたルナ・チタニウム合金だが、〈コア・ファイター〉をはじめ、MS本体にも装甲被覆されることになった。特に本機専用シールドの最表層部にも同合金が使用されており、ルナ二号を始め戦略上拠点における限定されたプラントでのみ製造可能なルナ・チタニウム合金は、たびでさえ厳しい生産性も重なって開発不足の傾向にあった。開発以前に開発されたルナ・チタニウム合金の主要生産拠点は、月面の資源開発プラントと、ルナ二号の二カ所。このうち月面プラントは第一次戦争勃発の3ヶ月前に破壊されルナ二へと移転し、ルナ二工場に統合された。これはジオン公国軍の侵攻を想定しての対応ではなく、予定されていたスキーム通りのもので、まだ価格の安定だったルナ・チタニウム合金とその工場を、良質のルナ・チタニウムが採掘できる"本拠地（ホームベース）"のルナ二に置いた方にほかならない。0079年いっぱいまでもって月面プラントは表看板通りの資源採掘とレゴリス分離精製施設として運用されるようになった。しかし、そもそもルナ・チタニウム合金は、新型機動の外殻装甲用素材として使用されるはずのものだった。これをMS用に生産も開発することができたのは、ルナ二が13という辺境にもかかわらず多数の資源衛星を抱え、それらを利用した鉱石採掘をもくろむジオン公国軍を迎え撃つ為だった。

FSWS計画の増加武装／装甲パーツの開発はジャブローで進められており、RGM-79へのルナ・チタニウム合金の使用が見送られてもなお、本計画機体に対しては新型の配備がなされ当時最高の装甲材としてルナ・チタニウム合金の使用を前提として進められていた。しかし、試験段階には進捗する戦局の中、原材の調達の難しさから（ビーム・ブースター）などにも用いられた「ハイパー・チタニウム」が、FSWSパーツの主要材料として採用されていた。

一方で、敵陣営を敵への強行侵入を試みる機体として計画されていたこともあり、メガ粒子砲の攻撃にも耐えることができないかぎめて検討されたという。メガ粒子砲の光のビームに対してはなるべく当たらない。当たったとしても、ビームにさらされる時間を最小にするべく、機動による回避を行うというのが主な対処法だった。しかし、すでにビーム偏向幕の開発にも成功していたため、こちらも試験に到達の対ビーム装甲を用意できるのではないかと考えられたわけだ。対ビーム防御についてはいくつかのアイディアはあったとされ、外装にビーム偏向幕に使用されるガスを導入した特殊性金属を使用して、対ビーム兵器用のスペースシャトル・アーマーとしての機能も期待するものもあったが、しかし、軽かなガスでは効果的な幕を展開できず、実用化困難ということで、早々に理論のスケッチから外されていた。

[illegible]した。[illegible]ーティングによるものだったという※。しかし、このコーティング案には[illegible]1基分という前代未聞の開発コストが提示され、[illegible]技術者が[illegible]した全身金色のFSWS計画機のイメージ画像には、普段アルカイックスマイルで腹の読めない連邦軍高官たちをも唖然とさせたと伝えられる。[illegible]い開発計画だったとはいえ、対ビーム装甲の実装は見送られることとなる。なお、要求水準として掲げられていた「1.3秒」という耐久時間もシミュレーション段階で0.2秒不足していたため、これを理由として却下されている。ただし、機体のコストに関しては、上層部を諦めさせるブラフであったとも考えられるうえ、たとえ要求水準に満たない耐久時間であっても、まったく役に立たぬということも無いであろうから、恐らくは短期の開発が困難であったことが理由だったのだろう。この対ビーム・コーティング技術は戦後、アナハイム・エレクトロニクス社が技術者チームごと獲得し、第2世代以降の[illegible]

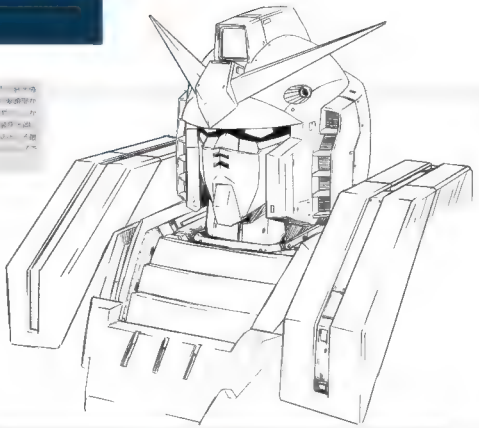
[illegible]不足を招くのだが、ルナIIでRGM-79C〈ジム改〉の生産を行うなど、[illegible]される連邦軍の重要拠点となっていたのはそのためである。チェンバロ作戦や星一号作戦[illegible]

[illegible]ビーム[illegible]

[illegible]は対ビーム兵器に対しても[illegible]に展開するビーム・バリアを[illegible]導入している。もっとも、[illegible]で、大型のモビルアーマーなどへの搭載に留まり、MSはもちろん[illegible]ていた艦艇などへの[illegible]もブリッジ[illegible]一のウィークポイントに限られていた。しかし、[illegible]はすでに[illegible]などの実体弾による攻撃、もしくはビームの[illegible]しきれない[illegible]ではない、という[illegible]パイロット[illegible]

HEAD

[illegible]

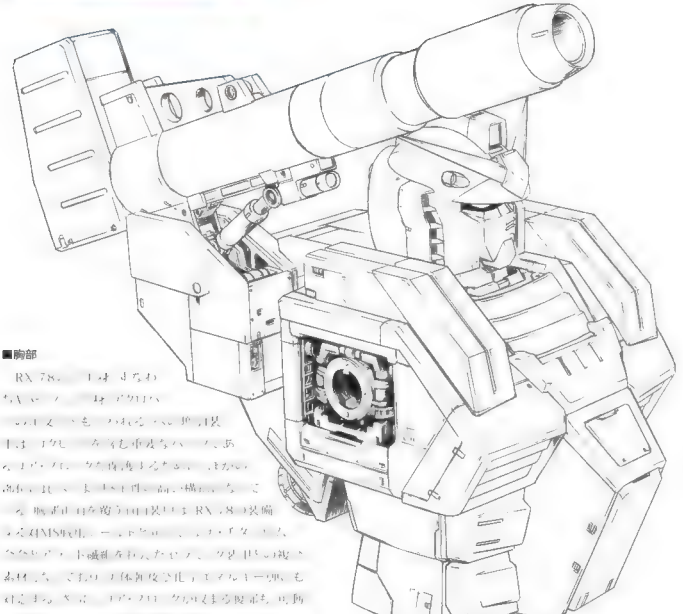


[illegible]

■頭部

初期にプラン[illegible]ました。サーの集中する部位、もっとも大いにフィードバック[illegible]理解を助けるものであった上から見た装甲を装着する機体がRX-78-2、はな[illegible]動ユニット、モニターやアクチュエーターを強化したRX-78-6、改修準備[illegible]ことまでなるためのお[illegible]そ[illegible]の中を理解すること[illegible]されたしかし[illegible]トとなったのは、この装甲面装置はMS-06系のコクピット[illegible]20mmサブマシンガンの直撃には耐えられないことが、これは見逃されている。また機構強度を維持するスペースに乏しい制約から、後面のスポーツ、あるいはセンサーのフィードバックなどはメンテナンスのため、高度が可能であったこともあり、増強の対象にされた。また、メインメインアイ、アイ[illegible]はじめ各種のセンサー、ツールドとの[illegible]増加されて強化が図れて、ろ

CHEST

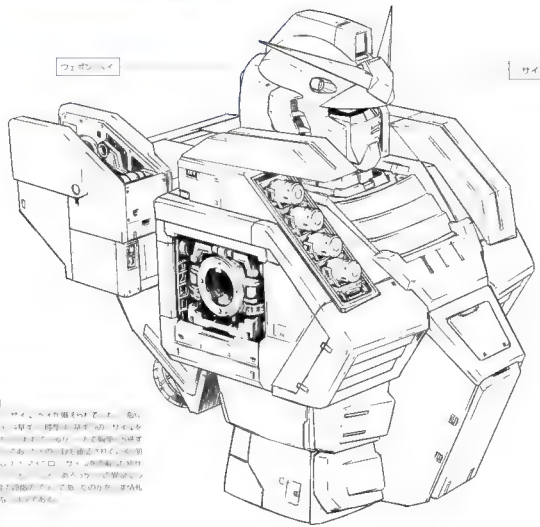


■胸部

RX-78[illegible]はすなわち[illegible]パーツは[illegible]も[illegible]れる[illegible]追加装甲は[illegible]も重要なパーツである[illegible]を保護するため[illegible]高い[illegible]る。胸部[illegible]を覆う追加装甲はRX-78の装備するMS対[illegible]繊維[illegible]素材[illegible]ており[illegible]一弾にも対応する。[illegible]提示[illegible]な[illegible]ような配置[illegible]胸部[illegible]装甲[illegible]保護する[illegible]格闘戦[illegible]目[illegible]

胸部[illegible]ダクト[illegible]配置されてお[illegible]最終[illegible]機体[illegible]同様[illegible]可動部を[illegible]体と部材自数を抑えることを目的とした[illegible]構造の格子状のパーツもオプションとして用意された。オプションパーツを含め、ダクト部の装甲材にもルナ・チタニウム合金が使用されており、その外側のダクトカバーはダクトそのものを兼用しているため、あらゆる方向から砲弾が侵入しても[illegible]いかなし[illegible]された[illegible]機能[illegible]タや[illegible]の制御機構などを保護[illegible]。

WEAPONS BAY

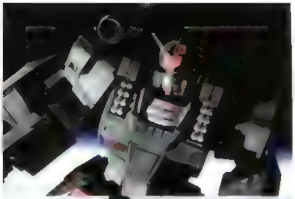


【ミサイル・ベイ】
胸部と腰部[illegible]サイル・ベイが備わっている。[illegible]胸部は左右[illegible]両側で[illegible]段[illegible]のミサイルを搭載可能であ[illegible]ほぼ[illegible]の[illegible]を装備しながらもつつ腰部にも[illegible]であ[illegible]ミサイルを通過させ[illegible]ている。[illegible]者を確保[illegible]ロ[illegible]ッ[illegible]装甲[illegible]様が[illegible]ていては、[illegible]なのか[illegible]が確認されていない。[illegible]である。

■ウェポン・ベイ

両胸には釣り付け式のウェポン・ベイが設けられた。腕上部のいわゆる肩には姿勢制御用のスラスターを配さねばならないことから、胴体側のこの位置に設置されている。このウェポン・ベイは、かならずしも兵装を搭載することに限定した両ではなく、ここに小型のジェネレーターや追加のセンサーを装備するなど、多用途に使用できるように、機体装甲各部と通信が可能な配管、配線のターミナルが予め内蔵されていた。

ウェポン・ベイの武装候補は、メガ粒子砲やCIWS(近接防御火器)を兼ねたバルカン砲、グレネード・ランチャー、ビーム・サーベル・ラックなど多岐にわたった。初期案で最も期待されていたメガ粒子砲は、充分な出力と小型化が叶わず断念されている。この後に実体弾兵器の装備が具体的に検討され、無難な画像認識光学シーカーによる自動追尾機能を有する固体燃料推進式ミサイルの使用が決まったらしい。弾体の搭載数については諸説あり、一般に片側3～5発(両側計6～10発)が標準装備となっているものの、より小型のマイクロミサイルを片側8発、両側で16発まで搭載可能だったとする資料もある。ただし、この小型のマイクロミサイルでは非装甲目標程度でなければ有効打を与えられないため、実戦テストでも一度しか使用されなかった。このほかの一年戦争に間に合わなかった武装およびオプション装備については、戦後引き続きテストが行われたと言われているが、現段階ではデータが公開されていない。



[illegible]

■搭載ミサイル

FA-78-1に特有の、胸部側の両肩に設置されているウェポン・ベイに主に搭載された、ミサイルは、直径が30cm、全長も1mと、高たない小型の対MS用ミサイル「AMSM」だった。ほかの兵装も検討、開発されていたが、画像などで現在確認できるものはいずれもこのミサイルである。

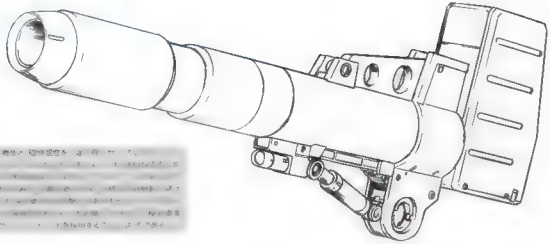
「戦争時の連邦軍は地上用の武器をベースとし、これらを宇宙用に改修して使うことが多かったため、宇宙でも気軽のアドバンテージが大きい」ミサイルを使用していたが、本タイプはケーブル戦投攻撃のMSに搭載されたAMS-013などとの対MS用ミサイルなどと同様、先端がフラットな形状をしている。先端には、地上用の光学シーカーが搭載され、会敵距離のために外周に3基の小型燃焼式スラスターを装備する。短い全長の中央部前半を炸薬が、後半を推進用のロケット・モーターが本体方式で、その固体推進剤は外周部スラスターの隙間に分散配置することで全長を短く保っている。

ミサイルとしてはまかない小型で無誘導弾は短かったが、近距離での有視界戦闘が基本となるMS戦では充分であった。また、MSの機動性能を考慮すると命中率も決して高いとは言えない代物だったが、メイン・ウェポンの2連装ビーム・ライフルと360mmロケット砲の弾数の少なさをカバーする補助的な兵装としては充分といえた。

「宇宙ではまず爆弾やスチール球をばらまくクラスタータイプの弾頭が考えられていたものの、宇宙空間では周辺への負の影響が大きいとされ、これらは地上における弾種のみに限られることになった。ほかに検討されていた「閃光」には、相手のセンサーを無力化する光輝度閃光弾、発熱弾、徹甲榴弾、そして前述のクラスタータイプの弾頭があった。特に、スチール球をまき散らすクラスタータイプの榴弾弾頭は、使用場所が非常に限られるうえ、敵MSを完全に破壊することはないが、センサーやスラスター、そして関節部にダメージを与えて機動力を奪うには有効であると高く評価されている。

また、射出後に自機の全方向展開するビーム撹乱幕弾頭も研究されていた。ビーム撹乱幕弾というと、ソロモン攻略戦時に、ハッパリクによって艦隊全面に展開された巨大な弾頭を思い浮かべるが、この場合はMS-1機を一時的に覆って敵の射撃から護れればよいため、FA-78-1のウェポン・ベイにも充分に搭載可能であった。

360mm ROCKET CANON



[illegible]

■360mmロケット砲

[illegible]

さに砲身自体に特殊な機構を必要としないためである。RX-77のもの比べると単位長あたり実に40%程度の重さしかなく、高機動時にかかる慣性によって歪みを生じない程度の強度しかない、最大限軽量化された設計となっている。

バレル内はライフリングのない滑腔砲身となっており、多彩な弾種に対応可能としている。滑腔砲は発射時に弾体にかかる抵抗が少ないため、初速も向上する。

バレル長820mmの砲身は、ハイパー・バズーカの約1/2と短いが、小型軽量ながらえに砲身をランドセルに直付け装備したことで、腕部を別の用途に使用できるなどのメリットがある。増設した照準デバイスのおかげでFCSの能力に余裕があり、必要であれば左手にハイパー・バズーカを装備するという選択肢があったことも大きい。発射薬を使用しないためマズルブレーキなどを持たず、ハイパー・バズーカ同様に後方に噴射炎を逃がす無反動砲となっている。

有効射程は重力圏内で最大3,000メートル。宇宙空間では事実上無制限な射程を持っているが、宇宙条約により射点座標より6,000メートル以上離れた場合は弾頭にセイフティ機能が働き、流れ弾かコロニーなどに着弾しても起爆しないよう安全装置が組み込まれている。むろん作戦により、これらのセイフティ機構はキャンセル可能で、対艦隊戦や対要塞戦などにおいては任意に安全距離を変更して使用した。

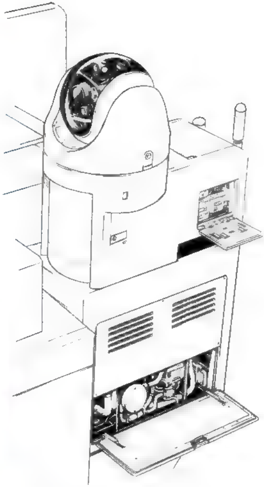
砲身は、MSの直立状態で仰俯角が5度から120度、方位角は正面に対し左右10度の範囲で射角を変更できる。また照準デバイスとの連携により、可動角度内でカバーできる目標を自動追尾する(ただし、宇宙空間では互いの慣性ベクトルと相対速度を考慮する必要があるため、必ずしも見かけ通りの目標方向へ向くものではない)。射角変更には、MSの関節などにも使用される動きの速いリニア・サーボ・アクチュエーターが採用され、砲身の傾きをレーザーで測定し、目標の機動に合わせリアルタイムで砲身の角度を調整可能である。

弾倉(マガジン)には360mm弾頭5発を収納。バレルへ自動装填する機能を有し、再装填時間は約2.3秒の速続射撃を実現している。ただし連続発射は砲身が加熱しやすいため、連発すると命中精度は低下する。ロケット弾発射時の初期加速は低速・高速モードを選択できた。高速モードでは文字通り最大加速でロケットモーターを噴射させ、弾体を最大速度まで一気に加速させることが可能。低速モードでは、弾体を発射後に慣性航行させ、敵のセンサーに感知されずに目標近くまで接近し、指定されたポイントに達した段階で再度ロケットモーターに点火、ターゲットへ短時間で肉迫してこれを撃破する。誘導弾ではないため、当てるにはコンピューターの未来予測、そしてパイロットの経験と勘が必要である。

360mmロケット砲には様々な種類の弾頭が用意されおり、作戦に応じて最適な弾頭を選択して出撃できる利点があったが、弾頭を一列に収納するストレートタイプのマガジンのため、発射ごとに異なる弾頭を任意に選ぶことはできない。出撃中に異なる種類の弾頭を搭載したマガジンへ交換可能なよう、ランドセルに自動装填システムを装備することも検討されたが、開発に時間がかかるため見送られている。主兵装はあくまでビーム・ライフルであり、ロケット砲はあくまでも予備という考えがあったからでもあるようだ。

全弾発射後は、可動機構より先の本体部分を切り離すことが可能となっている。マガジンのロケット弾を撃ち切った際、ロケット砲がデッドウェイトとならないようにするためだろか。計画初期にはオプションで砲本体にグリップを装着し、腕部で保持して使用することも想定されていたようだ。この仕様が実装されていれば、携行した予備のロケット砲本体に交換することも理論上は可能であったろう。そのほか、可動部分もランドセルの増加装甲とともに投棄可能となっている。

SENSOR TURRET



ランドセル両側にセンサー・タレットを装備したタイプは強行偵察型として導入されたものである。肩の360mmロケット砲は装備不可となるが、RX-78をベースとしたフルアーマー・カスタムの機動性と重装甲、[illegible]の強力な火力[illegible]た用途での有用性について高く見積もられていた。

■センサー・タレット・ランドセル

[illegible]360mm[illegible]RX-78[illegible]

[illegible]RX[illegible]

[illegible]RX-78[illegible]

近いと指摘されるに至っている。火器管制能力だけでなく、回避に繋げるための索敵能力の向上が強く求められていたのである。

RX-78のFCSも当然のように複数の目標を同時にロックし、それぞれを連続的に追尾することが可能ではあったが、頭部前後に装備されたセンサー群だけでは、視野角の問題から一部の目標が追尾不能になる場合がある。また、複数兵装の同時射撃管制も不可能だった。戦闘機動を行いながら両手に装備したビーム・ライフルを同時射撃するのは、ジェネレーターの出力的にも困難であったため、そもそも当時は複数兵装の同時使用が考慮されていなかったのだ。そのため、FA-78-1で2連装ビーム・ライフル、ランドセルのロケット砲、肩部と膝部のウェポン・ベイのミサイルといった兵装を同時に2つ以上使用するには、FCSを改良する必要があった。とはいうものの、すでに学習が進んでいたRX-78のコンピューターを、その成果を活かした状態でアップデートする時間はない。そのため、これをサポートする装置として、より高性能な目となるセンサー及び必要な情報を精査し演算するコンピューターを別に用意したのであった。

RX-78の場合、ツインアイを照準や格闘時の間合いをはかるためのセンサーとし、額のメインと後頭部のカメラは、そのほかの汎用センサーを内蔵した統合索敵装置としていた。だが側面には死角もあり、コンピューターによる敵の"行動予測"が不可欠だった。さらに、ロックオンと射撃は同時に1つの目標に対して行えるのみである。一方、FA-78-1では上記センサーに加えて、ランドセルに追加されたセンサー・ターレット及びFCSにより、多くの目標を追尾・ロックオンが可能なばかりか、複数装備の射撃管制を行うことでそれらのすべて、ないし一部への同時攻撃能力も獲得している。捕捉した目標群の動きを継続監視し、また、その情報をメインコンピューターにフィードバックする機能もある。ただし学習機能はなく、あくまでメインコンピューターのサポートに徹している。

FA-78-1の運用想定では、敵の防衛網であるフロントラインを強行突破し、目標に接近するため、前後左右上下あらゆる方位から同時多発的な攻撃を受けることが予想された。その際、RX-78本体のコンピューターは機体制御、及び主兵装である2連装ビーム・ライフルの管制に集中させ、追加されたセンサーとFCSはそのほかの火器管制用として独立運用することで、攻撃力と生存性の向上を図った。

RX-78の教育型コンピューターは、すでにこの優秀なセンサー群をあくまでサポートとする仕様を柔軟に受け入れることができるまでに成熟しており、数日のシミュレーションだけで連携することができたという。それ以降は実働テストや訓練、そして余裕のない当時の状況を反映したように実戦テストにまで駆り出され、さらに磨きがかけられていった。

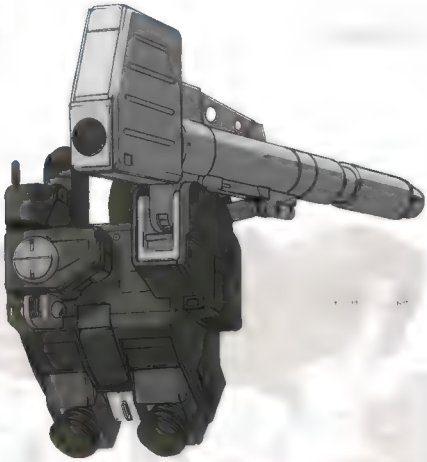
最終的にRX-78-2は、MS本体のセンサーと2連装ビーム・ライフルの照準センサー、そしてランドセルの増加装備であるセンサー・ターレットを総合的に活用し、非常に高度な長距離射撃が可能となった。具体的な数値はマスクされているが、有効射程距離の80%に位置する固定目標に対し、実に58.7%もの命中率向上が実現したというから、大きな進歩である。これは、目標艦艇のウィークポイントに対する狙撃が現実的となるだけでなく、MS戦においても大きなアドバンテージとなりうるものだった。

RX-78-2の教育型コンピューター [illegible]

[illegible]

RANSEL ARMOR

[illegible]



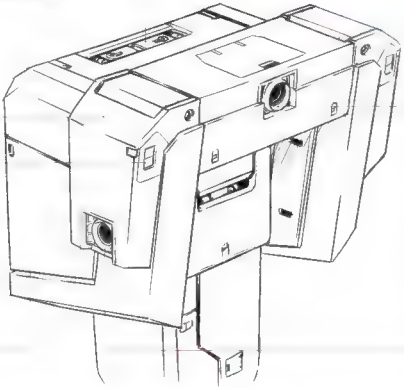
■ラントセル用増加装甲

背面の[illegible]個も[illegible]保護対象と[illegible]っていなかったランドセル[illegible]の増加装甲は[illegible]されていなかった。また[illegible]用には[illegible]索敵・目標[illegible]デバイスを装備するためのプラットフォームとしても機能する[illegible]を装備する[illegible]人機[illegible]仕様を[illegible]か[illegible]されていた[illegible]の構成[illegible]増加装甲[illegible]なったのである。

その際、[illegible]デバイスや各種警戒センサー[illegible]の機能をも持たされることになった。[illegible]側ではデータリンクのためのコネクタが[illegible]されたり[illegible]式の360mmロケット砲と、それを管制する照準デバイスを搭載する構造はRX-77-3ガンキャノン重装型やRX-77-1ガンキャノンに用いるそれと類似点が指摘されている。FSWS計画に限ったことではないが、同時並行的に様々な計画が進められていたこともあり、そこから得られたノウハウは相互に提供され、蓄積されていったのである。

SHOULDER ARMOR

【[illegible]】
[illegible]



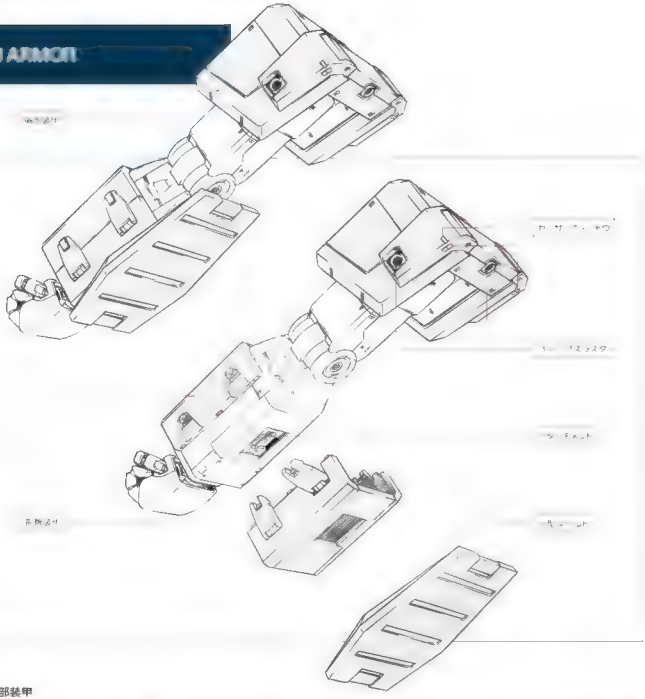
【[illegible]スラスター】
[illegible]

■肩部アーマー

[illegible]を[illegible]も[illegible]SWS計画で強化対象[illegible]された[illegible]。肩[illegible]は、被弾率[illegible]高い部位であり、そして武器を[illegible]部位でもあったため、損傷を避け[illegible]あった[illegible]。[illegible]も[illegible]継続が可能となる。またMSが[illegible]運用されるようになった一年戦争の終結[illegible]まで、[illegible]メイン・スラスターに対し、遠位部で[illegible]姿勢制御用スラスターを配置することが機動[illegible]有利であることが判り、後発のSWS計画でスラスター[illegible]搭載が[illegible]。その結果[illegible]それぞれに前後・外側・側面[illegible]スラスターがレイアウトされた。[illegible]スラスターとAMBACと[illegible]機動性[illegible]実現している。

[illegible]スラスターを[illegible]により、[illegible]トは最大60[illegible]姿勢[illegible]連動を[illegible]しめ、細やかな機体制御が可能となった。なお、60[illegible]は[illegible]従来型[illegible]した[illegible]。この数値[illegible]機体のRX-78-2との比較では20[illegible]程度[illegible]比較対象となっ[illegible]RX-78-2か[illegible]U.C.0079[illegible]12[illegible]RX-78-2自体もかなり最適化が施[illegible]と考えられることから、[illegible]改修であったことは間違いない。

ARM ARMOR

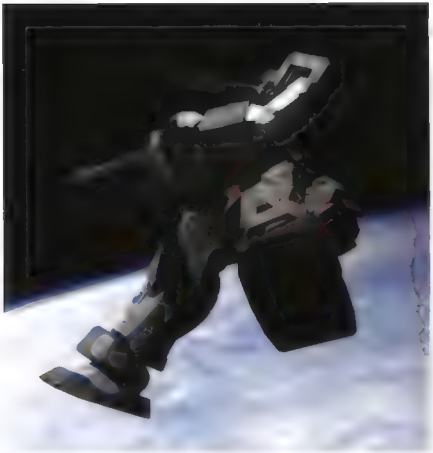


■腕部装甲

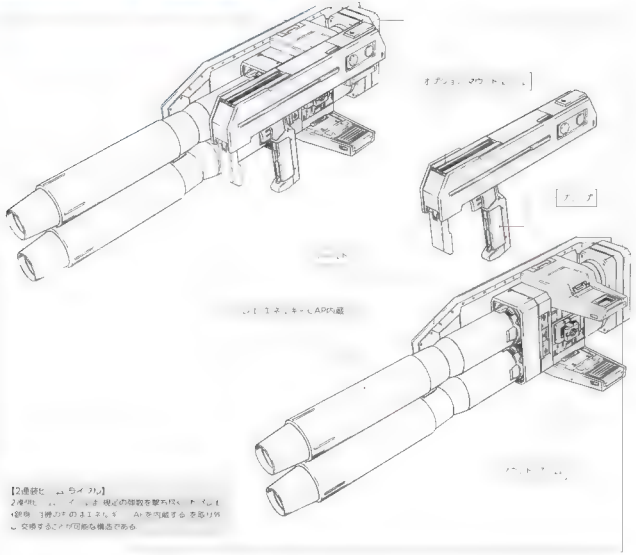
[illegible]まず腕部[illegible]機構を[illegible]腕部[illegible]増加装甲[illegible]された。[illegible]を優先[illegible]な防御姿勢がとれることを理想[illegible]。

また[illegible]腕[illegible]RX-78[illegible]MSの[illegible]アタッチメント[illegible]あり[illegible]これは[illegible]。

[illegible]腕部[illegible]ルトが装備され[illegible]対MS[illegible]を[illegible]して補助する[illegible]装甲として機能するように配置されている。[illegible]ルトは対MS[illegible]と同様[illegible]の機能も持たされており[illegible]ことできな[illegible]を懸架するサーベル・ラックを装着することもできた。また、対MS[illegible]ルトを装備しない場合[illegible]もアタッチメントとして予備の[illegible]ライフルや[illegible]を懸架できた。ただし[illegible]連装[illegible]ライフルや60mm口径[illegible]対MS[illegible]も懸架できた[illegible]対MS[illegible]ルトが用意できな[illegible]使われることはなかった。



TWIN BEAM RIFLE



【2連装ビーム・ライフル】
2連装ビーム・ライフルは、規定の弾数を撃ち尽くしたら、銃身（砲身そのものがエネルギーCAPを内蔵する）を取り外し交換することが可能な構造である。

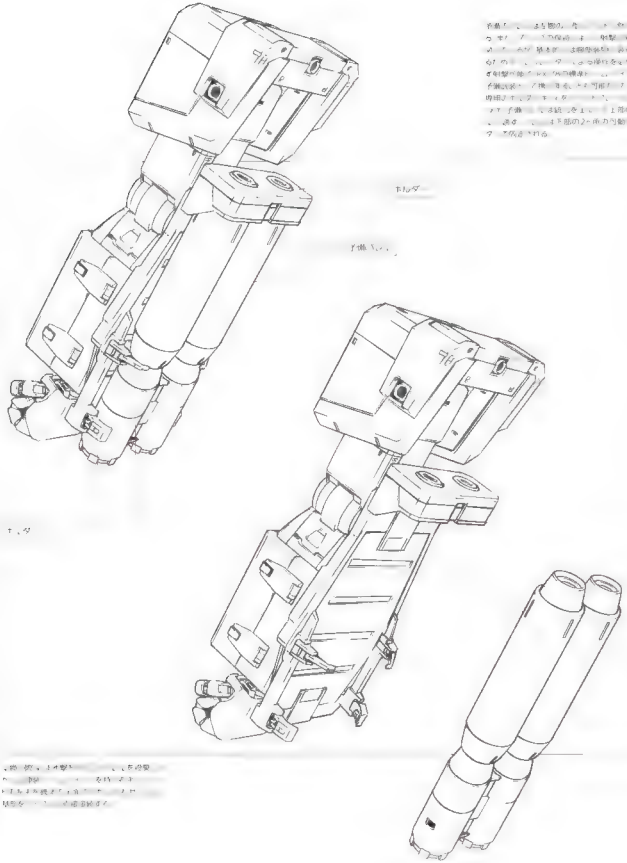
■2連装ビーム・ライフル

エネルギーCAPを内蔵した砲身2門を備えたFA-78-1の代表的な武装であり、その威力は一斉射で重[illegible]艦[illegible]の装甲を貫き、[illegible]ジェネレーターを破壊することを想定していた。2門の砲身による射撃は、主に同時発射を前提としていたが、セレクターによって交互に射撃を行うことも可能だった。

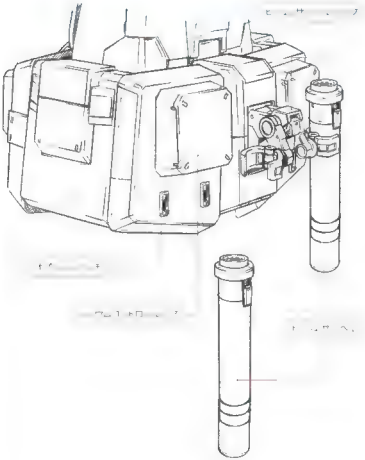
砲身はRX-78-1[illegible]ビーム・ライフルの開発で成功した[illegible]社が引き続き開発を担当しており、[illegible]なかったロングレンジ・ビーム・ライフルの砲身を転用して[illegible]力の向上を果たし、[illegible]エネルギーCAPの大容量化にも成功し、1門につき20発の連続射撃が可能であった。

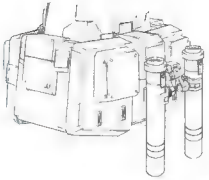
また、重要な装備であることから、ライフルは、携帯時に小型[illegible]ハードポイントに装着されている。RX-78系の標準装備である[illegible]とオプション・マウント[illegible]との結合構造を有しており、[illegible]以外の目的にも[illegible]高い信頼性を発揮する。

オプション・マウントにはバイザー型のセンサーも装備されたため、[illegible]センサー・ターレット[illegible]が搭載された[illegible]の性能が充分なら、超長距離射撃でもなければ必要なかったため、実戦投入中、一度[illegible]されることも[illegible]補充されなかった。

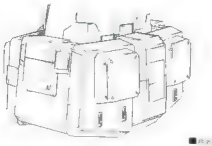


LOWER BODY ARMOR





■装備状態



■非装備状態

[腰部の増加装甲パーツ]

[illegible]

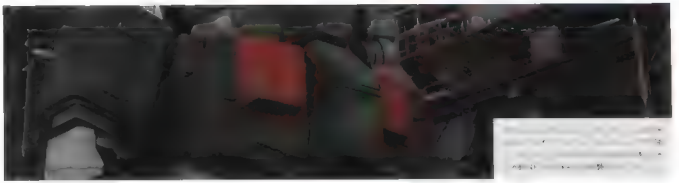
■下半身（腰部）

Bパーツ（下半身）［illegible］もわれ［illegible］フルアーマー装備は股間部を覆うための懸下式装甲［illegible］スラスター［illegible］マウントを兼ねた［illegible］装甲［illegible］化装甲となる。

腰部の懸垂式装甲は、中空の装甲内部にスラスターを［illegible］備［illegible］機体［illegible］スラスターが増設されている。これは追加装備を取り付けたベース機体たるRX-78-［illegible］が変更され機体自体も改修が加えられていないことを考慮して、［illegible］360mmロケット砲を［illegible］を考慮していない［illegible］。

また、ベース機体の腰部ウェポン・マウントを塞ぐ形になってしまったため、増加装甲側に同様のマウントを装備したタイプも確認されている。ここをサーベルラックにすることで、360mm砲や追加装甲ブロックを優先したため撤去されたビーム・サーベルを懸架していたが、［illegible］リチャージできない使い捨てとしての仕様だった。また、ビーム・ライフルなどの携行火器をマウントできたはずだが、装備した画像は確認されていない。なお、この腰部アーマーを使用すると、［illegible］スラスターの使用可能角度が制限されることもあり、ウェポン・マウント部にはサブスラスターも装備されて運動性を［illegible］している。

HELIUM CONTROL CORE



[illegible]

■ヘリウムコントロールコア

FSWS計画の[illegible]機体[illegible]ヘリウムコントロールコア[illegible]コアは[illegible]された[illegible]原型機であるRX-78[illegible]特有の[illegible]ジェネレーター[illegible]の動作を[illegible]際、Iフィールドで構成された[illegible]ジェネレーターの[illegible]な安定動作させ[illegible]MS[illegible]YMS-08A[illegible]開発[illegible]を使用して[illegible]高機動型MSは[illegible]機が作られた[illegible]採用[illegible]ジェネレーター技術[illegible]機体を動作させ[illegible]稀代のMS、RX-78は成功[illegible]FSWS計画[illegible]

RX-78やRGM-79[illegible]ジェネレーター[illegible]を採用[illegible]出力は変わらない[illegible]増設された[illegible]コントロールコア[illegible]出力[illegible]RX-78は[illegible]最大出力[illegible]であるが、[illegible]を使いこなせ[illegible]パイロット[illegible]負担[illegible]機体内部を[illegible]継続的な運用は難しく、RX-78もそうした経験豊富なメカニック[illegible]作戦ごとに機体を徹底的にメンテナンスすることが運用の[illegible]FSWS計画機[illegible]確保[illegible]必要があると考えられた追加装甲[illegible]増[illegible]出力増強はもちろん、[illegible]連装の[illegible]ライフルなどの内蔵[illegible]さらに、[illegible]ライフルの増設も計画されていた[illegible]

これら[illegible]計画機のヘリウムコントロールコアは、最終的にRX-78に搭載されたコアを[illegible]効率化したものに換装することになっていた。当初は増加装甲を必要[illegible]換装することが考えられていたため[illegible]増加装甲が考えられていた。その後[illegible]も増加装甲の[illegible]コントロールコアを一体化させた増加装甲[illegible]

なお、[illegible]ジェネレーターの高度な[illegible]機体そのもの[illegible]また、コントロールコアは[illegible]外装近くに配置する[illegible]比較的被弾率が低く[illegible]腰部にレイアウトされた。ここには[illegible]緊急時[illegible]コントロールコアのために[illegible]

なお、[illegible]戦中以降、Iフィールド関連の技術がさらに進み、[illegible]柔軟に[illegible]ジェネレーターを動作させることが可能になった。このため、現在では失われた技術になりつつある。RX-78系の流れを汲むRGMシリーズでも、特殊部隊仕様のRGM-79NやRGM-79Qなどにわずかに採用されたのみである。

LEG THRUSTER

■脚部スラスター

脚部の増加装甲パーツの側面には、「格闘戦用バーニア」とも呼ばれる補助推進ユニットが装着されている。一説によれば、一脚当たりの推力はコア・ブースターのメイン・スラスターに匹敵するほどであったとされ、緊急時の戦線離脱はもちろん、MA並みの高機動戦闘も可能であったとさえ伝えられている。ただし、近年公開された仕様書上のスペックでは、FA-78-1のスラスター総推力は60,500kgとされ、RX 78-2の総推力55,500kgに対する上積み分は5,000kgに留まっていることから、前述のような機動性を確保できていたのかについては、少しばかり議論の余地がありそうだ。コア・ブースターのメイン・スラスターは、1発当たり10,000kg近い推力を誇っており、数字上の齟齬が見られるためである。推進器周りの開発に遅れが生じていたとの証言も残されていることから、仕様書の値は基礎設計段階のものであるとも考えられる。後に出力向上が図られている可能性も否定できないではないが、いずれにせよ推測の域を出るものではないだろう。

スラスター・ユニットは、下脚部を保護する増加装甲の上から、別ユニットとして装備する構造が採用されている。これはFA 78を本格的に生産配備する際、より高出力化された新型スラスターへの換装が容易に行えるように、という意図があったとされる。

なお、こうしたデータとの齟齬の背景には、また出てきていない資料があるからだという意見もある。たとえば総推力60,500kgというデータと、コア・ブースターに匹敵するという報告の間には1週間ほどのずれがある。このくらいなら同じ機材について書かれていると考えがちだが、当時の兵器開発の現場は朝に不可能だと考えられていたことが午後には実現していた、といったことは日常茶飯事だったという。また、実戦テストなどというものが当たり前に行われていたことから、技術者が戦闘に巻き込まれて死亡し、正確なデータが反映されないまま開発が続けられていったケースもある。大量生産されたRGM 79でも、数をそろえることが優先された結果、工場や生産時期の違いで仕様に細かな差違があった。開発に際し、当然極限の状況下でもテストを行ったであろうから、リミッターをはずした緊急最大出力と定格出力の差だとも考えられよう。FA 78-1の脚部スラスターについては、後述する陸戦仕様の要求もあり、兼ねてより強化されることが前提だったため、公開されたスペックデータが古いもので、開発中にアップデートされた情報が上記の事情で反映されていない可能性もあるのだ。いずれにしても、実機による検証が不可能であるため、真相は永久にわからないままかもしれない。

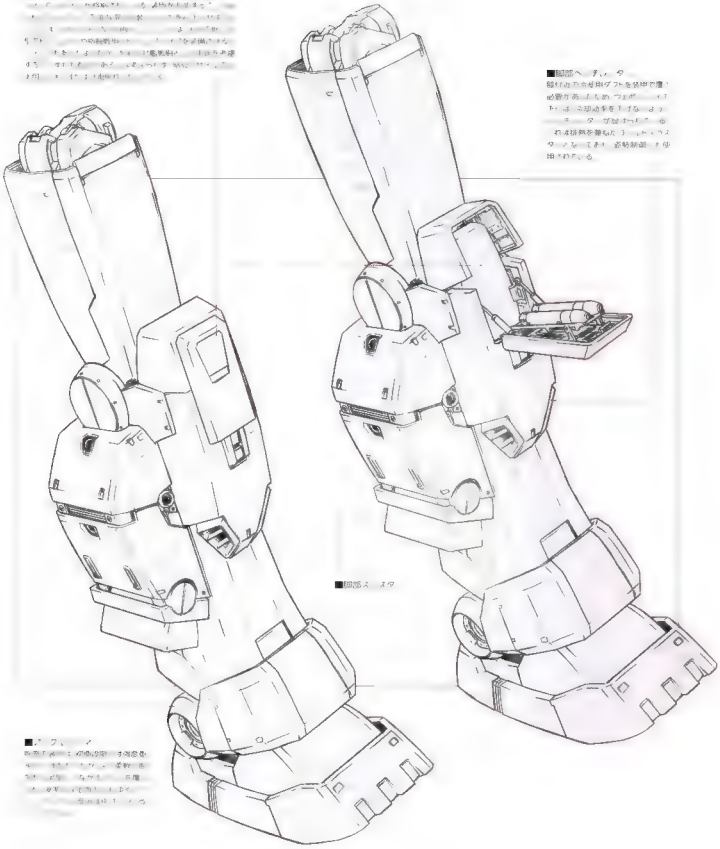
脚部のスラスターは、背面の主推進器などで使用されるベル型ノズルではなく、リニア・エアロスパイク方式の角型ノズルが採用された。内側には噴射ガスを偏向・整流するための可変ベーンを備え、二次元ノズルとしての機能を有する。これは当時の連邦軍航宙機としては珍しい装備であるが、剥き出し、あるいは大きなノズルカバーを装着して運用する必要があるベル型ノズルではなく、被弾率を下げるためにシルエットをコンパクトにしつつ、内蔵式とすることで構造的に際限なく装甲を強化できるリニア式ノズルを選択したものであろう。角型のスラスターは、ユニット基部に可動ヒンジがあり、15度の範囲で角度変更が行え、さらにノズル内の可変ベーンによる推力ベクトルの偏向も可能である。本体足部裏のスラスターや脚部の動きと合わせて機動性を向上させており、急激な軌道変更をも可能としている。

■[illegible]

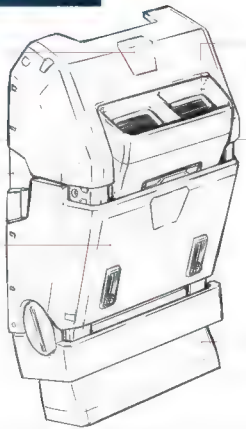
■[illegible]

■[illegible]

■[illegible]



GROUND THRUSTER



脚部側面に装着する熱核ジェットエンジン内蔵の地上用スラスター[illegible]でも同様の装備は実用化されたが、[illegible]機動を長距離移動のためではなく短時間で機動性向上に使用する前提であり、そのためユニット自体は小型に収められている。

■地上用スラスター

[illegible]の地上用スラ[illegible]始動[illegible]大[illegible]利用を[illegible]FSWS[illegible]用機体[illegible]は、地上用[illegible]熱核[illegible]搭載を進め[illegible]性を[illegible]地上用MSの[illegible]機能[illegible]MS-07H-8 グフ・フライトタイプ[illegible]MS-09[illegible]熱核[illegible]推力を利用[illegible]移動を可能[illegible]新たな機能[illegible]MS[illegible]注目を浴びた。

地上[illegible]FSWS機体に採用された[illegible]スラスター[illegible]は[illegible]宇宙用とは異なり[illegible]レイアウトされた[illegible]爆発的[illegible]噴射[illegible]同様[illegible]移動方向に対し最適な推力ベクトル[illegible]熱核ジェット[illegible]飛行を可能とするほどではなく[illegible]FSWS機体を継続して地上から浮き上がらせる[illegible]

[illegible]稼働時間は機体過熱の問題から180秒程度とされていた[illegible]搭載のメインスラスターを[illegible]MS-09を上回る[illegible]移動速度は平地であれば時速120km超に達したとされる。MS-09 ドムは飛行やホバー移動を模索していた[illegible]大柄な機体に高出力[illegible]を搭載し[illegible]それをもってもMSを長距離[illegible]させるという発想がなく、[illegible]MSの機動性を向上させる装備という認識だった。そのため連続[illegible]時間およびホバリング[illegible]性能[illegible]MS-09[illegible]なかったという。

FA-78-1の足裏は、素体であるRX-78の足底がそのまま覗いており、この部分の機動制御を担うスラスターも利用される。当初はエンジンを大型化して底上げする他に"下駄"を履かせる予定であったというが、開発が遅延して見送られた。

■足部アーマー

[illegible]

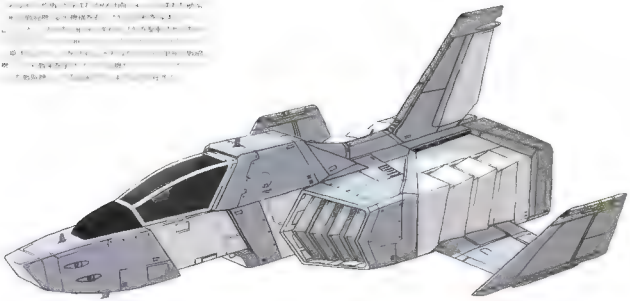
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

【[illegible]】



FF-X7 CORE FIGHTER

■〈コア・ファイター〉の強化プラン

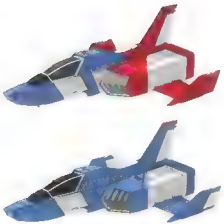
FSWS計画において火力強化は最優先事項であり、複数のビーム兵器を使用可能とするためのジェネレーター出力の強化が様々な形で模索された。その中で、RX-78のコア・システムである〈コア・ファイター〉に搭載された2基のNC-3型核融合ジェネレーターを強化できないかが検討されることになった。

この話に飛びつかぬご覧いたのが、ハービック社のコア・ファイター開発チームだった。変形という最大の問題を乗り越え、狭い機体内にジェネレーターと共、武装から教育用コンピューター、ハイロット保護のための機能などを詰め込み、ミリたりとも動かせない完璧なレイアウトを実現したと自負していたところにこの要求である。とりあえず検討を開始したものの、武装の省略や低空戦力としての機能低下が言容されるのであれば、いっそRGM-79SC用に開発が進められていたコクピット・モジュールとジェネレーター・ブロックを徹底的にチューンナップする方が早いとの結論に至った。

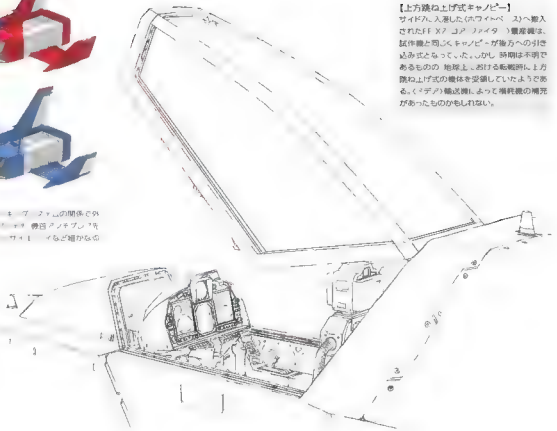
とはいえ、そもそもRX-78の強化プランであるFSWS計画の始子から言えば、戦闘機としてはともかく、脱出装置としての〈コア・ファイター〉を要素から外すことは本筋ではない。結果、〈コア・ファイター〉に関しては実戦を経て得られた細かな改良案を反映させることとなった。開発期間が短いことも理由にはある。

具体的には、AIM-79空対空ミサイルの搭載ランチャーをあっさりと撤去可能な仕様に変更し、プロペラントタンクや小型のヘリウム・コントロール・コアの導入により、定格出力をわずかではあるが向上させた。武装を撤去するなどで浮いた体積の余裕は、そのまま一部の構造強化にも充てられている。また、1機の運転に関する訓練プログラムや、パイロットスクラッチもバックアップされている。

そのほか幾つかのオプションを適用した試作機が、シャンブローにおいて急遽6機製作され、各種のテストに供されている。1号機は機体構造強度テストのためシャンブロー内の試験施設内に送られ、負荷耐久テストが行われた。2、3号機はオーストラリアの空軍基地に送られてフライトテストを行い、4、5号機はルナ2へと搬送され重力



F[illegible]の機体[illegible]ファムの関係での外[illegible]異なる[illegible]の機体[illegible]ンテブ[illegible]試作[illegible]ト[illegible]機[illegible]サイ[illegible]らの補かなの[illegible]が異なる[illegible]



【上方跳ね上げ式キャノピー】
サイドから、入来した(ホワイトベース)へ搭入されたFX7(コアファイター)量産機は、試作機と同じくキャノピーが後方への引き込み式となっていたのに、対照は不明であるものの、地球上における転戦時に上方跳ね上げ式の機体を受領していたようである。(メデア)輸送機によって機戦機の補充があったものかもしれない。

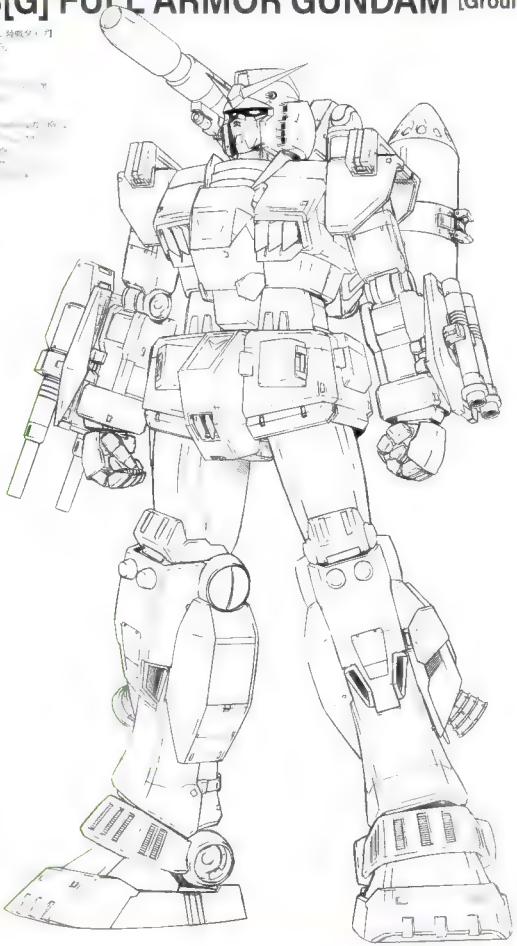
固外での航行能力のテストを行った

外観に大きな変化はないかのようなス[illegible]よりも小回りの利くほうだといいテストパイロットからの要望を受けて機体バランスを見直した結果、やや機[illegible]が短くなった。また、キャノピーの開閉方法が跳ね上げ式になるなど構造の[illegible]ル化が図られている。ほかにも、暗闇仕様の[illegible]の機は降着装置をタイヤからスキッド方式に変え、スキッド底面が滑走のように変化するようにされた。さらに、2、4号機は機[illegible]の機関砲も取り払われ、パイロットの生命維持[illegible]トの増設に充てられている。ただし、テストパイロットのまがらないにも戦闘機が丸腰というのは、あまりにも不安である、という声が強く、最終的に機首の機関砲は残されることになったという。

キャノピーの機体は、滞りなく試験フロクラムを終えたが、終戦までの間にそのまま各地での実戦に投入されている。2、4号機はテスト後にシャフローの施設へと戻されて再整備を受け、その後、ホワイトベースに持ち込まれたのではないかとする未確認情報がある。というのも、サイド7で持ち込まれたコア・ファイターのキャノピーは試作型の特徴ともいえる後方への引き込み式だったはずだが、量産仕様にしかない跳ね上げ式の機体が、ホワイトベースで撮影されたとされる何枚かの写真で確認されているからである。搬入時期は明確ではないが、シャフロー潜入時に受領したという説はほぼ否定されている。画像は、ほかにオデッサ作戦前後のものだからである。

そのほか、BSWS計画で使用されたRX-78-3のコア・ファイターも、機体強度と出力面に重点をおいた量産試作型の機が試験後に配当され、そのまま戦線に投入されている。このプロトタイプ版コア・ファイターは、構造的に脆弱であったA・Bパーツとの接続部も強化されていたという。また、これら量産試作機とは別に、試作仕様の機体が終戦までの間、ごくわずかな数生産され、シャフロー防衛のほか、ジオン公国軍地上部隊の補給、およびサイド3攻撃に向けた各作戦などに投入されている。

FA-78[G] FULL ARMOR GUNDAM [Ground type.]



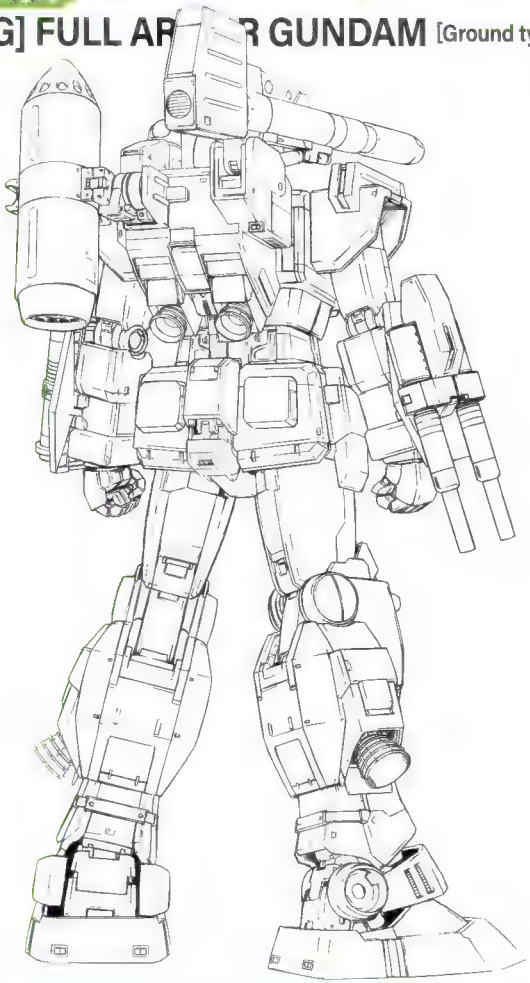
[FA-78[G]〈フルアーマー・ガンダム 陸戦タイプ〉]

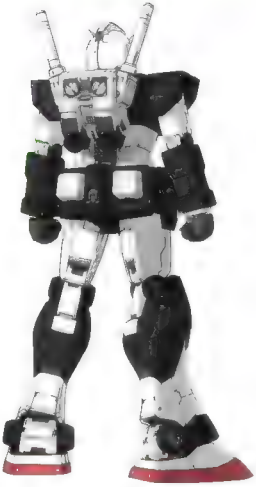
[illegible]

[illegible]

[illegible]

FA-78[G] FULL ARMOR GUNDAM [Ground type.]





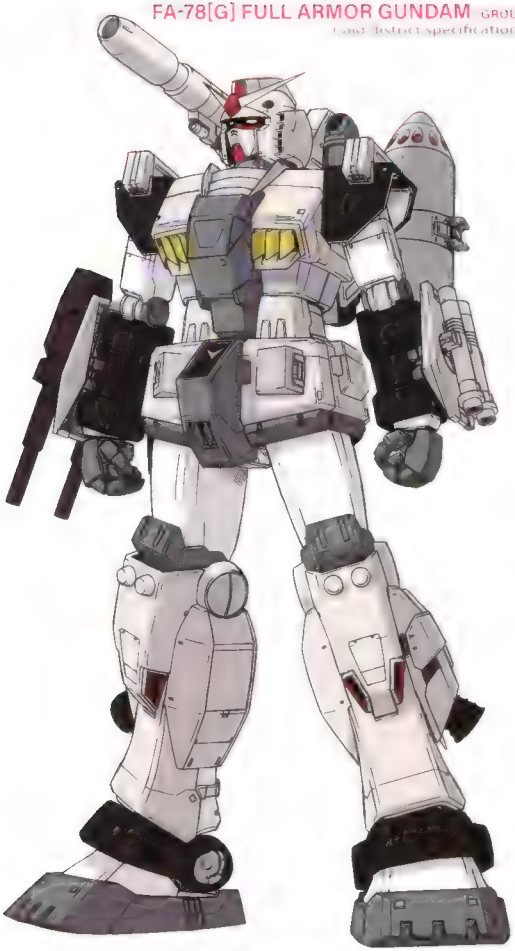
[ ]

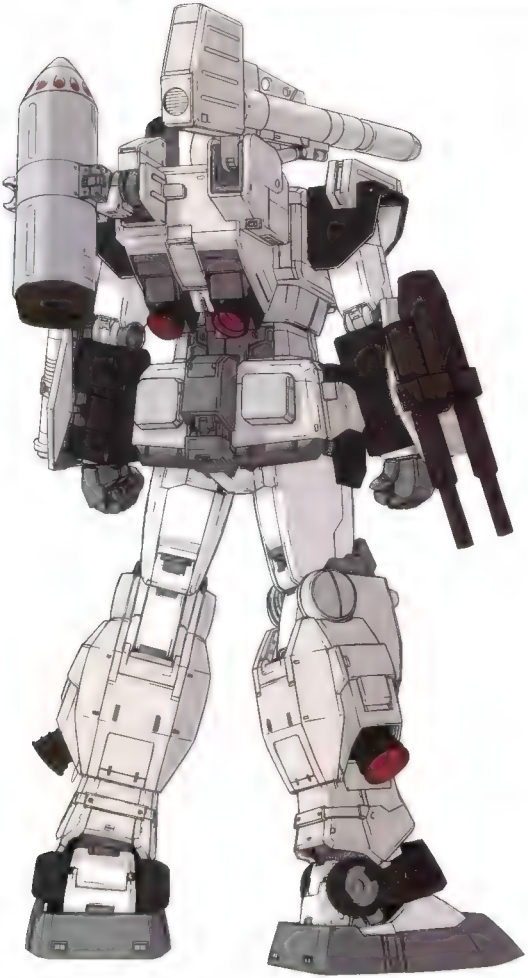
[illegible]

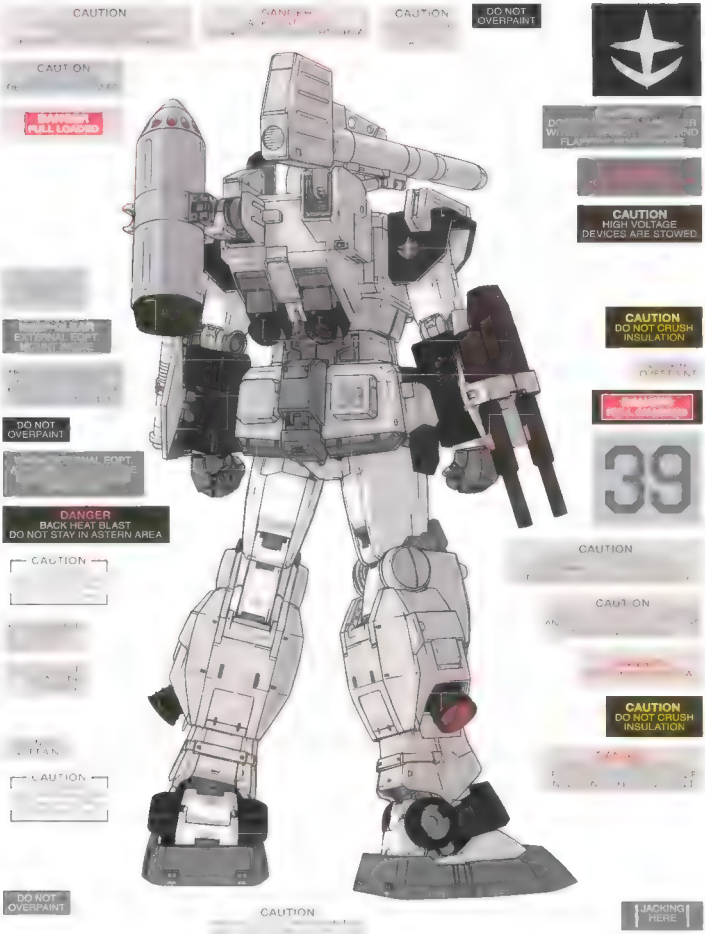
[illegible]の機体は[illegible]ではなく、[illegible]機体の生産性を低下させるような要素が[illegible]RX-78-[illegible]、こうした[illegible]なる全長の[illegible]BAMS[illegible]装甲を[illegible]60mm[illegible]の直撃、[illegible]を[illegible]しており、[illegible]は[illegible]種[illegible]されたが、[illegible]されたが、[illegible]されたため、[illegible]されている。[illegible]RX-78-0[illegible]ではなく、[illegible]後の降下[illegible]RX-78[illegible]化[illegible]はRX-78XX[illegible]のような軽[illegible]機動[illegible]なっていたのである。

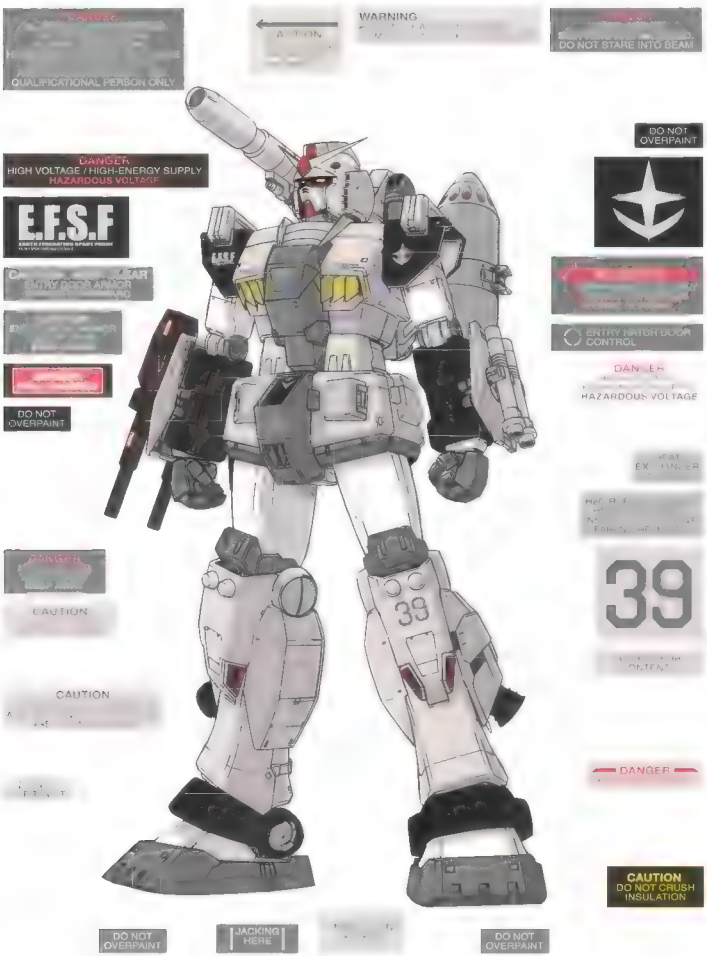
FA-78[G] FULL ARMOR GUNDAM (GROUND TYPE)

Gaia District specification version

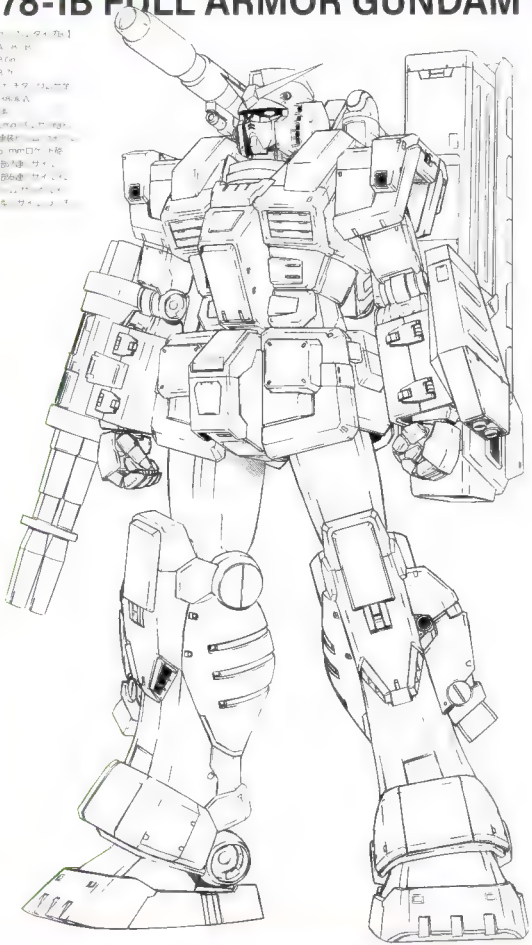


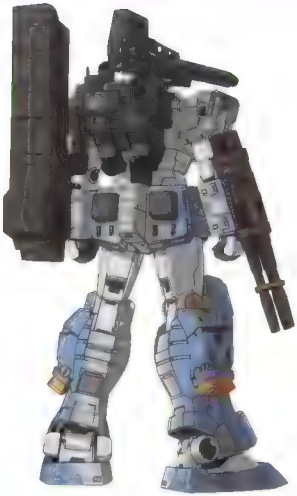



CAUTION
CAUTION
DO NOT OVERPAINT
CAUTION
HIGH VOLTAGE DEVICES ARE STOWED
CAUTION
DO NOT CRUSH INSULATION
DO NOT OVERPAINT
39
DANGER
BACK HEAT BLAST
DO NOT STAY IN ASTERN AREA
CAUTION
CAUTION
CAUTION
DO NOT CRUSH INSULATION
CAUTION
DO NOT OVERPAINT
CAUTION
JACKING HERE


QUALIFICATIONAL PERSON ONLY
WARNING
DO NOT STARE INTO BEAM
DO NOT OVERPAINT
DANGER
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLY
HAZARDOUS VOLTAGE
E.F.S.F
ENTRY DOOR ARMOR
DO NOT OVERPAINT
ENTRY HATCH DOOR CONTROL
DANGER
HAZARDOUS VOLTAGE
39
DANGER
CAUTION
CAUTION
CAUTION
DO NOT CRUSH INSULATION
DO NOT OVERPAINT
JACKING HERE
DO NOT OVERPAINT

FA-78-1B FULL ARMOR GUNDAM [B type.]





【FA-78-1B〈フルアーマー・ガンダム（タイプB）〉】

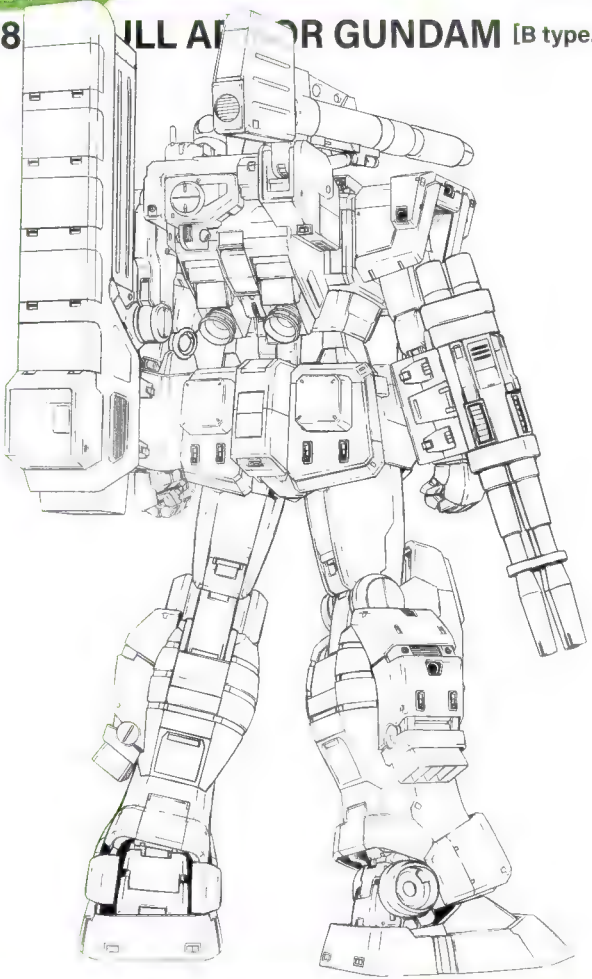
MS[illegible]戦艦クラス[illegible]攻撃力を付与[illegible]目標を掲げ[illegible]FA-78-1[illegible]あったが、その開発プロジェクトの進行過程[illegible]いくつかの武装パターン[illegible]検討され[illegible]タイプB[illegible]呼称されるFA-78-1Bである。

[illegible]この機体に関し[illegible]U.C.0089年、第一次SS（Federation Survey Service）[illegible]大規模な[illegible]一年戦争終結後[illegible]FA-78-1Bとは[illegible]爆撃による対艦攻撃[illegible]大戦末期の[illegible]攻略戦[illegible]艦砲射撃による支援[illegible]この MS 戦が数多く発生した経験から、敵艦隊と[illegible]攻撃[illegible]な火力を有した機体の必要性が指摘され、結果[illegible]この機体の開発[illegible]ある。

基本[illegible]素体がRX-78-3[illegible]されている[illegible]増加装甲[illegible]構造[illegible]FA-78-1の仕様と[illegible]変わりはない。[illegible]武装面[illegible]ため、個別[illegible]要素を確認[illegible]

まず[illegible]装[illegible]であるが[illegible]それも[illegible]バレルの数を増やし[illegible]指摘されていた[illegible]また射撃管[illegible]

FA-78 ULL AR OR GUNDAM [B type.]



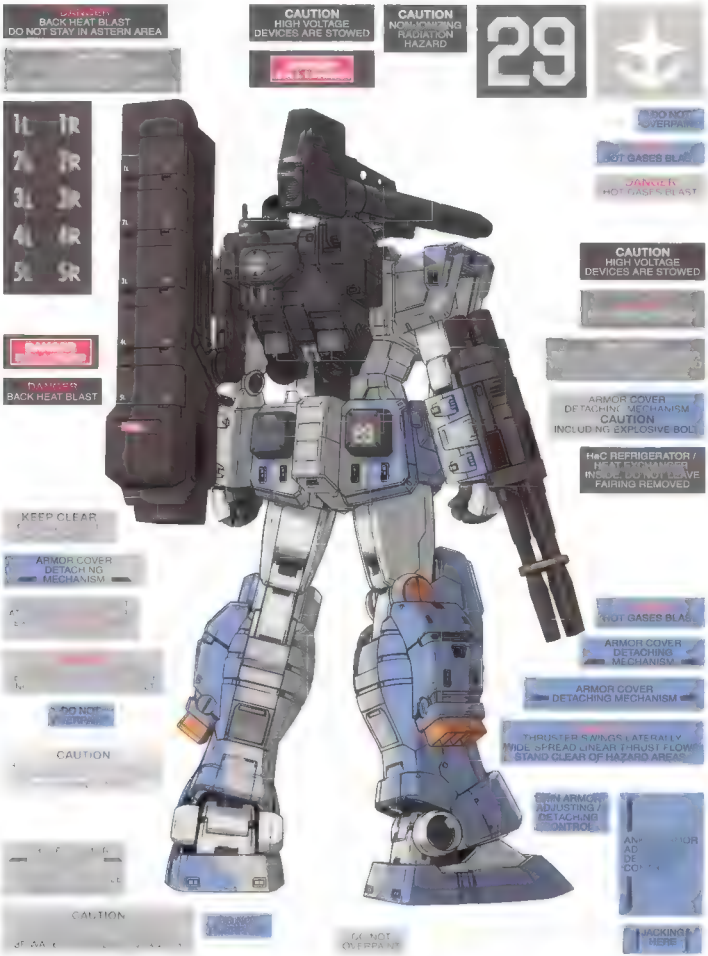
これはバースト射撃、フルオート射撃、単発射撃という3種類の射撃モードを選択可能にするなど、より柔軟な運用ができるように改良が加えられていたらしい。当然、3本のビーム砲を同時に射撃するとなれば、ライフルに要する出力も増すわけであるが、その点は胸部右側のサブ・ジェネレーターを使用してエネルギー供給効率を向上させることで解決する計画であったようだ。また、熱核反応炉のレーザー加速器が更新されていたとされるRX-78-3を素体に指定していたことも、この新型武装の導入を意識してのことであろう。

また、左腕部の簡易小型シールドについても改良が図られている。本武装のバレルが固定式となったため、シールドを交換用バレルのラック替わりにする仕様は廃止され、その代わりにメイン・ビーム・サーベルが内蔵されている。この装備は、おそらく初期段階で検討されていたロケット・エンジン装着プランにあった腕部一体型のビーム・サーベルから着想を得たものであろう。これはおそらく、後述する大型ミサイル・ランチャーが装備されて後方のバックパックに手が届かなくなったための処置と思われる。そして、RGM-79SC ジム・スナイパーカスタムの[illegible]ビーム・サーベルとは異なり2本のサーベルを並べて配置しているのは、同時に使用するためというより予備としての意味合いの方が強かったものと推測される。

そして、FA-78-1Bにとって最も大きな武装となるのが、背部右側に追加された大型ミサイル・ランチャーである。[illegible]を思わせるランチャーには2門の発射管が備えられており、複数種類の弾頭が使用可能なミサイルを合計22基、装填することができたという。これこそまさに「遠距離爆撃」の要となる装備であったに違いない。

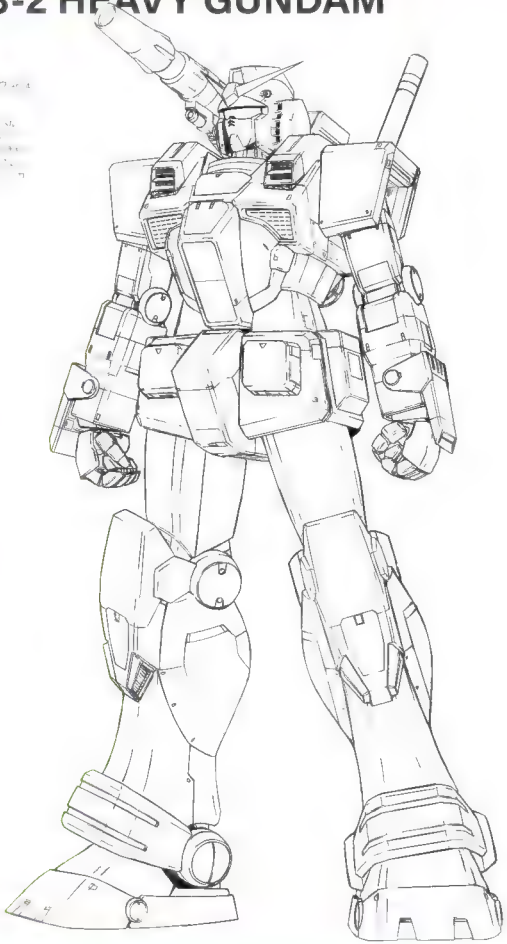
このように、FA-78-1Bは充実した武装を誇り、その総合火力はFA-78-1を上回るものとなっていた。しかし、当然のように重量は嵩み、本体重量は[illegible]から68.7tへと増加している。これでは相応の推力強化を図らなければ機動力は低下してしまうところであるが、この機体に対してそういった対策が採られた形跡は見られない。本機が本領を発揮するのはあくまでも[illegible]対艦攻撃であり、対MS戦も重視していたFA-78-1とは性格が異なっていたためである。また、仮に格闘戦をしなければならないような局面に遭遇したとしても、ミサイルを撃ち尽くした後、ランチャーをパージするといった対応も可能であり、最低限の対応はできると考えていたのではないだろうか。

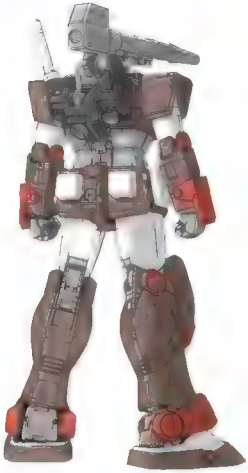
なお、FA-78-1Bの1号機が製造されていたのか否かについては、今日に至るまで地球連邦軍は公式コメントを発表しておらず、そのデータも証拠は残されていない。[illegible]U.C.0090年頃に機体データのサンプリングをもとにシミュレーターで試作試験を行ったに過ぎない[illegible]。一部の武装の性能と搭載システムの先進性を指して、当時の技術力では実現できたとは思えないとする専門家も多く、現在では1号機の建造段階まで進まずに計画自体が頓挫したとする考え方が通説となっている状況である。


DANGER
BACK HEAT BLAST
DO NOT STAY IN ASTERN AREA
CAUTION
HIGH VOLTAGE
DEVICES ARE STOWED
CAUTION
NON-IONIZING
RADIATION
HAZARD
29
1L 1R
2L 2R
3L 3R
4L 4R
5L 5R
DANGER
BACK HEAT BLAST
DO NOT
OVERPRAIN
HOT GASES BLAST
DANGER
HOT GASES BLAST
CAUTION
HIGH VOLTAGE
DEVICES ARE STOWED
ARMOR COVER
DETACHING MECHANISM
CAUTION
INCLUDING EXPLOSIVE BOLT
HeC REFRIGERATOR /
HEAT EXCHANGER
INSULATION MOVE
FAIRING REMOVED
KEEP CLEAR
ARMOR COVER
DETACHING
MECHANISM
HOT GASES BLAST
ARMOR COVER
DETACHING
MECHANISM
ARMOR COVER
DETACHING MECHANISM
DO NOT
OVERPRAIN
CAUTION
THRUSTER SWINGS LATERALLY
WIDE SPREAD LINEAR THRUST FLOW
STAND CLEAR OF HAZARD AREAS
ARMOR
ADJUSTING /
DETACHING
CONTROL
CAUTION
DO NOT
OVERPRAIN
DO NOT
OVERPRAIN
JACKING
POINT


WARNING
DANGER
29
HeC REFRIGERATOR /
INSIDE. DO NOT LEAVE
FAIRING REMOVED
CAUTION
AND HIGH VOLTAGE
ELECTRICAL LINE
DANGER
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLY
E.F.S.F
CAUTION : KEEP CLEAR
ENTRY DOOR ARMOR
OPENS DOWNWARD
LASER AND UV
EMITTERS ARE INCLUDED.
DO NOT STARE INTO BEAM
DANGER
ARMOR COVER
DETACHING MECHANISM
CAUTION
HEAT
CHANGE
ACCESS
ACCESS FOR
CONTENTS
DANGER
29
DO NOT
OVERPAINT
JACKING
HERE
DO NOT
OVERPAINT
INSPECTION
ACCESS

FA-78-2 HEAVY GUNDAM





【FA 78-2、ヘビー・ガンダム〉】

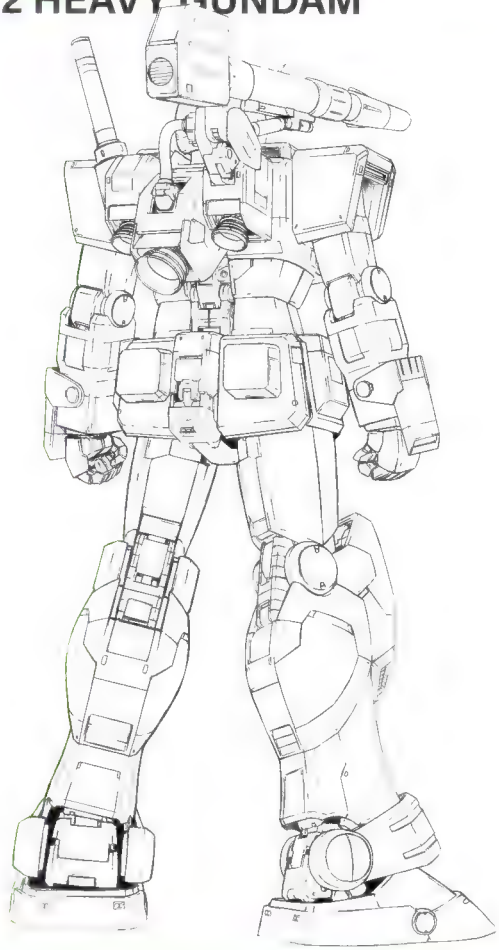
[illegible]

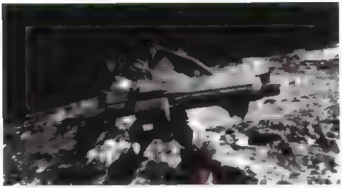
[illegible]

[illegible]

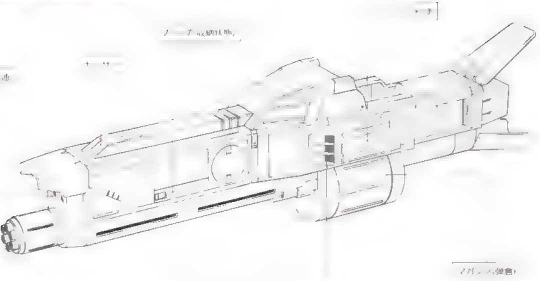
[illegible]

FA-78-2 HEAVY GUNDAM





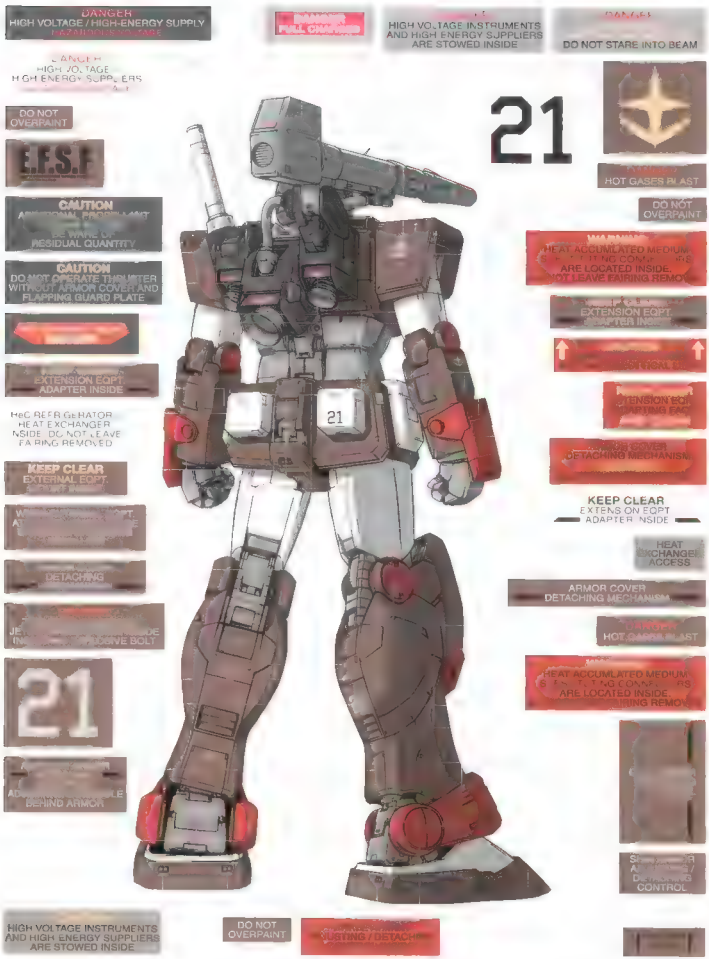
FLAME LAUNCHER

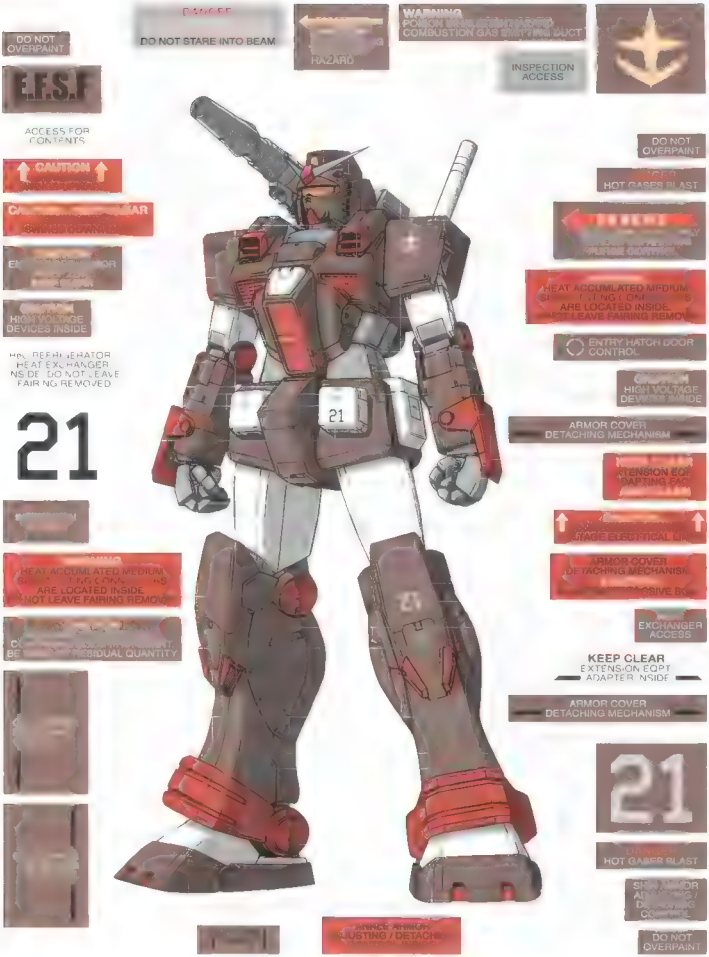


[illegible] RX-78 [illegible] 本機の [illegible] 機[illegible] GLARIS [illegible]

[illegible]、開発が難航し[illegible]ていた。そのため同時進行の[illegible]RX-78[illegible]完成が遅れ[illegible]本機の開発プロ[illegible]は[illegible]中止を余儀なくされてしまう。

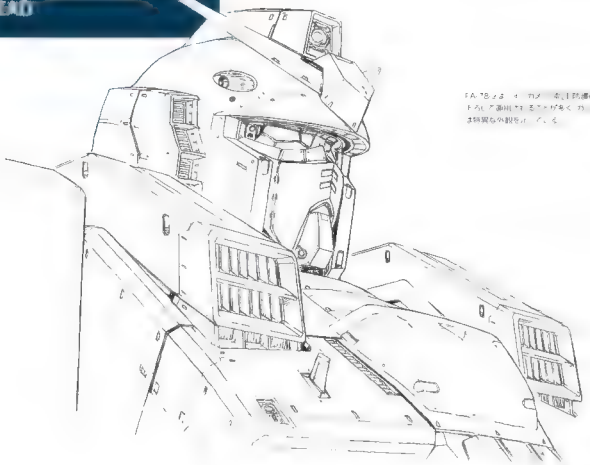
記録によれば、開発が中止したのは終戦の8ヶ月後[illegible]ヶ月後とも[illegible]あった[illegible]われている。その後[illegible]をかけて全[illegible]開発機が3機ないし4機製[illegible]され、各種試験に供されたようだ。[illegible]の内1機について[illegible]テスト中に喪失したといった、試験[illegible]機[illegible]性能[illegible]させたという[illegible]である。しかし[illegible]戦後[illegible]実戦用MS[illegible]本機の存在価値は[illegible]され、本格的な採用には至らなかったようである。


DANGER
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLY
DANGER
HIGH VOLTAGE
HIGH ENERGY SUPPLIERS
DO NOT OVERPAINT
E.F.S.F
CAUTION
RESIDUAL QUANTITY
CAUTION
DO NOT OPERATE TRANSMITTER WITHOUT ARMOR COVER AND FLAPPING GUARD PLATE
EXTENSION EQPT ADAPTER INSIDE
HEAT EXCHANGER INSIDE. DO NOT LEAVE FAIRING REMOVED
KEEP CLEAR
EXTERNAL EQPT
DETACHING
21
BEHIND ARMOR
HIGH VOLTAGE INSTRUMENTS AND HIGH ENERGY SUPPLIERS ARE STOWED INSIDE
DO NOT OVERPAINT
DETACHING / DETACH
FULL CHARGE
HIGH VOLTAGE INSTRUMENTS AND HIGH ENERGY SUPPLIERS ARE STOWED INSIDE
DANGER
DO NOT STARE INTO BEAM
21
HOT GASES IN AST
DO NOT OVERPAINT
HEAT ACCUMULATED MEDIUM
ARE LOCATED INSIDE.
EXTENSION EQPT
ADAPTER INSIDE
EXTENSION EQPT
FAIRING EAC
ARMOR COVER
DETACHING MECHANISM
KEEP CLEAR
EXTENSION EQPT
ADAPTER INSIDE
HEAT EXCHANGER ACCESS
ARMOR COVER
DETACHING MECHANISM
HOT GASES IN AST
HEAT ACCUMULATED MEDIUM
ARE LOCATED INSIDE.
CONTROL


DO NOT OVERPAINT
E.F.S.F
ACCESS FOR CONTENTS
CAUTION
HIGH VOLTAGE DEVICES INSIDE
21
DO NOT STARE INTO BEAM
HAZARD
WARNING
COMBUSTION GAS
INSPECTION ACCESS
DO NOT OVERPAINT
HOT GASES BLAST
HEAT ACCUMULATED MEDIUM
ARE LOCATED INSIDE
ENTRY HATCH DOOR CONTROL
HIGH VOLTAGE DEVICES INSIDE
ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
HEAT ACCUMULATED MEDIUM
ARE LOCATED INSIDE
ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
EXCHANGER ACCESS
KEEP CLEAR
ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
21
HOT GASES BLAST
DO NOT OVERPAINT

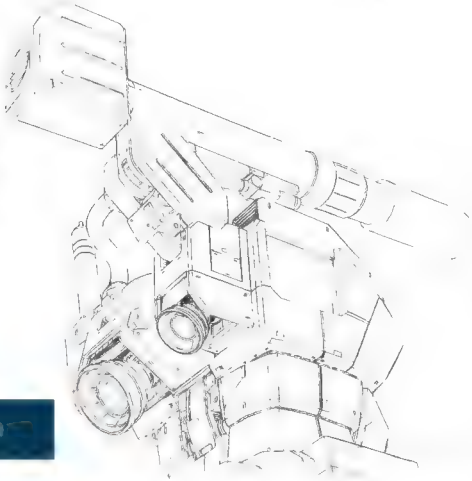
HEAD

FA-78シリーズ：ガンダム：本体防護のためパイザーを下ろして面積を[illegible]ガンダムタイプの中で特異な外観をしている。



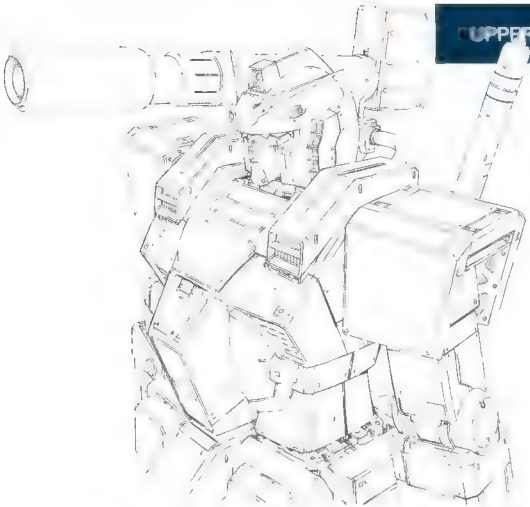
FA-78シリーズは特徴的な[illegible]各種センサーを備えており[illegible]ガンダムタイプ[illegible]ようなセンサー各種が配置[illegible]ことで[illegible]の高性能ぶりが[illegible]高機動性を[illegible]ます。

なお、ビームシールドは設定未満ですが[illegible]なものであり[illegible]

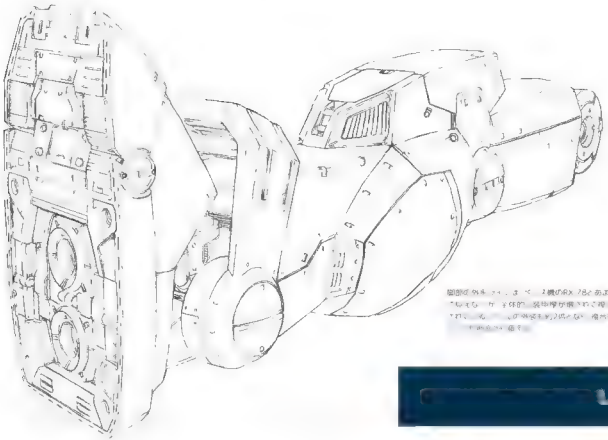


UPPER BODY (REAR)

UPPER BODY (FRONT)

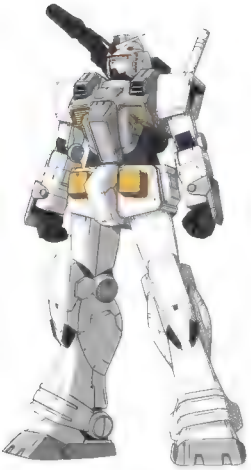


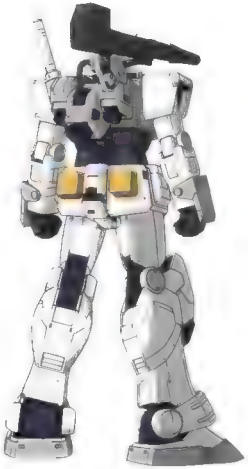
LEG



FA-[illegible]
S.[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

HEAVY GUNDAM VARIATIONS





HEAVY GUNDAM

【運用実績】

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

か[illegible]り、今日まで明らかになっていない。[illegible]ナ[illegible]
[illegible]存在いまだ[illegible]ことはない。

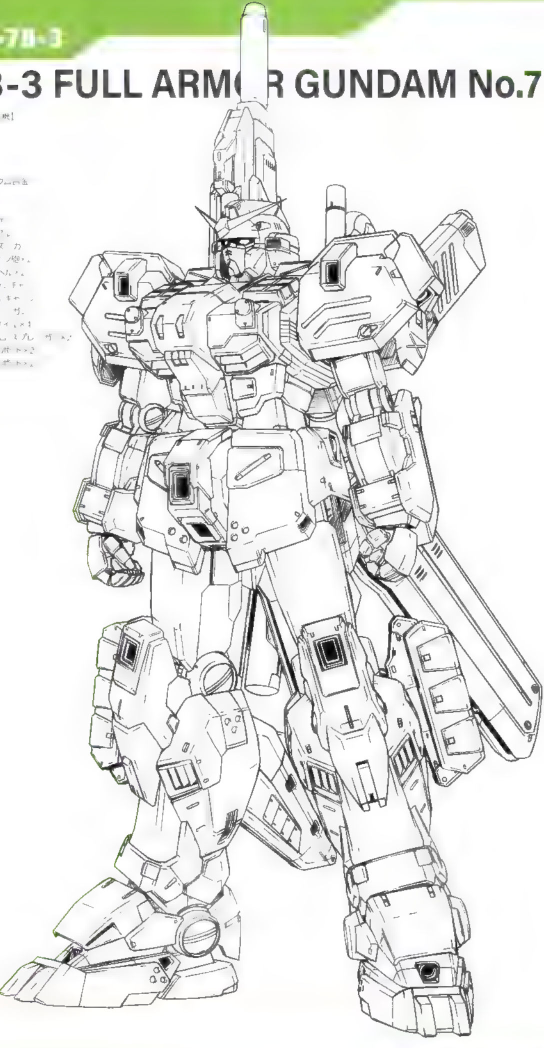
　[illegible]、FA-78-2は開発の際に[illegible]
[illegible]U.C.0080年代[illegible]
[illegible]を[illegible]た試作機[illegible]、[illegible]勢力の戦闘
[illegible]連邦軍の試作機の中にFA-78-2が含まれ
ていた[illegible]。[illegible]機体は[illegible]
[illegible]機
[illegible]配備され[illegible]
[illegible]機体[illegible]機[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]戦[illegible]
も[illegible]FA-78-2本体はFA-78-1
の開発[illegible]構想が
[illegible]タイプの運用[illegible]

[illegible]な運用を前提としたような仕様は含まれていない。[illegible]か
しながら、コア・ファイター・システムをオミットしたことで内
部構造には余裕があり、その周囲も[illegible]ター[illegible]
　[illegible]は言うまでもなく、バイオ・センサーなどのサイコ
ミュ機器を搭載するためのキャパシティがあることもまた
確かである。わざわざ100%近くまで開発された機体を[illegible]
き[illegible]、その素地がFA-78-2には[illegible]
　これ以外にも、最新の資材で[illegible]アーマーが作られた
とされるこの機体は、後に[illegible]ペガサス級強襲揚陸艦[illegible]
[illegible]の艦載機部隊に配備されており、[illegible]
[illegible]における何らかの秘密作戦に従事したようで
あるのだが、その後の同艦の記録からは、ある時期より
FA-78-2に関する記録が途絶えており、その後の運用
は不明である。戦闘により喪失してしまったのか、あるい
は別部隊に[illegible]されたのか、新たな資料の発見が待たれ
るところである。

FA-78-3 FULL ARMOR GUNDAM No.7

【[illegible]ガンダム[illegible]機】

型式番号	FA-78-3
頭頂高	18.3m
本体重量	[illegible]9.1
全備重量	88.1
装甲材質	ルナ・チタニウム合金
出力	1,85[illegible]kW
推力	78,450kg
センサー有効半径	[illegible]m
武装	ビーム・ライフル [illegible]イ[illegible]バス[illegible]カ 60mmバルカン砲×2 ビーム・サーベル×2 [illegible]ネ[illegible]ト[illegible]チャ[illegible] 長距離ビーム・キャノン [illegible]スプ[illegible]ザ[illegible] [illegible]イノロ[illegible]サイル×1 腕部2連[illegible]ビーム・スプレー[illegible]ガン×2 4連ミサイル・ポッド×2 1連[illegible]ミサイル・ポッド×2



【FA-78-3〈フルアーマー・ガンダム7号機〉】

[illegible]

[illegible]

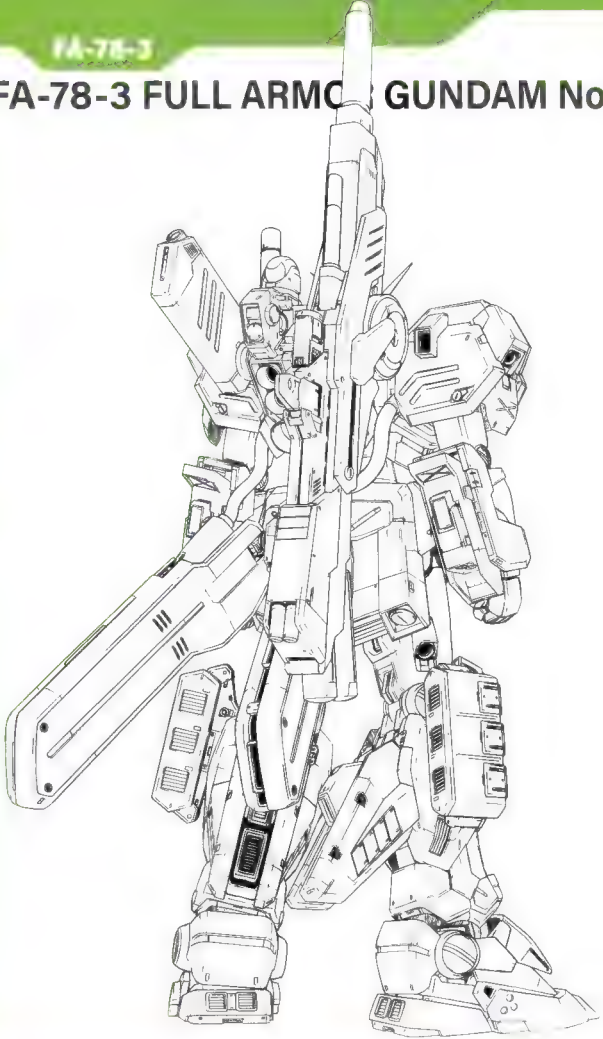
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

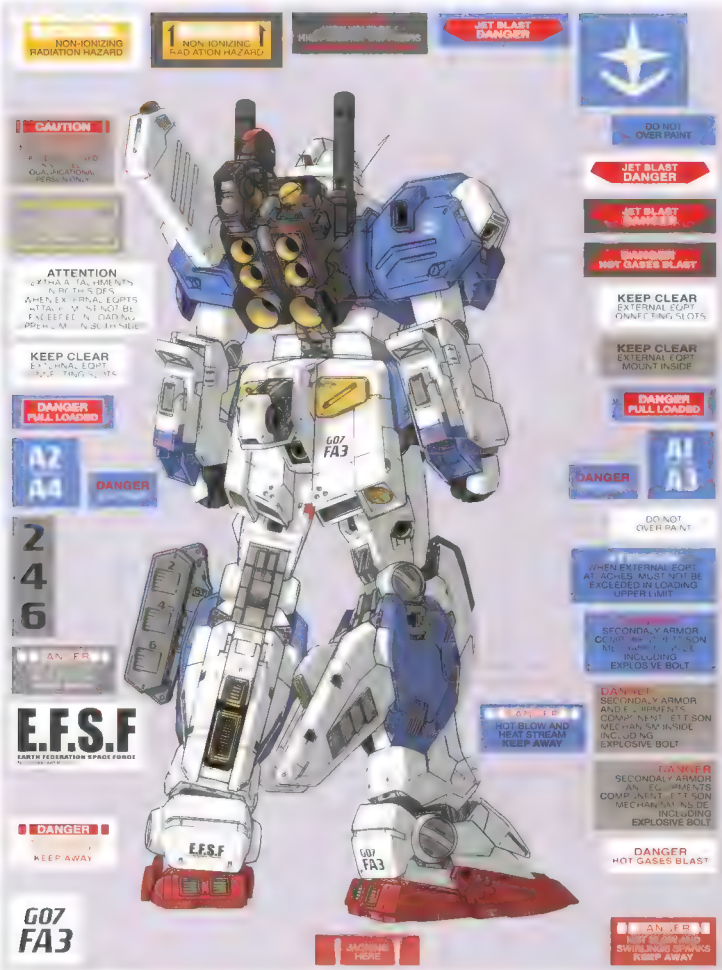
FA-78-3 FULL ARMOR GUNDAM No.7

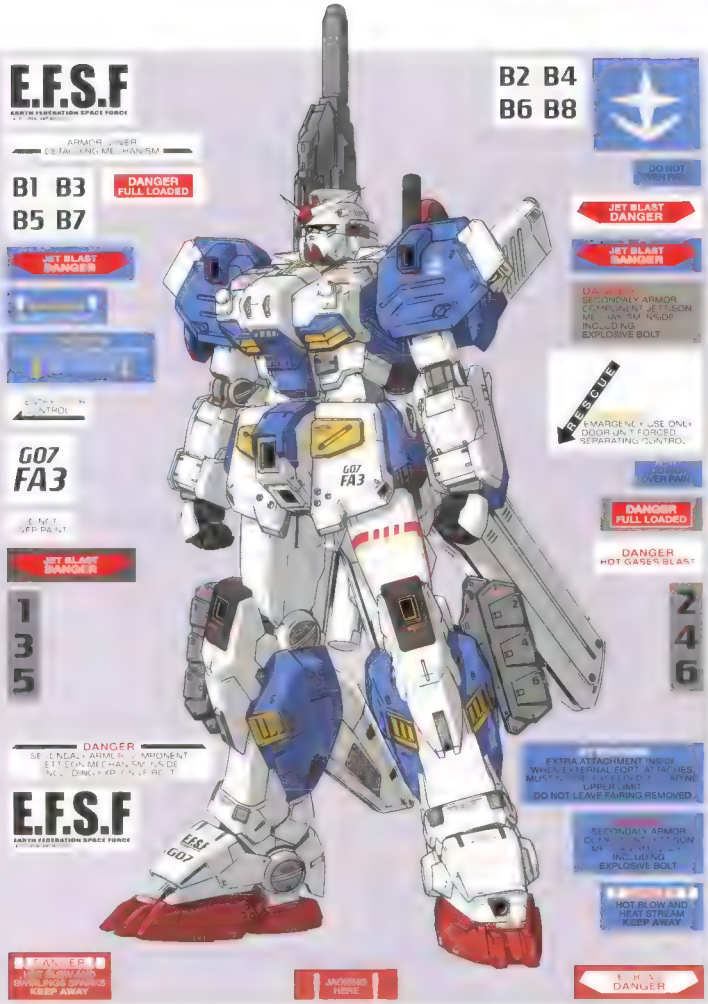


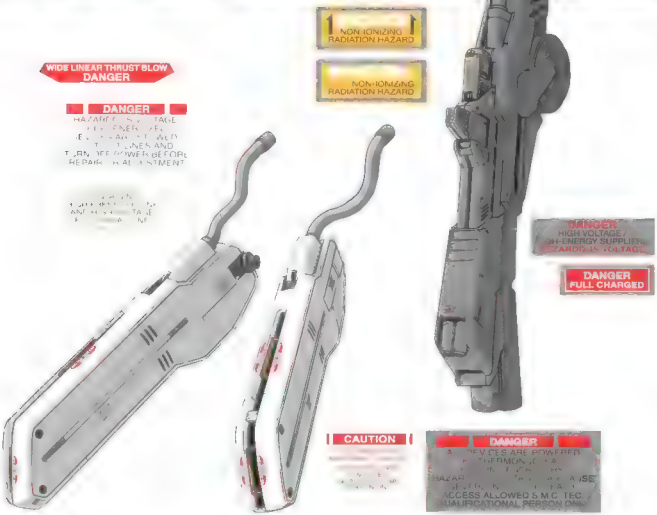
[illegible]

[illegible]

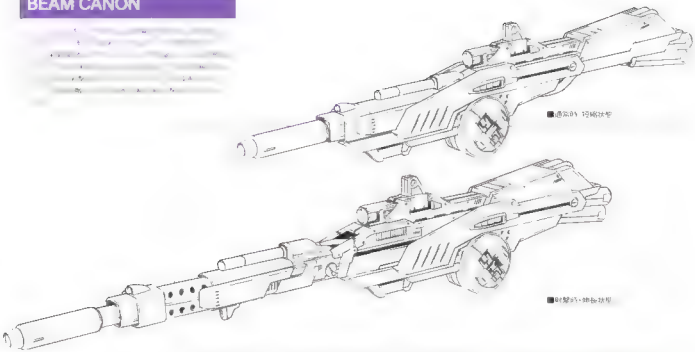
[illegible]


NON-IONIZING RADIATION HAZARD
NON-IONIZING RADIATION HAZARD
JET BLAST DANGER
CAUTION
DO NOT OVER PAINT
JET BLAST DANGER
JET BLAST DANGER
DANGER HOT GASES BLAST
ATTENTION
KEEP CLEAR EXTERNAL EQPT CONNECTING SLOTS
KEEP CLEAR EXTERNAL EQPT MOUNT INSIDE
KEEP CLEAR
DANGER FULL LOADED
DANGER FULL LOADED
A2 A4
DANGER
DANGER
A1 A3
2 4 6
DO NOT OVER PAINT
WHEN EXTERNAL EQPT ATTACHES MUST NOT BE EXCEEDED IN LOADING UPPER LIMIT
SECONDALY ARMOR INCLUDING EXPLOSIVE BOLT
DANGER SECONDALY ARMOR AND EQUIPMENTS COMPONENT EJECTION MECHANISM INSIDE INCLUDING EXPLOSIVE BOLT
DANGER SECONDALY ARMOR AND EQUIPMENTS COMPONENT EJECTION MECHANISMS INCLUDING EXPLOSIVE BOLT
DANGER HOT GASES BLAST
HOT BLOW AND HEAT STREAM KEEP AWAY
E.F.S.F
EARTH FEDERATION SPACE FORCE
DANGER
KEEP AWAY
G07 FA3
E.F.S.F
G07 FA3
MACHINE HERE
DANGER HOT GASES AND SWIRLING SPARKS KEEP AWAY


E.F.S.F
EARTH FEDERATION SPACE FORCE
B1 B3
B5 B7
DANGER
FULL LOADED
JET BLAST
DANGER
G07
FA3
1
3
5
DANGER
E.F.S.F
EARTH FEDERATION SPACE FORCE
B2 B4
B6 B8
DO NOT
COVER PAIN
JET BLAST
DANGER
JET BLAST
DANGER
DANGER
SECONDALY ARMOR
COMPONENT JETTISON
MECHANISM INSIDE
INCLUDING
EXPLOSIVE BOLT
RESCUE
EMARGENCY USE ONLY
DOOR UNTFORCED
SEPARATING CONTROL
DANGER
COVER PAIN
DANGER
FULL LOADED
DANGER
HOT GASES BLAST
2
4
6
EXTRA ATTACHMENT INSIDE
WHEN EXTERNAL EQPT ATTACHES,
UPPER LIMIT
DO NOT LEAVE FAIRING REMOVED
SECONDALY ARMOR
INCLUDING
EXPLOSIVE BOLT
HOT BLOW AND
HEAT STREAM
KEEP AWAY
DANGER
DO NOT CONTACT
BIVILRAGE SPARKS
KEEP AWAY
JAMMING
HERE
DANGER


NON-IONIZING RADIATION HAZARD
NON-IONIZING RADIATION HAZARD
WIDE LINEAR THRUST BLOW DANGER
DANGER
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLIES
DANGER FULL CHARGED
CAUTION
DANGER
ACCESS ALLOWED S.M.C. TEC / QUALIFICATIONAL PERSONNEL

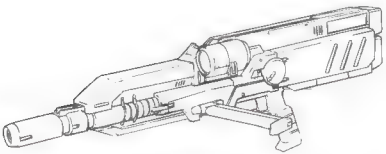
BEAM CANON



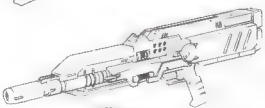
■通常砲・砲身伸縮状態

■射撃モード・砲身収納状態

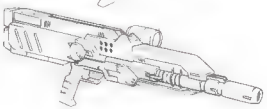
BEAM RIFLE



■ビーム・ライフル



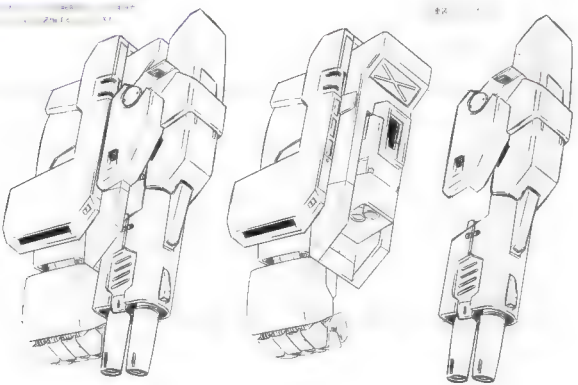
■ビーム・ライフル・ショート



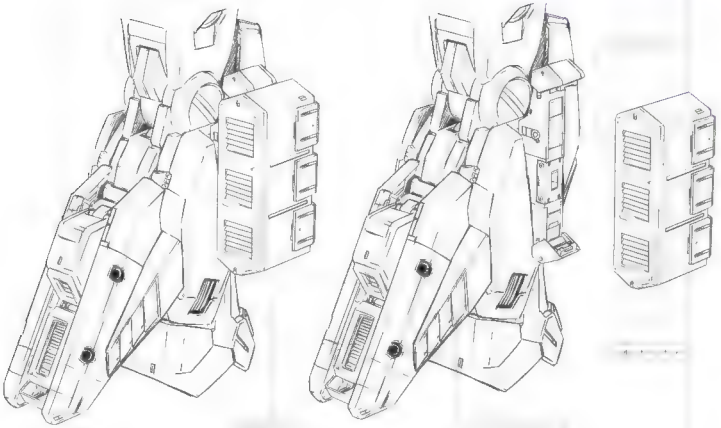
■ビーム・ピストル

UPPER BODY

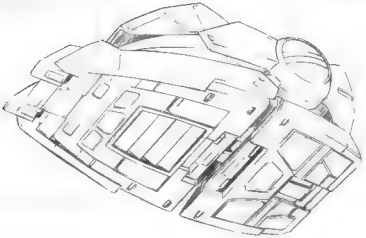
TWIN BEAM GUN



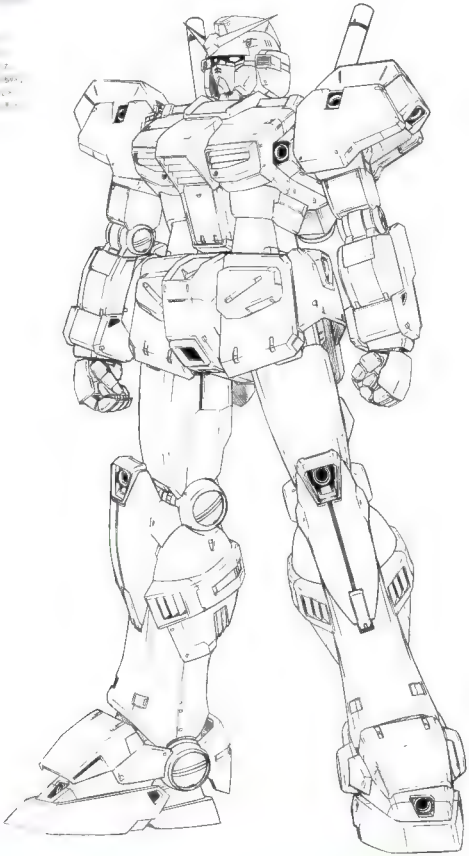
LEG MISSILE POD

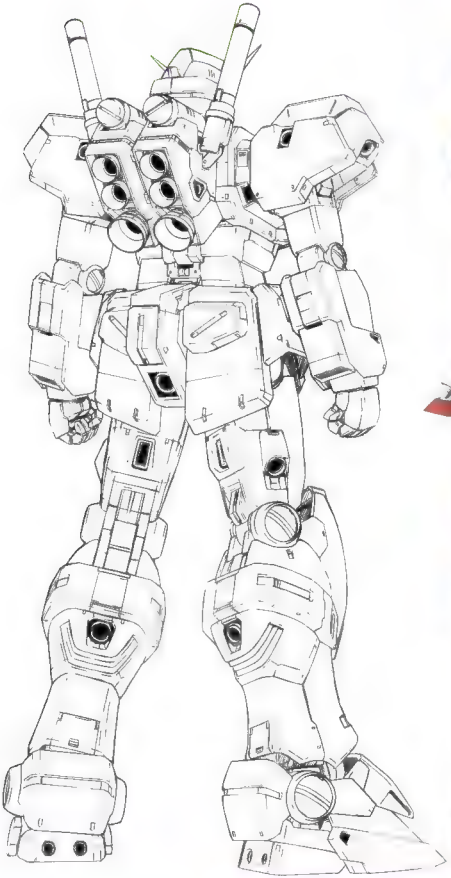


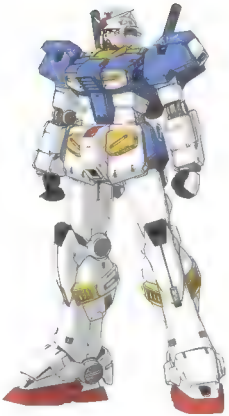
SOLE ARMOR

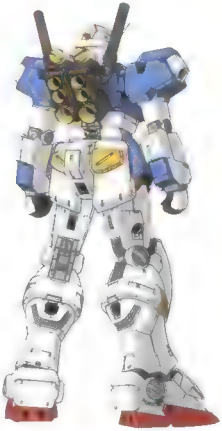


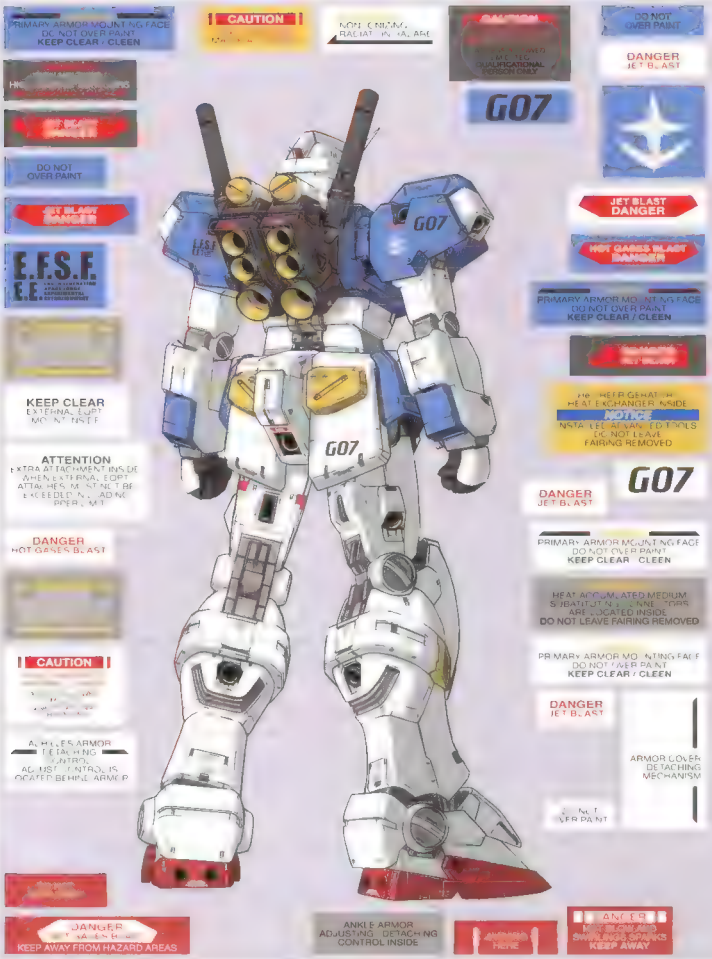
RX-78-7 GUNDAM No.7

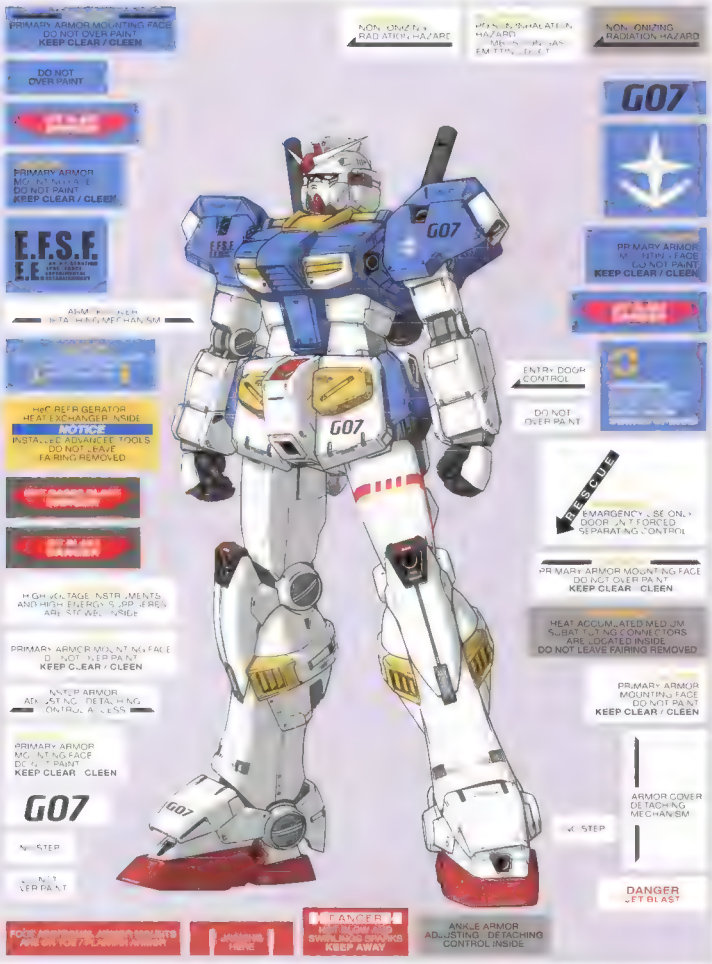









PRIMARY ARMOR MOUNTING FACE
DO NOT OVER PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
CAUTION
NON-EMITTING RADIATION HAZARD
DO NOT OVER PAINT
DANGER
JET BLAST
G07
DO NOT OVER PAINT
JET BLAST DANGER
E.F.S.F.
JET BLAST DANGER
HOT GASES BLAST DANGER
PRIMARY ARMOR MOUNTING FACE
DO NOT OVER PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
KEEP CLEAR
EXTERNAL LEFT MOUNTING FACE
ATTENTION
EXTRA ATTACHMENT INSIDE
WHEN EXTERNAL LEFT ATTACHES, MUST NOT BE EXCEEDED WITHOUT PROPER LIMIT
NOTICE
INSTALLED TOOLS DO NOT LEAVE FAIRING REMOVED
G07
DANGER
HOT GASES BLAST
DANGER
JET BLAST
PRIMARY ARMOR MOUNTING FACE
DO NOT OVER PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
HEAT ACCUMULATED MEDIUM SUBSTITUTING CONNECTORS ARE LOCATED INSIDE
DO NOT LEAVE FAIRING REMOVED
CAUTION
PRIMARY ARMOR MOUNTING FACE
DO NOT OVER PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
DANGER
JET BLAST
ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
ANKLES ARMOR DETACHING CONTROL
ADJUST CONTROL IS LOCATED BEHIND ARMOR
DO NOT OVER PAINT
DANGER
JET BLAST
KEEP AWAY FROM HAZARD AREAS
ANKLE ARMOR ADJUSTING DETACHING CONTROL INSIDE
ANCHOR HERE
ANCHOR
KEEP AWAY


PRIMARY ARMOR MOUNTING FACE
DO NOT OVER PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
DO NOT
OVER PAINT
PRIMARY ARMOR
DO NOT PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
E.F.S.F.
NON-IONIZING
RADIATION HAZARD
NON-IONIZING
RADIATION HAZARD
G07
PRIMARY ARMOR
DO NOT PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
G07
G07
ENTRY DOOR
CONTROL
DO NOT
OVER PAINT
RESCUE
EMERGENCY USE ONLY
DOOR FORCED
SEPARATING CONTROL
HEAT EXCHANGER INSIDE
NOTICE
INSTALLED ADVANCED TOOLS
DO NOT LEAVE
FAIRING REMOVED
DANGER
HIGH VOLTAGE INSTRUMENTS
AND HIGH ENERGY SUPPLIERS
ARE STORED INSIDE
PRIMARY ARMOR MOUNTING FACE
DO NOT OVER PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
PRIMARY ARMOR MOUNTING FACE
DO NOT OVER PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
HEAT ACCUMULATED MEDIUM
SUBSTITUTING CONNECTORS
ARE LOCATED INSIDE
DO NOT LEAVE FAIRING REMOVED
MASTER ARMOR
ADJUSTING DETACHING
CONTROL ACCESS
PRIMARY ARMOR
DO NOT PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
PRIMARY ARMOR
MOUNTING FACE
DO NOT PAINT
KEEP CLEAR / CLEEN
G07
G07
ARMOR COVER
DETACHING
MECHANISM
DANGER
JET BLAST
DANGER
KEEP AWAY
ANKLE ARMOR
ADJUSTING DETACHING
CONTROL INSIDE

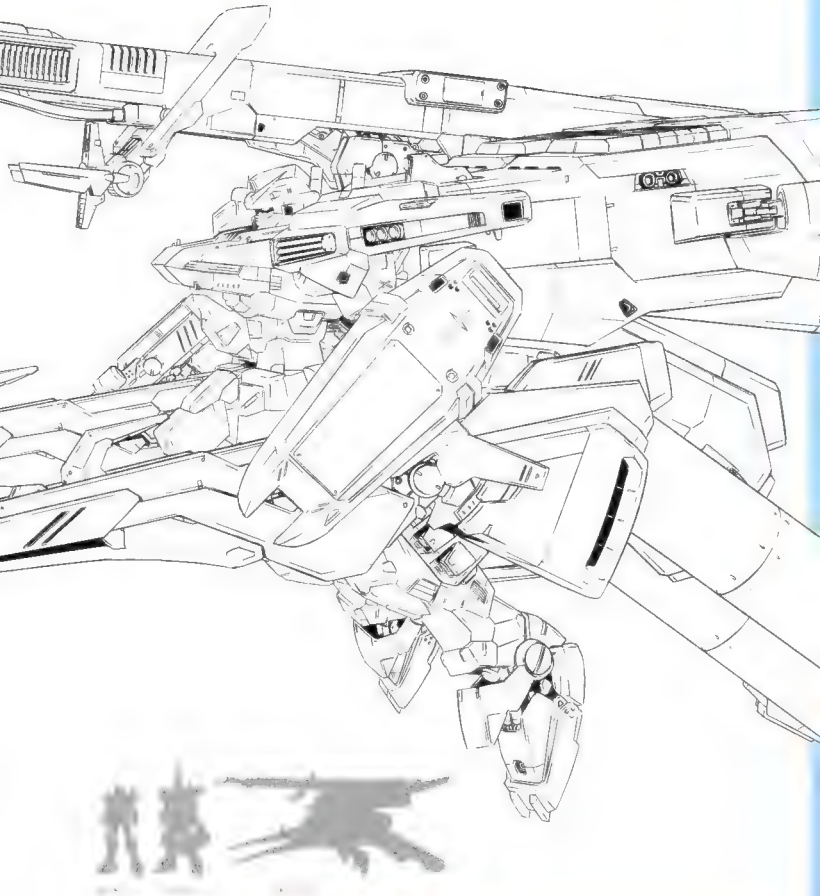
HFA-78-3 HEAVY FULL ARMOR GUNDAM

【HFA-78-3〈重装フルアーマー・ガンダム〉】

本体たるRX-78-2が近接格闘戦を、ファースト・アーマー装着状態であるFA-78-3が中距離射撃戦を想定していたことはすでに述べたが、さらに重ねてセカンド・アーマーを装着した状態であるHFA-78-3は遠距離砲撃戦、および対艦戦闘に主眼を置いた設計がなされている。背部増加パーツに長射程・大出力のメガ・ビーム・キャノンとハ連ミサイル・ポッド2基を装備するほか、腰部にも2門のビーム砲を備えており、打撃力はFA-78-3をさらに凌駕するものとなった。また、これらのビーム兵器をドライブするために腰部の増加パーツ内に高出力シェネレーターを搭載、その甲斐あって総出力は3,110kwという規格外の数値となった。

ただし、これらの装備を搭載するからには、機体サイズと重量の肥大化もまた避けられない。そこで、脚部に補助推進ユニットを増設すると同時に、背部に大推力のブースター・ユニットをマウント。これと並行して大型のフロペラント・タンクを追加したことで、本機は1G重力下では自力すら不可能な状態となった。しかしながら、無重力環境下ではトータル95,540kgに達するスラスター推力に物をいわせ、爆発的な加速力で航行可能なモンスターマシンと化したのだった。

こうした設計は、FSWS計画の初期段階における試案のひとつ、下半身をブースター・ユニットで覆い、固定式のビーム砲4門を装備するというプランに極めて近い。本機の開発にあたっては、一年戦争中に得られた対MA戦のデータが参考にされたともなえられているため、必ずしも試案をそのままに転用したわけでもないだろうが、無関係ともいい切れないところであろう。大戦末期には、ほぼ同様のコンセプトを持つRX-78Opt-G(タッシェ)なる機体の開発が検討されていたともいわれており、MA的な性格を有するRX-78の強化プランというトレンドが、当時の連邦軍上層部の中に確かに存在したことを窺わせている。また、HFA-78-3のコンセプトは、後にアナハイム・エレクトロニクス社が開発を担当したRX-78GP03「デンドロビウム」とも共通点が多い。同機を含むGP計画機に関しては、一度は公的記録から抹消されているため詳細な経緯は不明ながらも、少なからず影響を与えたのではないかと考えられている。



■ [illegible]

■ [illegible]

【運用実績】

7,000kw級ジェネレーター2基・高出力モーターの導入といった先進的な技術を用いたこともあり、RX-78-7（RX-78-5、旧RX-78-3[illegible]）は、一年戦争終結後まで大きくずれこんだ。さらに、戦後に推進された軍縮の煽りを受け、開発体制が縮小されたことで[illegible]された[illegible]などへの対応で行われた開発作業も遅れを見せていたという。それでもU.C.0080年1月には、RX-78通常7号機のパーツを転用して建造されていたRX-78-7は機動テストが行えるレベルにまで到達。さらにU.C.0081年9月からは特殊部隊へ引き渡され、後に実戦投入も果たしている。ここでは運用部隊の成立経緯を含め、戦時の状況を紹介していきたい。

U.C.0079年12月31日、ジオン公国の最終防衛ラインを担っていた要塞ア・バオア・クーが陥落。その後一部敗残部隊による武装蜂起によって混乱状態にあったサイド3本国では、[illegible]議会を招集[illegible]首相を[illegible]ジオン共和国臨時政府の樹立を[illegible]本国を離れていたダルシア・バハロ首相はサイド6の仲介を得て、ジオン共和国臨時政府の代表として地球連邦政府との停戦交渉を開始。年を跨いでU.C.0080年1月1日、両者は月面都市グラナダで、終戦協定を締結した。

かくして戦争は終わった。だが、ア・バオア・クー攻防戦の勝敗が決してから24時間足らずでは、国内諸派の調整なども終えられるはずもない。敗者たるジオン公国（もといジオン共和国）は事実上の分裂状態にあり、臨時政府の命令を無視して、武装解除を拒否したまま姿を消した旧軍部隊も少なくなかった。このような経緯があって、戦後世界にはMSを含む兵器を保有した敗残兵たちが跋扈するという、極めて不安定な状態に置かれたのである。

むろん地球連邦軍とて無策であったわけではない。戦時中に動員された部隊の再編を進める一方で、ゲリラの掃討を専門とする特殊部隊の新設を推進したのもその一例といえるだろう。こうした流れを汲むのが、U.C.0081年に編成されたファントム・スイープ隊であり、同隊が後にRX-78-7（ガンダム7号機）を受領

地球を去ることになった。

UC0081年6月1日、連邦軍司令部はアフリカ大陸北部にあるオアシス残党勢力の拠点を一斉に襲撃する作戦を発動した。この作戦は3日間続き、ケーニッヒ・スイート隊もあるものの残党勢力は壊滅に追い込まれ、連邦軍は一旦は成果を挙げたかに見えた。しかし、戦闘終了後、基地内部で爆発が起こり、基地は一瞬にして炎上してしまう。

その後、ケーニッヒ・スイート隊のパイロットはパイロット専用宿舎の中庭で、ジオン残党勢力の一隊と遭遇する。ケーニッヒ・スイート隊の襲撃を受けた敵兵は、あたかもこれが最後の戦いであるかのように、新型機を駆使して抵抗を試みるが、MS-08TX/X イフリートの強襲を前に、ほぼ全滅状態となった。

「捕虜を見せる」作戦を含めた、連邦軍残党勢力の動きはあまりに手ぬるすぎる。ジオン残党勢力は内通者の存在を疑い、秘密裏に内部調査を開始したようである。

これ以降、ケーニッヒ・スイート隊はベルファスト周辺の工業地帯の防衛任務をはじめ、東南アジア・アフリカ・中東などを転戦しながら、残党勢力への対応に追われることとなる。彼らの戦闘記録を俯瞰すると、まるで戦場のように濃密であり、部隊は7カ月を過ぎる頃には、早くも撃墜数が一桁に達していた。その間も内通者をあぶり出すべく、ケーニッヒ・スイート隊は暗躍していた。

結果からいえば、ケーニッヒ・スイート隊はベルファスト周辺の工業地帯の防衛任務をはじめ、東南アジア・アフリカ・中東などを転戦しながら、残党勢力への対応に追われることとなる。彼らの戦闘記録を俯瞰すると、まるで戦場のように濃密であり、部隊は7カ月を過ぎる頃には、早くも撃墜数が一桁に達していた。その間も内通者をあぶり出すべく、ケーニッヒ・スイート隊は暗躍していた。

ケーニッヒ・スイート隊の設立に関しては、彼女の上司であるタイプロ・テーブという名の上層将校がいたのである。「戦争は経験を積ませる場」と考えた彼女は、ケーニッヒ・スイート隊の設立にあたって引き抜かれるまでは、オーラスタ基地において研究開発部門のテストパイロットを務めていた。一方、アッシュ中尉はRX-78-7の機動確認プログラムの開発にも関与していたとのことで、これが後々、大きな問題へ発展してゆく。

だが、彼女のスパイ行為が露見することはまだなかった。[illegible]ことなく、U.C.0081年7月、世界各地で同時多発的に旧ジオン残党勢力による武装蜂起が発生。ファントム・スイープ隊は[illegible]南[illegible]を拠点[illegible]に向かい、[illegible]戦果をあげることになる[illegible]。これらの動きは旧ジオン残党勢力が本命視していた[illegible]作戦から連邦の目を欺くための陽動に過ぎなかった。

本来の作戦とは、大戦中に進められてきた月面の資源輸送用マスドライバー施設を利用した質量弾攻撃計画[illegible]イーブル・ネイル[illegible]作戦[illegible]準備を進めながらも、戦局の悪化[illegible]ア・バオア・クー要塞の防衛[illegible]されており[illegible]質量弾攻撃の目標を[illegible]。U.C.0080年1月31日、ア・バオア・クー要塞から脱出した[illegible]・ネイルは、ジオン共和国政府の武装解除命令を無視して地球に降下し、[illegible]徹底抗戦を主張していたオ[illegible]・ハイマン大佐率いる地上攻撃軍系の残党勢力と合流することで、新たな本来の作戦の再開を目指して動き始めた。

以後、彼らは連邦軍基地の襲撃を繰り返すことで武器弾薬を確保し、U.C.0081年8月1日、ついに本来の作戦を実行に移す。ファントム・スイープ隊を[illegible]・ネイル本隊は、マスドライバー施設[illegible]陽動部隊[illegible]最初の攻撃目標でもあるオーガスタ基地へと迫る。質量弾の落下を確かなものとするため、同基地に併設されたレーダー施設を破壊し、防空網に穴を開けようとしていたのだ。対する連邦軍は、ファントム・スイープ隊を中核とする戦力を展開することで迎撃。ハイマン大佐は目的を遂行すべく、かつての攻撃部隊による捨て身の特攻まで敢行するが、戦力に

防衛線の一角を突破されることはあるまい。日独方戦線を率いるヴィルヘルム・ローゼンベルク中佐の時代、彼は、ドイツ軍の戦車部隊を撃退するための対戦車砲を、自国のストライク・ウィッチーズ基地から派遣されていた。ただ、ここで水を向けられた重戦車は失敗を恐れるあまりに、なかなか自分で戦おうとしないのだ。なぜなら、ロッテ・ウィッチーズ隊の戦闘機を率いるエーリカ・ハルトマン大尉に対して、義勇軍攻撃力を誇っていると言われていたからだ。ハイ・ウィッチであるとかなんとかに森見したのだ。ハルトマンは、その母艦を撃破されるわけにはいかない。

後ろ盾なんて、なにもない世界で、連邦軍は、小人族の重戦車を全滅させることなく、特に手出しされていない。オーク族基地から派遣されたイェーガー・ハイ・ウィッチの残骸がそこにあるだけだ。ロッテ・ウィッチの戦闘機部隊の戦闘力を保有している連邦軍の強さを高めるためだけだ。本当ならば、ガ[illegible]わったままなかったのであろう。

しかし、0081年9月、自戦線崩壊を望む他部隊と合流したイェーガー・ハイ・ウィッチは、アフリカ基地から移動を開始した。HIV撃破施設を白日のもとに晒すためだ。連邦軍の撃退を図ろうというのである。一方、連邦軍はアフリカ方面軍と南アフリカ方面軍の共同により戦闘勢力の[illegible]中佐に率いられ、ブリタニア・ストライク隊もその先鋒として掲げられたアフリカ基地へと全力を注ぐ。

アフリカ基地への攻防は機先を制めた。ハイ・ウィッチ残勢力は戦力の一部を割いて、強力な増援部隊を派遣することで時間稼ぎを試みるその動きもあって、連邦軍は損害を出すものの、ハイ・ウィッチの残骸を載せたHIVを取り逃がしてしまった。

[illegible]後[illegible]ナイン[illegible]ル・ナイン[illegible]は[illegible]そのリイ[illegible]を[illegible]なた[illegible]搭載MSを含む補給物資を受け取り戦力を[illegible]作戦[illegible]慎重[illegible]物資[illegible]物資輸送[illegible]建造された[illegible]ナイン[illegible]攻撃[illegible]

複雑な戦[illegible]が[illegible]Ｑ[illegible]複数の攻撃[illegible]を準備[illegible]残され[illegible]破壊させ[illegible]作戦[illegible]

き進むしかなかったのかもしれない。

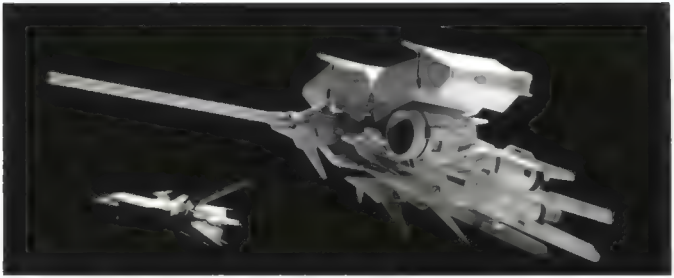
[illegible]ナイン[illegible]ル・ナインと奇妙な因縁で結ばれていた[illegible]隊は、その追撃と[illegible]攻撃の[illegible]を改めて命じられ[illegible]向き合うことになる。[illegible]強襲揚陸艦[illegible]RX-78-7を受領したのは、まさに[illegible]である。

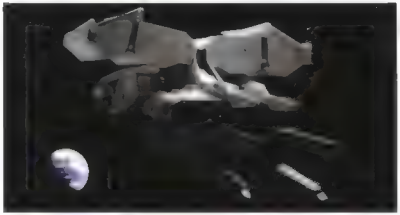
ただし[illegible]状態ではあった[illegible]RX-78-7の機動[illegible]使用[illegible]されていたのだ。[illegible]が作成[illegible]遅延されたためである。それは[illegible]RX-78-7[illegible]艦内で最終調整[illegible]操縦性[illegible]操作ができない[illegible]である。[illegible]機動[illegible]の戦闘[illegible]ー・アーマーを装着したRX-78-7状態で出撃するも、機動性の高い敵MAに翻弄され[illegible]敵機[illegible]したものの[illegible]キャノンを破壊されるなど手痛い損害を被ったという。

[illegible]サラブレ[illegible]艦内では[illegible]の機動補助[illegible]の精度を高めよう[illegible]戦[illegible]続けられて[illegible]なか[illegible]戦局も変化[illegible]待って[illegible]くれない。マスドライバー[illegible]拠点[illegible]敵[illegible]が確認されたのだ。[illegible]作戦を[illegible]。

[illegible]ドライバーを支援[illegible]周辺に[illegible]残存勢力[illegible]。それ[illegible]されれば、マスドライバー[illegible]状況はより複雑[illegible]しまう。[illegible]スイープ隊では先行する[illegible]勢力[illegible]敵艦を[illegible]撃するため[illegible]を[illegible]HFA-78-7[illegible]機[illegible]である機動補助[illegible]問題を抱えたままでの運用はハイリスクではあった[illegible]これを[illegible]艦隊MSの[illegible]撃し、敵戦力の[illegible]を[illegible]たのである。

[illegible]なかで[illegible]部隊[illegible]施設[illegible]ファントム・スイープ隊[illegible]隊[illegible]最終決戦を前に[illegible]されていた機動補助[illegible]の使用[illegible]現場判断[illegible]の[illegible]RX-78-7は本来の性能を発揮できる状態[illegible]それまでの戦闘で増加[illegible]RX-78-7の[illegible]マスドライバー施設を巡る[illegible]戦闘において[illegible]MSを複数撃墜する戦果を[illegible]発射[illegible]できなかったものの、ファントム・スイープ隊の活躍も





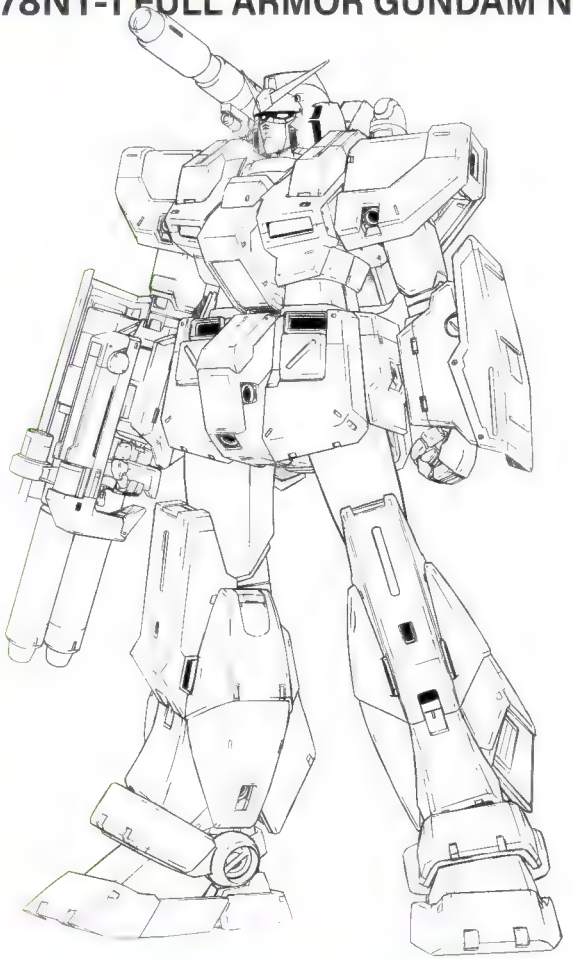
■[illegible]

また、武器の物語を考え直すとき、[illegible]砲撃戦によって、マスドライバーを[illegible]ような[illegible]を破壊、[illegible]軌道を大[illegible]、[illegible]ような[illegible]したような[illegible]もない[illegible]まま[illegible]を[illegible]ようにしたいと思った。

[illegible]のように、RX-78-2までの戦[illegible]おいても優れた性能を有しているが、[illegible]用してみたら[illegible]残念勢力による[illegible]扱われた[illegible]。あ[illegible]も用[illegible]、[illegible]初期[illegible]はしょっぱさ[illegible]RX-78-2[illegible]は[illegible]上[illegible]されるようでもあり、[illegible]後継機が出発されて、[illegible]ちゃ[illegible]なるように、[illegible]部[illegible]を[illegible]ようにしたい。[illegible]れて[illegible]FSWS[illegible]画[illegible]RX-81[illegible]画[illegible]、[illegible]も[illegible]ない。[illegible]FSWS[illegible]画は[illegible]その[illegible]を[illegible]ようにしたい。[illegible]、石[illegible]MS[illegible]作[illegible]を[illegible]工場から[illegible]国[illegible]、[illegible]と[illegible]なった。FSWS[illegible]画[illegible]イトが[illegible]されて、[illegible]になる地[illegible]の[illegible]、[illegible]アクハイ[illegible]。

クロ[illegible]ケ[illegible]が進めた[illegible]ダム[illegible]開発[illegible]画GP[illegible]画[illegible]にあ[illegible]FSWS[illegible]画の[illegible]セプトを[illegible]練[illegible]た[illegible]が散見されるようにRX-78GP0[illegible]セプトのサ[illegible]対[illegible]増[illegible]装[illegible]パーツを装着する[illegible]ルアーマー化の[illegible]が有わ[illegible]、[illegible]たのも[illegible]例を[illegible]ることができたら[illegible]またMS[illegible]ト[illegible]ライメ[illegible]アームト[illegible]ース[illegible]オ[illegible]キ[illegible]ムによって構成されるRX-78GP0[illegible]ことロ[illegible]ツ[illegible]ムと[illegible]HA-78-3重装[illegible]ア[illegible]ア[illegible]カ[illegible]タ[illegible]の[illegible]通[illegible]。[illegible]は[illegible]同[illegible]ことわ[illegible]ある表[illegible]武表[illegible]、[illegible]はサ[illegible]ト[illegible]ア[illegible]ー[illegible]や[illegible]重[illegible]装[illegible]を[illegible]ハ[illegible]ケ[illegible]ー[illegible]ケした増[illegible]装[illegible]パーツによるMSの強化[illegible]コンセプトは、そのしたGP[illegible]画機の[illegible]開[illegible]。[illegible]その後も数多く[illegible]開発されていくことになる。そうした意味においても、FSWS[illegible]画はMS開発史の中においても[illegible]ケ[illegible]イ[illegible]ケ[illegible]なものであったと[illegible]えるのではないだろうか。

FA-78NT-1 FULL ARMOR GUNDAM NT-1



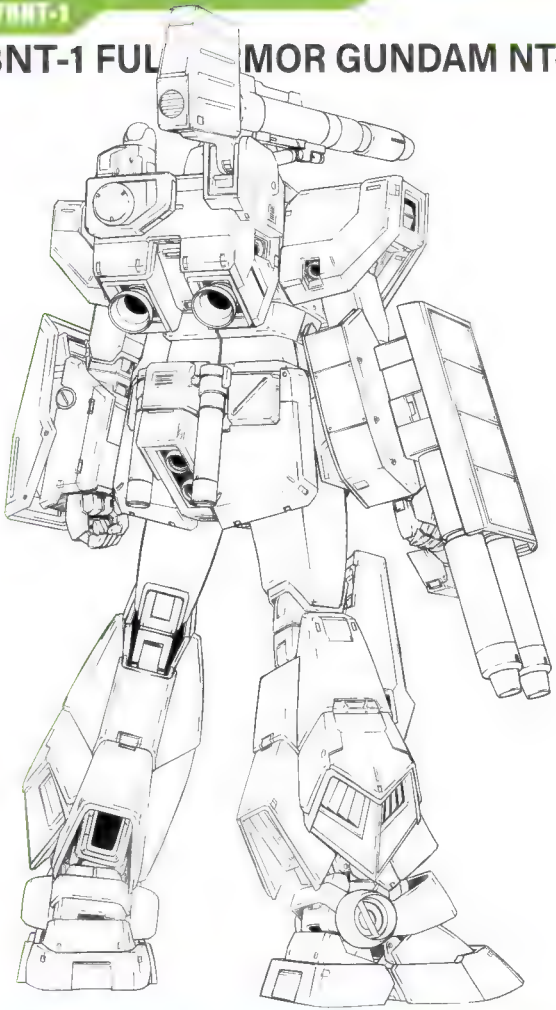
【FA-78NT-1〈フルアーマー・アレックス〉】

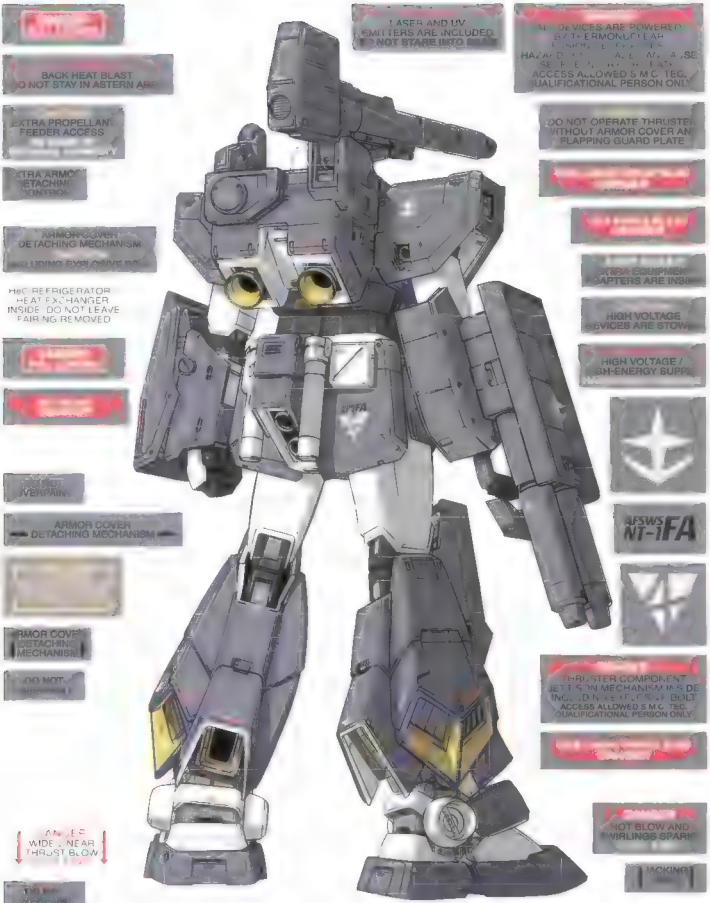
RX-78NT-1「アレックス」の装甲システムが、[illegible]後述[illegible]実行し、FA-78-1「ガンダム」用の装甲システムを組み合わせることで、そしてこれを装着した状態をFA-78NT-1「フルアーマー・アレックス」と呼称する。

元々はFA-78NT-1の機体スペックからは、本体に[illegible]ライトニングの為に形状こそ変えられていたが、ほぼ[illegible]の基本構成はFA-78-1のそれとほぼ同じ、本見[illegible]なくて[illegible]の[illegible]推進システムが[illegible]、本体システム[illegible]されていたもの[illegible]。装着されたFA-360mmロケット砲[illegible]の[illegible]ハイメガ[illegible]ビームライフルと[illegible]の小型[illegible]ミサイルポッドも、[illegible]。[illegible]に関しては[illegible]の[illegible]、[illegible]ように見えるが、[illegible]に関しては[illegible]が省いされており、詳細は不明である。

なお、年代の中、完成した[illegible]ではなく、[illegible]0081年[illegible]の中に[illegible]されたFA-78NT-1用の増加装甲パーツ一式、[illegible]が[illegible]ことから、[illegible]戦後、[illegible]は「[illegible]」[illegible]

FA-78NT-1 FULL ARMOR GUNDAM NT-1

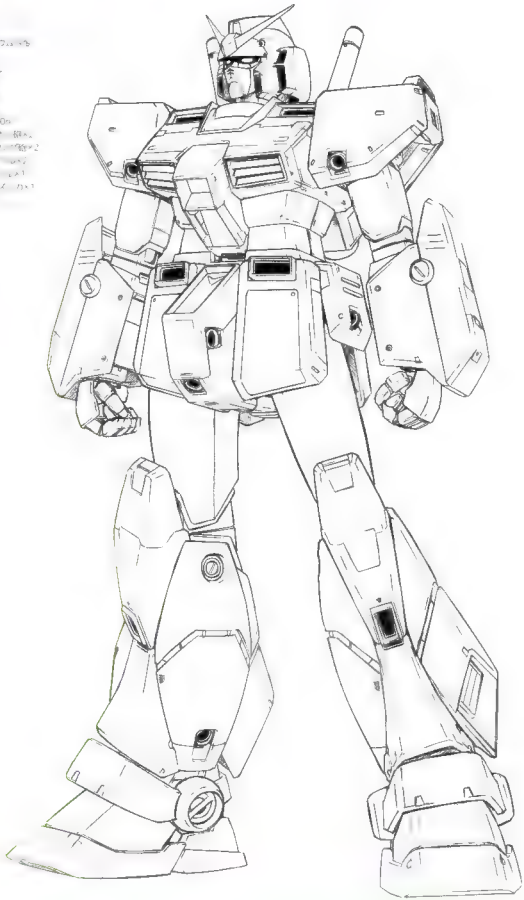


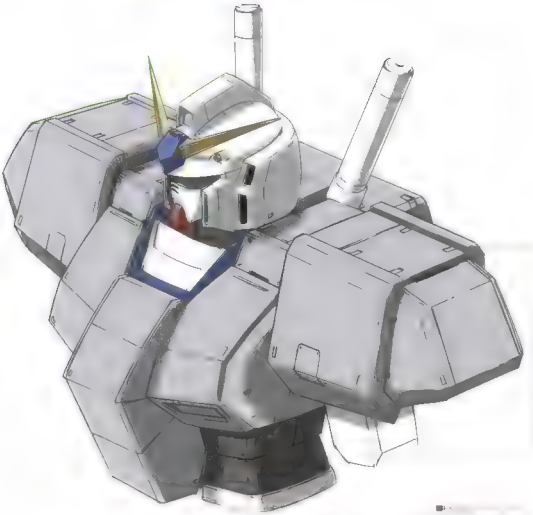

BACK HEAT BLAST
DO NOT STAY IN ASTERN ARE
EXTRA PROPELLANT
FEEDER ACCESS
ARMOR COVER
DETACHING MECHANISM
HEC REFRIGERATOR
HEAT EXCHANGER
INSIDE DO NOT LEAVE
FAIRING REMOVED
ARMOR COVER
DETACHING MECHANISM
LASER AND UV
EMITTERS ARE INCLUDED
DO NOT STARE INTO BEAM
DO NOT OPERATE THRUSTE
WITHOUT ARMOR COVER AN
FLAPPING GUARD PLATE
HIGH VOLTAGE
DEVICES ARE STOW
HIGH VOLTAGE /
HIGH ENERGY SUPPL
AFSWS
NT-1FA
THRUSTER COMPONENT
ACCESS ALLOWED S M C TEC
QUALIFICATIONAL PERSON ONLY
NOT BLOW AND
SPARKS
WIDE NEAR
THRUST BLOW
WARNING
HEAT ACCUMULATED MEDIUM SUBSTITUTING
CONNECTORS ARE LOCATED BOTH ENDS
KEEP CLEAR AND CLEAN


E.F.S.F
AFSWS NT-1FA
HIGH VOLTAGE / HIGH-ENERGY SUPPLY
ENTRY DOOR ARMOR HINGS DOWNWARD
ENTRY DOOR ARMOR SWEEP ZONE
LASER AND UV EMITTERS ARE INCLUDED
NON-IONIZING RADIATION HAZARD
FORCED SEPARATING / PURGE CONTROL
ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
AFSWS NT-1FA
EXTRA ARMOR DETACHING CONTROL
EXTRA ARMOR DETACHING CONTROL
THRUSTER COMPONENTS
ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
E.F.S.F
DO NOT
WIDE LINEAR THRUST BLOW
AFSWS NT-1FA
HOT BLOW AND HINGINGS SPARK
WARNING
HEAT ACCUMULATED MEDIUM SUBSTITUTING CONNECTORS ARE LOCATED BOTH ENDS
KEEP CLEAR AND CLEAN

RX-78NT-1 GUNDAM NT-1 "ALEX"

[RX-78NT-1 ALEX]
シリーズ　RX-78NT-1
全高　18.0m
頭部中心　4.0m
腰部中心　3.5m
[illegible]
[illegible]　42.4kN
重量　35,100kg+[illegible]
[illegible]kg×2
[illegible]kg×[illegible]
[illegible]114.0kg
[illegible]　[illegible]
[illegible]　60mm[illegible]×[illegible]
[illegible]78-[illegible]78×2
[illegible]
[illegible]
[illegible]×1
[illegible]×1
[illegible]×1





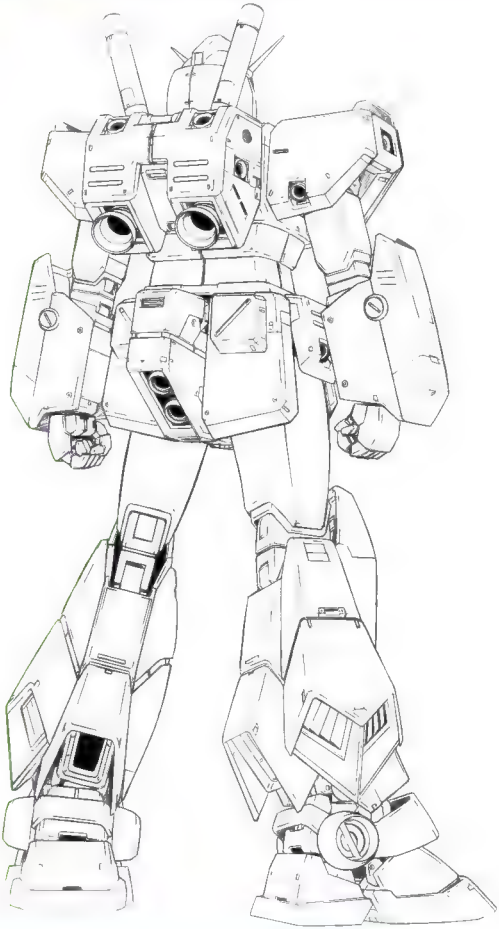
[illegible] CHOBHAM ARMOR

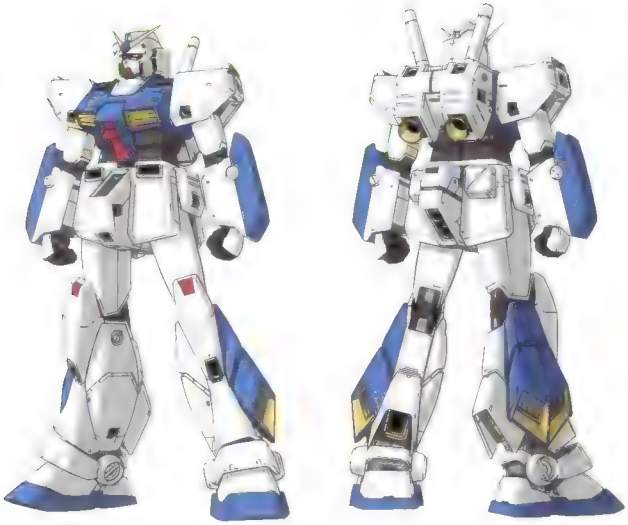
【RX-78NT-1FA〈ガンダムNT 1〉】

FSWS計画にもとづいて開発された増加装甲を[illegible]ムまで[illegible]試作[illegible]として[illegible]されたが、中途半端な[illegible]ままに終わった。その[illegible]純粋な耐弾性の[illegible]を目的とした着脱式装甲の開発も進められていた。その成果の[illegible]が、チョバム・アーマーと呼ばれる複合装甲である。[illegible]チョバム・アーマーとは、[illegible]世紀[illegible]イギリスのチョバムで研究開発された戦車用の[illegible]装甲[illegible]ことはあるが、正式には[illegible]Chobhamではなく、Ceramics Hybrid Outer-shelled Blowup Action Materialsであり、[illegible]複合体をはじめとする爆発反応材質の頭文字を[illegible]CHOBAMと表している。爆発によって積極的に自己破壊を行うことで着弾の運動エネルギーを消散させることを目的とする爆発反応装甲自体は当時すでに存在していたが、チョバム・アーマーはいくつかの点で新たな改良が加えられていた。たとえば、構造[illegible]を用いることで爆発時に大量の金属片を周囲へ撒き散らしてしまうという本質的な欠点を軽減させているほか、多層化することで幅広い弾種に対して効果を発揮するよう工夫されていたという。

[illegible]ように用いられ[illegible]チョバム・アーマーは、RX-78 [illegible]に代表されるFSWS計画機に採用されることはなかったようだが、詳しい経緯は不明であるものの[illegible]

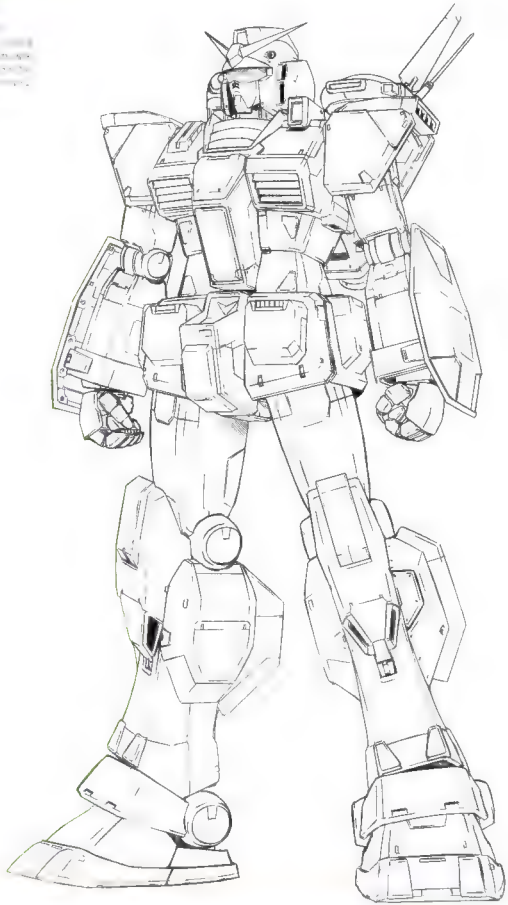
RX-78NT-1 GUNDAM NT-1 "ALEX"





[illegible]

RX-78SP GUNNER GUNDAM



【RX-78SP（ガンナー・ガンダム）】

[illegible]

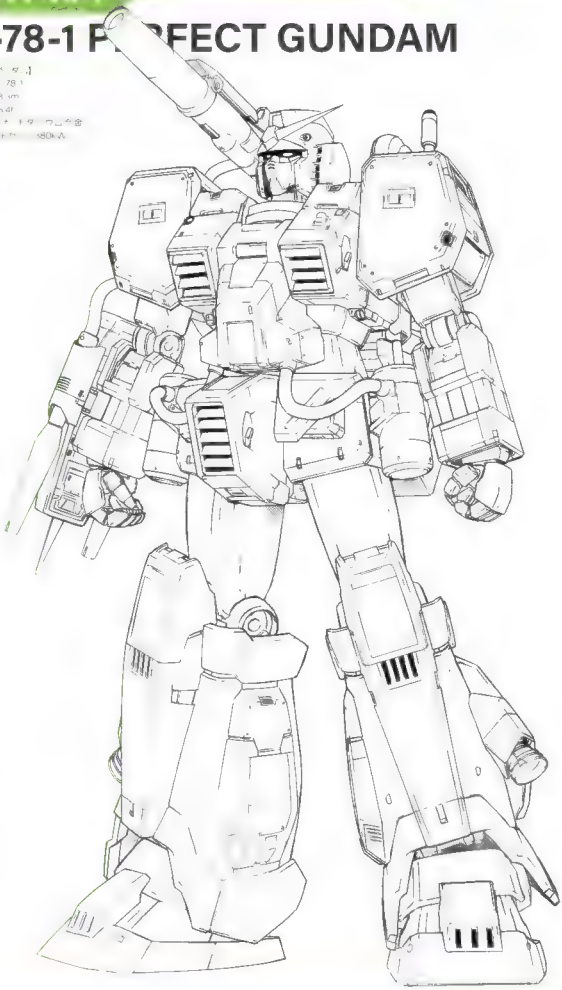
[illegible]

[illegible]

[illegible]

PF-78-1 PERFECT GUNDAM

[illegible]
[illegible] PF-78-1
[illegible] 18.4m
[illegible] 74.4t
[illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] 480kN



【PF-78-1〈パーフェクト・ガンダム〉】

まず最初に断っておきたいのは、PF-78-1は地球連邦軍[illegible]MS[illegible]機体[illegible]機を[illegible]されて[illegible]されたもの[illegible]機連[illegible]開発[illegible]対[illegible]開発者も[illegible]SWS計画[illegible]よる機体[illegible]資料[illegible]して[illegible]

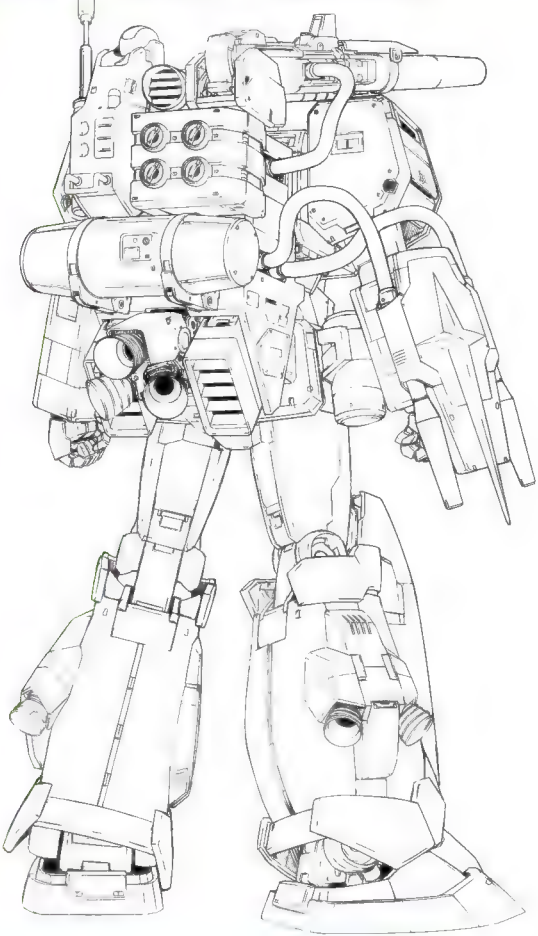
閲覧[illegible]された[illegible]PF-78-1は RX-78[illegible]有する[illegible]RX-78[illegible]類似[illegible]を有する機体[illegible]本機はSWS計画の[illegible]

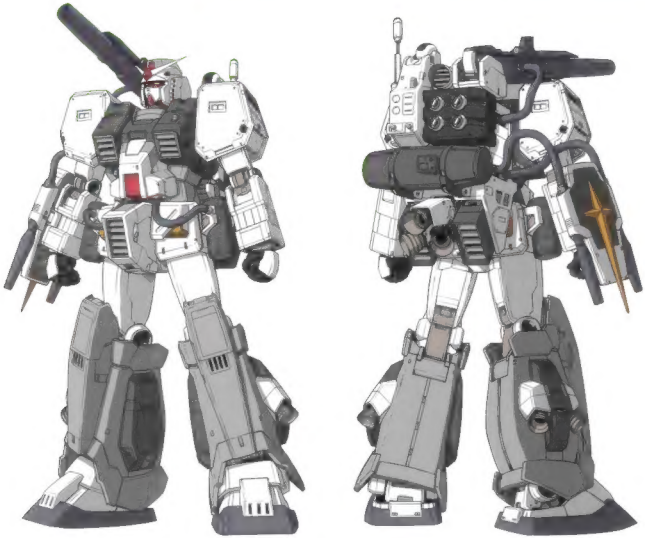
[illegible]並みのロケット・エンジンを搭載する[illegible]開発された機体ではない[illegible]PF-78-1の開発を[illegible]SWS計画の[illegible]RX-78やFA-78-2の設計[illegible]携わっていたチーム[illegible]は別のチームであったといわれている。

そのため[illegible]RX-78の基本性能を最大限に発揮させることにより[illegible]目標を[illegible]より汎用的な運用も可能な機体を目指して[illegible]

[illegible]ビーム・[illegible]は[illegible]ライフルが抱えていた弾数問題の解消[illegible]を採用した[illegible]連続射撃可能回数[illegible]標準装備の[illegible]ライフル[illegible]性能[illegible]開発されたサブ・ジェネレーター[illegible]

PF-78-1 PERFECT GUNDAM



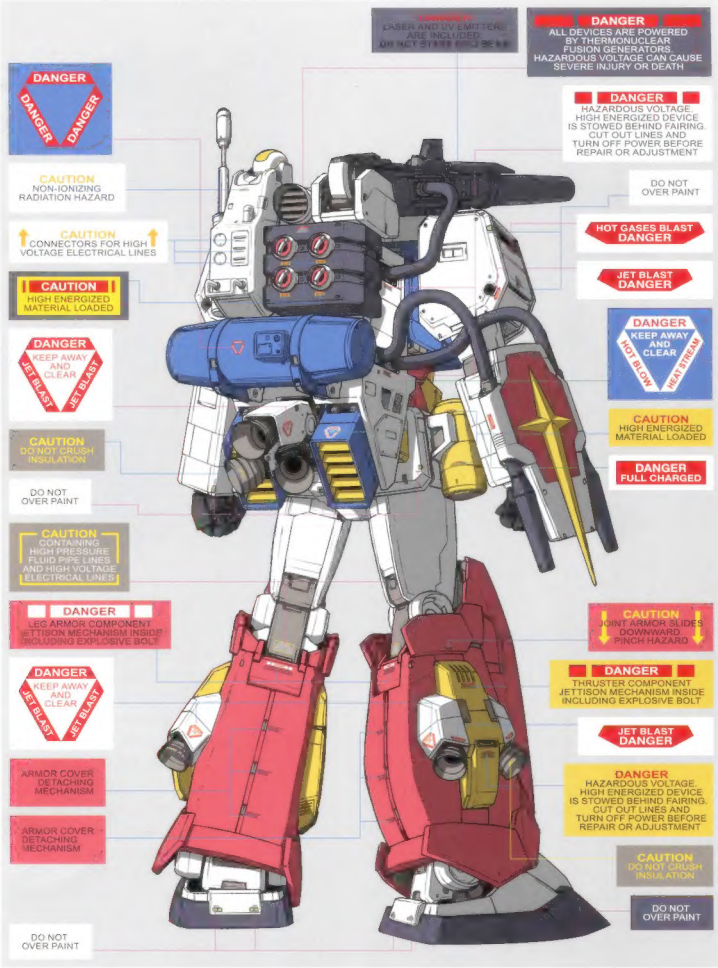


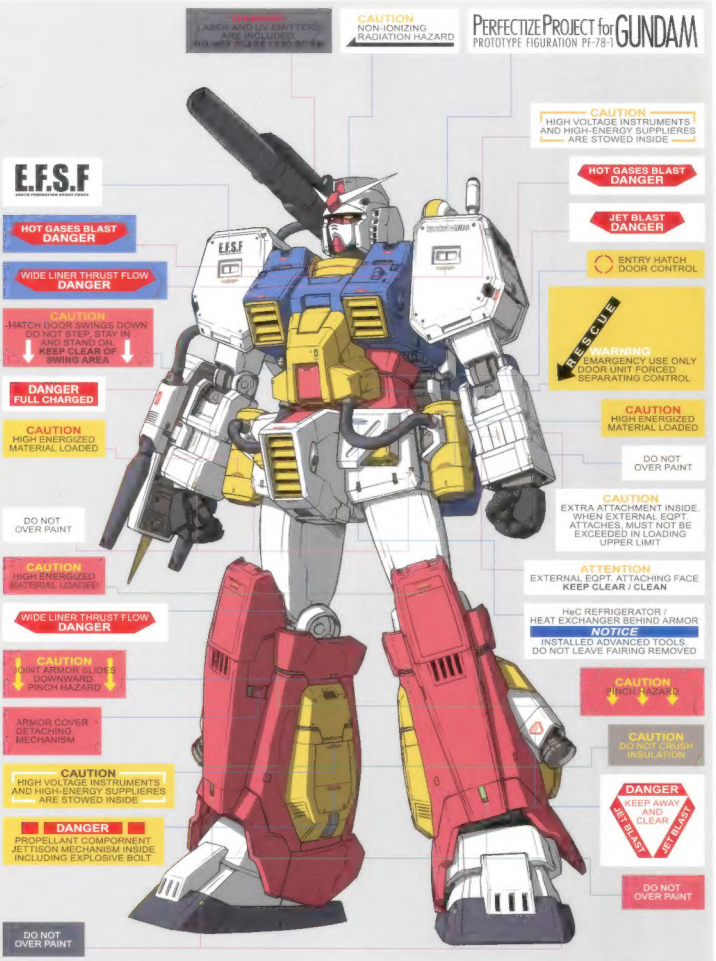
■ロー・ビジビリティ塗装

パイプを介して接続する必要があるなど、改善すべき点も多いものとなっている。そのため、別案としてFA-78-1が装備した2連装ビーム・ライフルを、側面シールドの形状を変更するなど若干の改良を加えた上で、採用する計画もあったようだ。また、右肩部にはFA-78-1と同様に、360mmロケット砲を搭載。ビーム兵器の撃ち尽くし対策を講じることとなっている。これ以外の武装としては、肩部の増加装甲パーツに内蔵されたミサイル・ベイと、大型シールドの裏面に備えられた4基の宇宙機雷、そしてビーム・サーベルが挙げられる。

このように本機の武装は、すべてが実現していたとするならばFA-78-1と同等以上の水準という充実ぶりであった。その上、増加装甲パーツの装甲厚は増しており、本体重量は76.4tにも達したという。ところが、本機が鈍重であったかと言えば、そうではない。背部ランドセルと脚部には大出力を誇るロケット・エンジンを搭載。機動性の面では、むしろRX-78-2より向上していたほどであったと記録されている。また、本機は推進器に併せて大容量のプロペラント・タンクも搭載、この処置によって宇宙空間における長時間ミッションにも対応していたようだ。ただし、あまりの高性能ぶりに、一年戦争当時の技術レベルを逸脱しているとの指摘があることも確かであり、開発計画があったとて実現は不可能であったとする意見も根強い状況である。

ちなみにPF-78-1には、一説によれば〈Gキャリアー〉なる補助航宙機を建造する計画もあったという。これは、C.F.V.の設計データを部分的に流用したもので、PF-78-1用増加装甲パーツを簡易的に装着して運搬することを目的とした機体であったようだ。また、頭部用の増加装甲パーツの設計が進められていたとも伝えられているが、こうした追加兵装を含めて、本機の実在を証明する決定的な証拠は、今のところ、得られていないのが実情である。


WARNING
LASER AND UV EMITTERS ARE INCLUDED
DO NOT STARE INTO BEAM
DANGER
ALL DEVICES ARE POWERED BY THERMONUCLEAR FUSION GENERATORS. HAZARDOUS VOLTAGE CAN CAUSE SEVERE INJURY OR DEATH
DANGER
DANGER
DANGER
DANGER
HAZARDOUS VOLTAGE. HIGH ENERGIZED DEVICE IS STOWED BEHIND FAIRING. CUT OUT LINES AND TURN OFF POWER BEFORE REPAIR OR ADJUSTMENT
CAUTION
NON-IONIZING RADIATION HAZARD
DO NOT OVER PAINT
CAUTION
CONNECTORS FOR HIGH VOLTAGE ELECTRICAL LINES
HOT GASES BLAST DANGER
CAUTION
HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
JET BLAST DANGER
DANGER
KEEP AWAY AND CLEAR
JET BLAST
JET BLAST
DANGER
KEEP AWAY AND CLEAR
HOT BLOW
HEAT STEAM
CAUTION
DO NOT CRUSH INSULATION
CAUTION
HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
DANGER
FULL CHARGED
DO NOT OVER PAINT
CAUTION
CONTAINING HIGH PRESSURE FLUID PIPE LINES AND HIGH VOLTAGE ELECTRICAL LINES
DANGER
LEG ARMOR COMPONENT JETTISON MECHANISM INSIDE INCLUDING EXPLOSIVE BOLT
CAUTION
JOINT ARMOR SLIDES DOWNWARD. PINCH HAZARD
DANGER
KEEP AWAY AND CLEAR
JET BLAST
JET BLAST
DANGER
THRUSTER COMPONENT JETTISON MECHANISM INSIDE INCLUDING EXPLOSIVE BOLT
JET BLAST DANGER
ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
DANGER
HAZARDOUS VOLTAGE. HIGH ENERGIZED DEVICE IS STOWED BEHIND FAIRING. CUT OUT LINES AND TURN OFF POWER BEFORE REPAIR OR ADJUSTMENT
ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
CAUTION
DO NOT CRUSH INSULATION
DO NOT OVER PAINT
DO NOT OVER PAINT


DANGER
LASER AND UV EMITTERS ARE INCLUDED
CAUTION
NON-IONIZING RADIATION HAZARD
PERFECTIZE PROJECT for GUNDAM
PROTOTYPE FIGURATION PF-78-1
CAUTION
HIGH VOLTAGE INSTRUMENTS AND HIGH-ENERGY SUPPLIERES ARE STOWED INSIDE
E.F.S.F
HOT GASES BLAST DANGER
JET BLAST DANGER
HOT GASES BLAST DANGER
WIDE LINER THRUST FLOW DANGER
ENTRY HATCH DOOR CONTROL
CAUTION
HATCH DOOR SWINGS DOWN DO NOT STEP, STAY IN AND STAND ON, KEEP CLEAR OF SWING AREA
RESCUE
WARNING
EMARGENCY USE ONLY DOOR UNIT FORCED SEPARATING CONTROL
DANGER
FULL CHARGED
CAUTION
HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
CAUTION
HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
DO NOT OVER PAINT
CAUTION
EXTRA ATTACHMENT INSIDE, WHEN EXTERNAL EQPT ATTACHES, MUST NOT BE EXCEEDED IN LOADING UPPER LIMIT
DO NOT OVER PAINT
CAUTION
HIGH ENERGIZED MATERIAL LOADED
ATTENTION
EXTERNAL EQPT, ATTACHING FACE KEEP CLEAR / CLEAN
WIDE LINER THRUST FLOW DANGER
HeC REFRIGERATOR / HEAT EXCHANGER BEHIND ARMOR
NOTICE
INSTALLED ADVANCED TOOLS, DO NOT LEAVE FAIRING REMOVED
CAUTION
JOINT ARMOR SLIDES DOWNWARD, PINCH HAZARD
CAUTION
PINCH HAZARD
ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
CAUTION
DO NOT CRUSH INSULATION
CAUTION
HIGH VOLTAGE INSTRUMENTS AND HIGH-ENERGY SUPPLIERES ARE STOWED INSIDE
DANGER
KEEP AWAY AND CLEAR
JET BLAST
JET BLAST
DANGER
PROPELLANT COMPORNENT JETTISON MECHANISM INSIDE INCLUDING EXPLOSIVE BOLT
DO NOT OVER PAINT
DO NOT OVER PAINT

MASTER ARCHIVE MOBILESUIT FA-78-1 FULL ARMOR GUNDAM

STAFF

【監修】
株式会社サンライズ

【メカニカルイラスト】
湯川達至
シラユキー

【テキスト】
大脇千尋
大里 元
西岡浩二郎 (リバージュ株式会社)

【CGモデリング】
ナカジマアキラ
大里 元

【コーションマークデザイン】
大里 元

【SFXワークス】
GA Graphic 編集部

【レイアウト】
橋村 空 (GA Graphic)

【カトパイザー】
巻島敏人

【編集】
佐藤 元 (GA Graphic)
村上 元 (GA Graphic)

【出版物流】
※商品開発
清藤弘行 (SBCreative)
※業務管理
正木俊男 (SBCreative)
※営業
永井 聡 (SBCreative)
伊藤和幸 (SBCreative)
※広報宣伝
大野真和 (株式会社)
渡部由郎 (株式会社)

【協力】
※編集協力
西岡浩二郎 (リバージュ株式会社)
※イラスト・彩色協力/モデル動作
志条ユキマサ

【スペシャルサンクス】
桜田勝一 (number4 graphics)
柴刈俊一

■マスターアーカイブ モビルスーツ FA-78-1 フルアーマーガンダム

2020年4月20日　初版発行

編集　ホビー編集部
発行　GA Graphic
発行人　小川 淳
印刷　共立印刷株式会社
発行　SBクリエイティブ株式会社
〒106-0032 東京都港区六本木2-4-5
営業部　TEL 03-5549-1201

© 創通・サンライズ
© SB Creative Corp.

ISBN 978-4-8156-0528-5

Printed in Japan
※本書に関するお問い合わせは、書面にてお受けしています。
※本書の無断複製・複写・転載を禁じます。
　落丁・乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されています。

※本書『マスターアーカイブ モビルスーツ FA-78-1 フルアーマー・ガンダム』は、『公式設定』ではなく、ガンダムシリーズ作品に登場するFA-78-1 フルアーマー・ガンダムについての歴史・技術研究書であり、作品世界において刊行された書籍、という想定に基づいて執筆されています。

SB Creative　GA Graphic